

りしに海上に小き箱浮みありて浪にたゞ上ひ隣邊による聖徳太子の御傍まできたる取上御
 覧あれば中へ水の入ぬやうにぬり込に上へ書付あり太子是を御覧ありわらなつかしや
 我七世の守本尊なりとて拜し給ふ上書に皇天日本國王麾下天竺南岳門弟中とあり南岳は天
 竺にて我前生なり我日本の王子に生れ來れば斯のごとくにして海上に浮め日本へわたり申
 へしといひ殘せしが今ふたゞび拜し奉るなりとて箱をひらき給へば錦の袋に入金銀の御
 厨子にて一寸八歩の觀世音ぼさつなりあら有がたやなつかしやと涙をながし給ふ太子は數
 世觀音の化身なれば先の世の事此世未來まで能々御ぞんじある事なり夫より御身を放たず
 尊敬し給ふ御年十六歳にて守屋を退治あり攝津國天王寺を御建立あるべしとて國々へ材木
 御見たてに御廻りありしに山城の國愛宕郡まで御出ありし折しも夏の事なれば少し御すい
 みあらんと大なる森の陰に御馬をとどめ御涼みありし森のあと今六角堂の地なり其頃は
 山城は在所にて都といふは大和國山邊郡なりながつきの都いかるかの内裏とて今の橋寺
 の邊りにて今は田畑の内にて其時の内裏の礎あり其敷いくつといふ事御公儀の御帳面に記
 しありとなり時に聖徳太子は愛宕郡の内に清水の流ありける處にて御はたをぬがせられ衣
 に御守をとへ邊りの柳に懸置せられ御手洗ありてのち又も御肌につせられんとし玉ふに



六角堂の面影
 人のほろぬき
 とらふあけ
 こころあけ
 くらわーと
 うま

不思議や御守の觀音數千貫目の重さとならせ給ひてさらには上らせ玉はず川勝跡見などの
 強力にても中へすこしも動けず事おたはず太子ふしぎに思しめし此夜は此所に通夜し給
 ひしに觀世音御告に此處は末世にいたり行人しげき往還となるべし御身に七世つぎをひま
 ゐらせしが今よりこの所にといまり末世の衆生を濟度せんと思ふなり堂のかたちを六角と
 なし建立あるべしとの御告なりしかば太子には今更御肌を放し給ふ事御名残り多く思召と
 も觀世音の御告なれば是非もなく堂を建べしと思めす折から一人の老婆來り大木の立木の
 杉を詠め餘念なき體を太子御覽じていかなる杉ぞと御尋あるに日毎に梢に紫雲のかかりし
 ゆゑ神木とて存候なりと申せしかば太子すなはち此木をさらしめ堂を建立し給ふに餘
 木をもちひまし六角の堂を御建立し給ふ其後通か程を経て此平安城の都と成しとて一條よ
 り九條まで町わりなせるに此六角堂大道の真中に當るゆる南北に引よせんとすれども太子
 御建立の堂なればかしがたく免せん角せんと評議の折から一夜震動雷電して風雨甚し
 かりしが夜おけて見れば六角堂其ま三十間計北によりて往還ひらけたる事ふしぎといふ
 も餘あり是を諸天善神觀音二十八部衆のなし給ふ處ならんと申あへり
 ○爰にふしぎの利生あり十二歳になる女の子目々手習に行き道なれば六角堂へまわり手

習ふ中にも南無觀世音菩薩といふ事を時ふしには書けるが子供ころにももつたいな
 しど其どころを引よせて六角堂のさいせん箱へ入おさける其のち成人して縁につぎ懐
 胎し年十九なれば厄年なりとてふた親をはじめわんじ何とぞ安産をどねがひけるにさ
 んのけつぎて事のはか難さんにて三日はども兎や角とさげども命の程もおぼつかな
 し此うへは腹を割てなりとも身二つにいたし度となげざる處へ老僧一人きたりて此
 うちはこの外にとり込めたるやうす何事なるやといふ明てかやうくと答ふさらば此
 符を遣すべし清き水にていたいかせ上速に出産あるべし尤男子ならば左女子ならば右
 の手をひらき見るべしといひて行かたしらす兩親はよろこびいとぎむすめにのませし
 ひるにたちまち出産なしてしかも男子なれば左の手をひらき見るに大悲の名號なり有
 がたく思ひ水にて清め佛だんに入おさしが其夜産婦の夢に老僧來たりて我は六角の救
 世菩薩なりなんぢ幼年のとき我を信じ名號をかきてこれをさいせん箱へ入置し心ざし
 のめつぎにより此度くるしみをたすけ得させたるなり名號をよく見ていちくしん
 ぐわするべからずと告給ふ産婦ふしぎに思ひ名號をどくと見れば我いとけなき時に
 書てさいせん箱へ入たる名號にてぞ有けるこれよりは親子とも別して信仰人にこねた

御詠歌

わがおもふころのうちは六つのかど

たゞまるかれさいのるなりけり

此六つのかどとはつのだいふ字にて五塵六欲のじつの角なり六ぢんこの角にひかるゝゆゑに往生のたまはたげとなりしかれども其角はわが力にては折べからず観音の御めぐみにて角あるも丸くなし成佛を願へとなり五塵六欲同事なることはんにや心經にくはしく佛の説たまふ處なりそれを知んとならば心經抄圖會といふ本にくはしく童蒙の耳に入安と書有見るべし〇何れかにごりたる心あれば煩魔王とつを見はりたまへば其罪のがれがたし眼口耳のみつは是はどこはき大切なる物はなくひかしよりいせしめ給ふ歌なりとて

聞ざるも見るもよしと申せどもいはざることはまざるなりけり
とは申事の候へとも目見ゆされば尊の佛像を拜む事ならず口なくては念佛申事ならず耳なくては神儒佛の有がたき王法國法をさく事あたはされば何とせん歌にも
人の心かゞみにうつるものならばまごや形の見にくかるらん

どあり鏡にうつりあれども人の目にて得見ざる故なり鏡にうつるごとく見ねたらばいかはと美しき人たりとも此歌のどとくまごや見ぐるしかるべきなり君けいせいと持はやさるゝ流の身は心のうちはまごかしと皆思へとも身に綾錦をまごひ顔に紅粉をぬりばかりするゆゑる皆人これにまよひ先祖よりゆづり受たる家藏まで他人の物となし其身ばかりか眷族まで一生難儀の身となるもの世に多し是等眼前の鏡にうつらねばこそおかしき事なりかねにて作たる鏡には上へのみうつるなれども心の鏡にうつし見なば皮より内にさまぐゝのめもひもよくうつるべきにそれに迷ふといふはあかしまものなり六根に六塵のなま悟りの身となれよとの観音大悲の御願なれば幾度も歩をほこひ願ふべき事大事なり此六臂如意輪觀音の御像の六つの御手は六道をすくひましますみなそれぐ役々の御手なり右の御手三本は思惟の御手といふ頰杖になされ一本は如意寶珠を持給ひ一本はりんどうを持ち一本はいまだひらかさく蓮華を持給ふ又一本は安座の御手といふて安座の石をおさへさせ給ふ左にりんほうを持せ給ふは天人をたすけ給ふ入葉の蓮華は人々しよくの佛なれば其衆生を助んがためにもたせ給ふ安座の御手は修羅道を助けんどの御手なり右に百八の珠數をもたせ給ふは畜生を助得るせんどの事なり畜生は口を體として成ものなれば人間も愚痴なるものは畜生

に近しつゝしむべき事なり観音の大慈大悲には百八の珠数のかずは觀世音の知恵をあらは
 したる數なり如意寶珠は餓鬼道をすくはせ給はんとの御事なり如意とは心のごとくど書
 文字なり世にこれをよりふしの珠といひ習はせり是はわやまてり如意寶珠なり餓鬼はた
 ひだるきゆゑ物を喰たがる目に高盛の飯を見ながら喰にかゝれば炎となり水を見てはうれ
 しやど飲にかゝればもぬり百千萬劫食物を喰事あたはず水呑こどもならぬ其苦を觀世
 音の大慈大悲にて心に思ふのをみえたすけ得させんと如意寶珠を持たせたまふなり思惟の御
 手は地獄道にゐて一百三十六地獄の罪人をいかゞして助得させんと頬杖をつき御思惟な
 ざるなり人間にても物の思案する時ははう杖を突がごとし觀音に御思案ある事はあらぬ
 ども其御すがたをあらはして六道の者の心をさつし御心身をくだかれ給ふて罪人をたすけ
 給ふ御尊像なり依て西國願禮はいたすべき事なり
 六角堂の寺中坊舎五軒あり其内池の坊といふあり當時は立花の宗匠なれども是も花瓶にた
 てる事が始にて聖徳太子より始りしなり

花山院御製

あたにちる花見るだにも有ものを寶のうゑ木思ひ社やれ

世をいのる春の始の計なれば君が御幸のあとばかりけり
 二つなくみつなき法と聞つれば五つのはりあらじと思ふ
 百歳といのる心のはかなさになむあみだぶの無量壽なるに
 いつはりのなき世の人の言葉を空にしらす有明の月
 心からこゝろの月のすみかねて幾世の間に迷ひさぬらん
 にどりある水にも月はやどるぞ思へばやがてすむこゝろかな
 夜もすがら佛の道を尋ねればわが心にぞたづね入ぬる
 出るども入ども月のふもはねば心にかゝる山の端もなし

花山院前内大臣
 和泉式部
 法然上人
 蓮生法師
 法印宗尋
 願蓮法師
 一休和尚
 夢想國師

西國三十三所 觀音靈場記圖會四

○十九番 都革堂行願寺

人皇六十六代一條院御宇寛弘二年建立なり關山行 國上人は豐後國早見郡の人なりしが渡世の業とてもあらずして狩獵を好みて遊獵せしにあるとき狩に出られしに牝鹿を追出しけり得たりと弓に矢をつがひ引しばかり切て放つにいかい手のくるひしにや鹿の腹を矢の根にてすり切ければ其破し處よりはらみ居ける子鹿もれ出る血おびたしく出てたぬるべさやうもなく見ゆしに親鹿それをもかまはず出たる子鹿の血をぬぶり居たる體を見るにいかなる剛氣の獵を好めるものなれども忍がたき有さまなりしが親鹿次第によりて終に死す彼男この有さまを見て畜生さへかはどまて子と不便にふもふもの心づよくも此年頃まで數限りおぼゆる生る物の命を取殺せしが生有もの皆々親妻子兄弟なくてかなはず其ものゝ歎さかなしまん事人間にたがふ事なくそれともおもひやらすことに渡世にするにもあらずた一時の興に乗じかゝる殺生をなせし事の悔しき上年齢若きといふにもあらず今にも我身も死せんことばかりがたし後世の事こそ恐しけれ今よりふつゝ殺生をいさるべしと發起

して此鹿こそ我にほだいな心を興させ異しとて其鹿の皮をはぎ衣の上にて其皮を着て所々方々と修行せられけるこれ則はんう即菩提とぞ成にけり名を行圓といふ諸國をめぐり其後都へ登て繁昌の地なれば定て邪見のもの多からんと思ひ市町を修行してめぐり給ふ衣の上にて鹿の皮を着たるはいかなるぞと問人あればわが身の上を物がたりして必く殺生はすまじきとそれゆゑ我は出家になりしとさんげをなし革を着て修行ありし故革上人と異名せしなり此僧常々觀世音を信じ普門品を讀給ふある夜の夢に異僧の老翁忽然とあらはれ汝觀世音の靈佛を望まば下加茂の神前に神木として注連を張わたりし何れの世より有ともしれぬ桑の木も靈木あり其木を以て汝千手觀音大悲の像を刻み安置すべし是正眞の觀世音ばさつなり末世の衆生を助得させよとの夢の御告あり夜明てたうち下加茂へ參詣し社人をたづね行願僧は一條通小川の邊に庵をむすび修行いたす行圓と申ものなり此あかつきにかやうくの夢の御告をかうふりしに上り神前の桑の木を所望にまわりしといふに社人も昨夜明神の御告に神前の桑の木は觀音の靈木たり行圓といふもの迎に來るべし早速に伐てわたすべしと我も神託をかうふりしより貴僧の來らせ給ふを待しとて此木を伐りてあたへしかば行圓は明神の御告かたぐいよく信心肝にめいじ則わが庵に歸り一刀三禮をなし三年三月に

して千手観音をささみ艸庵に安置し夫より行圓は京中を廻りかやうくの下鴨明神の神託にて神木にて観世音出来させ給ひしうへは何卒安置し奉る堂舎建立の志願なりとて勸化し給ひしに人々その高德を稱譽して財寶施入おびたいしかりしかば程なく本堂建立成就す行圓が一心の願望成就せしにより行願寺と名付らるまた草堂といふは草をさしにより草上人ととなへ其上人のたて給ふにより一條の草堂ととなへしゆゑなり

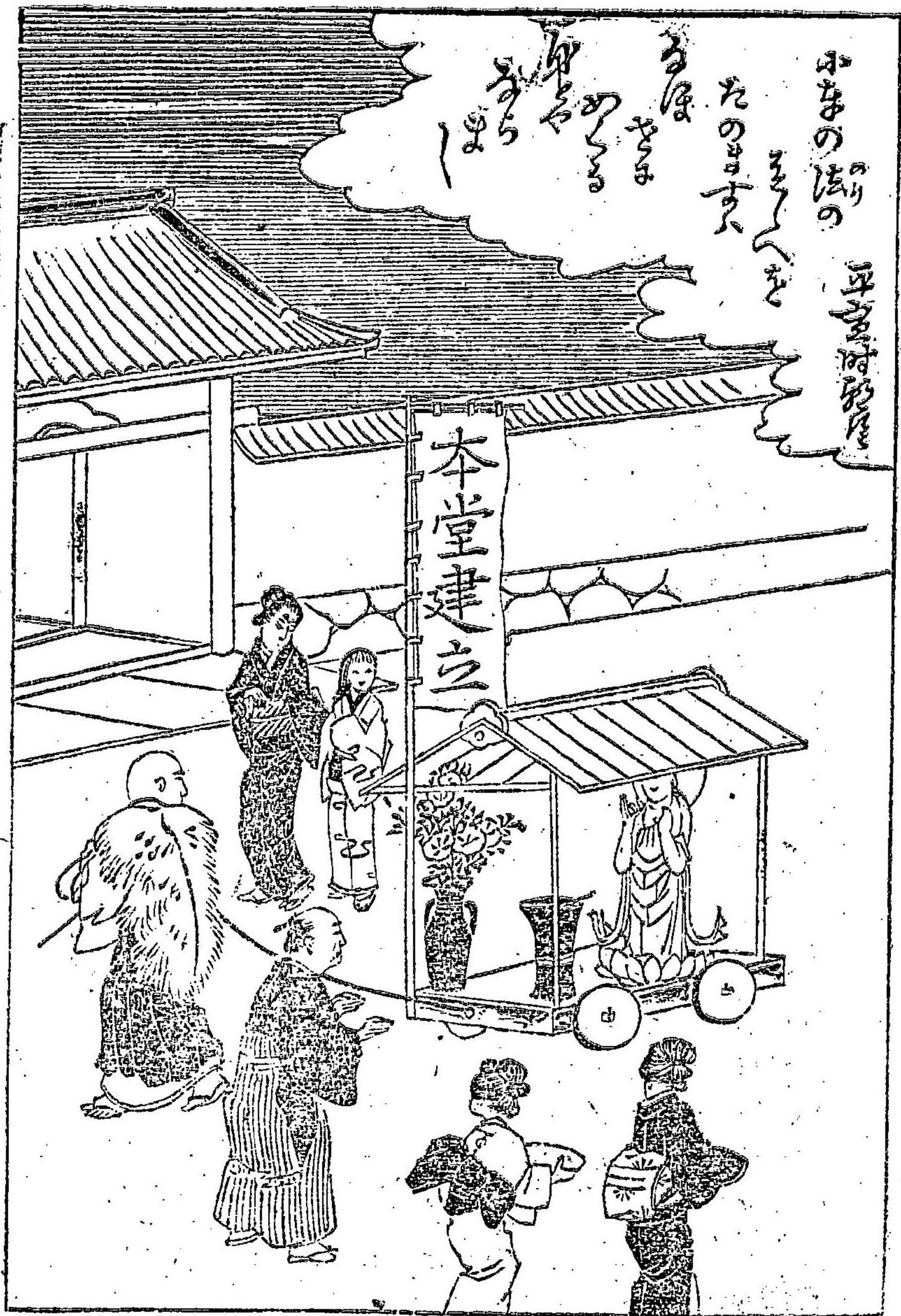
さき市中の寺院と鴨川の西岸へうつさる今の寺町竹屋町なりけるがゆゑに今も寺の門に一條草堂といふしるしとたてたるはこのゆゑなり

御詠歌

花を見て今はのぞみもかう堂の

にはの千くさも盛なららむ

花を見て今は望もかう堂のといふは観音の御手にいまだひらかぬ蓮花を持たまふに是八葉の蓮花なり人間五臓の腎の臓は蓮花 佛性の種なり此花ひらけば佛法を得る大悲の持せ給ふ蓮花もその如く花を見てほだいを願ひ佛性を得ば今は望もかう堂の庭の千くさもさかりなるらんとは參詣の人々の數多くなるをよるこび給ひ千人より萬人萬々人も人の種の庭の千くさも繁る如くにどの歌なり皆人観世音の大慈大悲の御めぐみを受けて佛體と成べし千手



観音の御手の縁をもつて庭の千種とも詠むべしとの心なり女人懐胎とならば此観音に信心なし参詣すべし又子なきものは別て信仰なし給へ子孫長久はんじやうする事うたがひなし

○こゝに近き御利生のありし事都の東に岡崎といふところに大工ありてまゝにち都へ仕事に行けるが往もどりにこの葦堂へ参り信心すること年久し生國は丹波の笹山のものにて幼少のとき兩親にはなれ伯母にぞたてられし人なり岡崎に住けるが女房を持しに此女心あしく近所の若者となれそめ密通しわが男まいにちく／＼かせぎに出て留まなれば彼密夫を引入けるしかるに大工の友だちこれをしりひそかに大工につげしらせければわれじきに見ぬことなれば見とゞけし上のこと／＼おもひわざとしらぬかほにてわたりけるに丹波なる伯母の病氣なるよし聞て大恩ある伯母なれば其まゝ用意し今宵通夜にくたるべししかし愛とりたる仕業あれば其都合かた／＼一寸と京都へ出たる間に密夫此ことをききてよき時節こそ到來せり今夜あどより付け行て老の坂にて切害してうしろ安くななく樂しまん女房これをきこてはよき計となりさりながら野鼠かへつて猫をかむといふ事もあればいともあやふしそれよりは道中の辨當に毒を入てもたせなば道筋いつれにてもくはれしとき其處にて死なればあとの難もあるまじ其方がよか

るべしと密夫としめし合し毒薬をど／＼のへ辨當の飯菜にしたゝか入置しにかの大工はいそぎ立歸り日暮過より出立しかの辨當をこしに括り神ならぬ身のかなしさはかゝるたくみもいざしらすいそぎて都へ出で葦堂に参詣し伯母の病氣はんぶくを祈願し道をいそぎ丹波路さして下りしが大江の坂にさしかゝる頃はもはや夜半頃なりしが道の真中に大男一人たちはだかりわたりしかば心驚きながら其かたはらを過んとするにかたはらより又一人あらはれ出で道の前後をふさぎ大音にて衣類調度をわたすべしといふに大工は恐る／＼わたくし儀は丹波まで大病人を見舞に行ものなりゆるさせ給へどわぶれども聞入れず早くぬがすば殺害せんと脇さしを抜てひらめかせば大工も此上は力なく帯引はどき衣類をぬぎぢばんをもとひて其場をのがれて十間ばかり行どおもひしがいかいほしけん足いたみて一步も行こと叶はずさればとて此まゝあらば悪黨がために命をはるべしとむりに歩行とすれども行かれさればやう／＼四つばいに這て道ばたの樹木のかげにかくれわてひたすら心中に観世音を祈念するに盜賊はこなたをながめにぐるはく一生懸命にげ行しと二人はうち笑ひ衣服をふるしきにつゝみ天のあたへと辨當まで捨行しぞさいはひ空腹なりとも／＼に賞翫せんと兩人は石にこし

を掛けてこれを食するにふしぎや一人の男ウソといひて仰向に倒るゝをいかいせしと
 今一人立よらんとして同く暈と倒れ其まゝ動きもやらすかの大工は此ありさまを月か
 げに見てふしぎをなしやゝながめ居るに兩人とも即死の體なればそつと立上り見るに
 足の痛みも治して歩行心のまゝなれば恐るゝかの兩人がそばへ立より見れば兩人と
 もおびたいしく吐血して死したるを見てもたゞびびつくりせしが何にもせよかた
 とけなしと我衣類をとり返し手早に着し調度ともひるひとりてかの喰かけたる辨當こ
 そふしぎなれと引包み腰につけ此場を立去り急ける夜あけて茶店に休みつるに追々坂
 をこけて来る人の噂をきくにかねて往來をなやます追はぎとも兩人坂の半に血を吐て
 死居たるがまさしく毒にあたりしにやさだめて腹にても喰たるかこれ天道のかれらを
 罰し給ふなるべしこのゝちは往來心易しとどりぐの噂にかの大工ひそかに辨當を取
 出しみるに飯菜ともみなく黄色になりしは全く毒を入たるに相違なしさては女房め
 が密夫と心を合せわれを害せんためなるべしと初めて心づき夫より丹波へいたり伯母
 のもとにいたるにさせる病氣もあらず氣丈なるにいよくふしぎに思ひ何分にも伯母
 の達者なるを悦び其身にも凶事なきを難有く思ひやがていとまをこひて岡崎に歸りし

に女房は大にかどろきたる體なりしかばいよくそれとさとり女房に何氣なくかの密
 夫の若者をよび来るべしといふに驚きながらよび来ればかの大工兩人をよびよせ汝等
 かねて我目をぬすみ不埒をなし其うへわれを毒殺せんと工みし事重々もつて無頼千萬
 ゆるすべき者どもにあらすといへども觀世音の御加護によつてふしぎに命をたすかり
 たるがゆるる佛恩報謝のため女房にはたゞ今いとまをつかはす間夫を殺さんとまぞ思ひ
 合たる事なればかの者の方へ行べし兩人とも已來此方へ音信無用なりもし又かれはわ
 らがふに於ては據なく官に訴へて邪正をたすべしといひしかば兩人は一言の返答
 もなく有がたきよしを申兩人うちつれすどくと立出けりわれは毒害の難をのがれし
 は全く觀世音の御利益ぞといよく信仰なしけるとなりこれ遠きむかしの事にはあら
 ざりけり其御利益のふかき事尊びべし

○廿番 ●山城國西山善峯寺

人皇六十九代後朱雀院長久三年建立なり開山源算上人は比叡山にて天台の學者なり諸經に
 廣くわたり天台一念三千の胸をひらき智道けんびの名僧にておはします生國は因幡の國の

人にて比叡山に登り學文ありしに母御より折々文を以て見舞又人を登して音づれありしに
 山はこどにひゆる處とさく御案じありて手織の木綿など折々持たせ御なづねあるしかれど
 も女人禁制の山なれば互に文の御便のみにて年久しく逢給ふ事もなかりしが或とき又つか
 ひ來りたんく積る年にて次第くよわり行ば今は頼少く成たれば命あるうち今一度對
 面したく一つには臨終のほども我子のすゝめに預り度との文の來りければ上人即刻に下山
 あり因幡の國へ下り給ひ母君に見へ給ひそれより三衣を脱て俗の如く羽織を着し名も幼な
 名をかりに付て俗人のごとくになし母の起臥はもとより大小便まで手づからつとめ給ふ母
 公はわが子ながらも今叡山にて大徳とあふがれ給ふ御身に兩便まで取らせ給ふ事を勿體な
 しののたまへばいやと上其爲にこそ俗體となり幼名を付たれば必ず出家と意思給ひそこ
 とさら母の思は海よりもふかく懐胎ありしより十月の間に十思の有と申候へばいせ此
 御用とつとめすんばいつか御恩を報じ申へる釋迦世尊も御父の御恩を思しめし御父淨飯大
 王の御罪遂に棺をかへせ給ふましてや我等が如きもの母の二便に仕まつることいかで苦し
 かるべきやたゞ俗のわが子と思して少しも憚り給ふまじとくれぐれと諭し給へば母公はこ
 とによろこび心おまなく介抱をたのみ給ひ凡五十日計のち臨終正念にをはりどどり給ふ



其ときは三衣を着ししづかに臨終の大事をさづけ葬送にもみづから導きましく遺骨を首
 にかけて比叡山に歸り給ふ道にてさても無常の浮世かな今までは月々に母より文を給り御音
 信のありしも今よりは其事もなく母の身も六道四生のうち何くにかましますらん今一度逢
 たてまつる事もなく此身も又かくのごとく明日の間もはかりがたし今叡山に歸りてたどへ
 大僧正といはるども何の爲にかなるべきぞたゞ後世の事大事なりと更に無常を觀じたまひ
 山に歸り給ふ御心なく直さま西山善終のはどりに柴のいはりを結び念佛のみを申し給ひ世
 を觀じて住し給ふあるとき不圖峯を見たまふに紫雲たな引見ゆるをふしぎに思しめし其
 所へのぼり見給へば佛もなく堂もなししかるに紫雲の瑞現あればこれ則靈地なりとてその
 處に住給ふあるとき老翁きたりて上人は何を觀じ給ふぞといふ上人翁を見て何をか問ん
 どするや翁の曰くわれ問答をなさんとにわらず御身この所を靈地としりて庵をむすばるれ
 ども諸人靈地なるをしらず願くは靈佛を求めて一字を建立あらば末代までの靈場となるべ
 し上人これを聞て凡人にあらざるを知りて願くは靈場となさん事をせし給へ翁うなづき
 本尊となさん靈木こそ一條草堂行願寺の觀世音の殘木ありこれをもつて御身千手觀音を
 彫刻して安置し奉るならば是末代衆生を濟度有靈佛なりと告給ひ我は當山の阿知坂明神な
 り汝に告るところ必らず違ふ事あるべからずとて神かせさつと吹來り老翁は白き幣とあら
 はれ山上に飛去り給ふ夫より源算は一修行願寺に行き觀世音の殘木を申請千手觀音の御
 像を造り奉り開眼も自らありしにいと殊勝に出來させ給ひ念じ給ふ其夜の夜半の頃善峯
 上り光明かゝやま山城の國中晝のごとくてりかゝやま幣にも教覽ありて善峯へ御使あり
 光りし處を見來れよとの御事なり京市中のものども我もくと善峯へ登り見るに庵のうら
 に千手觀世音を安置して源算一心に念じ居られければ帝此よしを聞しめし本堂御建立あり
 しかばいよく市中はいふにおよばず近在近國貴賤どもにしんぐをふこし施物をあぐる
 事おびたいしく幾程もなく舍坊をも建立成就せしとかやよつて善峯の觀世音と草堂の觀世
 音とは同木にて眞に靈驗ふしぎの多き御本尊なりしかるに其後中絶ありしに東山吉水の慈
 鎮和尚の取たて給ひ中興の開山とは成給ふ慈鎮和尚と申は百人一首の一人にて大僧正慈圓
 の事なり和歌の名人にして狂歌なども多く詠たまふなり

善峯にて

我いはは都の南ひつじさる世をうぢ山とすむかひなり
 紫の雲まつ宿の西の峯にかゝれる藤の色を嬉しき

同 慈 鎮

又爰に熊谷蓮生も世をのがれ住給ふともいふ歌に

いにしへの鏡にかはる紙子には風のいる矢も通らざりけり
蓮
こく樂の剛のものとや沙汰すらん西にむかひて後ろみせねば
同
生

御詠歌 野をもすぎ山路にもふふ雨のそら

よし峯よりもはるゝ夕だち

此野をもすぎたは善みねへ参る道の野を過るなれども其事にはあらず我人一生身のをばり
死行どころは皆中空の道なり中空の野東西もしれすたいばうくたる野のくらし山々これ
を死出の山といひて高きこと五百由旬の山なり後より牛頭馬頭の鬼追かけ此山へ追わぐら
なり山は剣にて身をさす此野を過ぎ山路にむかふと讀たるなり此野や山を行ぬるもの極善
極悪のものは通らず極善の人は息ひきりぬらうに三十二五箇の御むかひに合奉
り觀世音の蓮花に乗りつまはじきする間に極樂へ行身なりまた一向の極悪人の人をばり親
とこそすものはこれ息引とらぬるまに牛頭馬頭の鬼火の車を持來りて乗行も眞るかま
につまみとし地獄へあすゆふこの野山は鬼も念佛を申歌とい

あはれにも罪の大きにせめられて鬼と見ぬる身にも念佛

鬼の目になみだは何の泪ぞや地さくの釜の下がくすぶる

○又こゝに生れながら火の車にのり行しこと目前にあり河原町徳兵衛といふもの直々
のはなしを聞しに延享元年のころ同町に日頃わがまどけんどんにて佛法をも聞かず
念佛をも申さずくらす老婆ありねつ病をやみ苦むことけしからずして死る二三日まへ
よりあつゝとさびびとびめぐるを介抱人などかきへても中々にとやまらず尤病
人全身の熱氣は火をさはるがごときねつ病にて日々半とまばかりつゝかくのごとくう
たことのごとくいふにはあれつれに來たどめて下されくと聲をあびくるしむ事めも
あてられすむちうになりすこししづまるを何ぞいひたるやさらに覺ゆすかくるほどの
事なれば隣近所までたれしらぬものなし又くるひ出せばあら男四五人もかくり手をも
ち足さかへけるにやゝもすれば飛出しといめかねけるが終にはかくのごとくにて苦
み死けるが息引とるときには火のもぬわがるときを人々のめに見せしと則徳兵衛も
其かへへてこのありさまを目のまへに見しと物がたりけり
○又外にも同じやうの事ありある處の老婆火のくるまにのりてゆくを息子むすめの夢に

見て追かけ行て車を引たいめ大にやけとせしと思ふて夢さめて見れば二人ともやけ
とぞして居たりと聞し事もあり

右のごとき極めくには宙宇の野山をどほらず一刻に行なり又善もなく地ごとくに行は
どにもなまは宙宇にまよふもの多しこれ七々四十九日が間迷ふといふくらゝ所にまよ
ひあるを三界迷の衆生といふなり四十九日にかぎらずうかすまよひあるもの多ある
なり死出の山をのぼるものはぼんよの作りしつみが火の雨となつて空よりふりか
るなり此火の雨をふせぐかさは観音みだの名號を笠にさるより外にみのかさなしよつ
て善業よりはるゝ夕だちと示し給ふなり一度にても參詣して観音大悲をねがふ身とな
らば此雨にあふともわが大悲大悲のかさにてしのがせたまふのみならず夕だちのはる
ごとく安樂の身となることなり

○西山善峰の往生院に宇都宮さまとめの如來といふあり慈覺大師の作佛なり宇都宮彌五
郎友綱は法然上人の弟子なり元久二年八月十六日に剃髮染衣して此處に住たりける
○宇都宮彌五郎あるとき此山のふもとを馬に乗て通りかゝるにひかふより熊谷入道蓮生さ
たり給ふに朋友のことなれば熊谷入道ならずやあらむづらしやと聲をかくれば熊谷も宇都

宮どのかめづらしやとて見られしがいかに彌五郎どのかく馬上にてゆゝしく出たら給ふ處
はあつばれ一方の大將なりいか程の大敵をも伏すべき骨がらなりなりながら今つくる罪の
來世にて敵となりておしよするときはいか成具足兵杖ありともやはかふせぐ事得がたし此
怨敵をふせぐには南無のみだぶつの六具より外なし宇都宮うちうなづきよくこそ申された
り我も此世の敵はあそるゝに足らず未來の怨敵こそ恐ろしけれとこれより友綱も發心して
これ蓮生坊の一言によつてぼたの道を求めしとて入道して法然上人の御弟子となり熊谷
と同名を付て念佛三昧にてありしが其草庵に天台慈覺の彫刻ありし彌陀如來を直々かみたてを念
奉りぬあるとき我ねがふ心をあはれみ給はし正眞の彌陀如來を直々かみたてまつり度
と一心に未來成佛を願ひ奉られしにある夜の夢に三尊の如來來迎ありて汝成佛うたが
ひなし臨終はまた遠しそのとまにのぞみわれ迎へとる事うたがふべからずと仰ありて歸ら
せ給ふあら有がたのみみだ如來御名殘をし今一度をかみたしと恐れも思はず追かけまぬ
り如來の御うしろよりいださどめしが夢覺見れば持佛堂の如來なりよつてたきとめの如來
とは申なり

○又開山上人は衆生繁茂するは悦びたまへども喧しきとさうらひ給ひて山上の衆の座を別に

立門戸をどちて人をはらひ數日食をたつて苦修す鳥獸もなれきたりて菓を供し花をささぐ
 しかるに御身にふしぎあり極めて清淨をこいみ給はず三衣は身の皮のごとく常衣なれども
 かつて御身に蚤しらみをせせず持戒清淨にして承徳三年三月御定命に印をむすんで端座合
 掌して寂す御歳百十七歳其死貌かつて變せず諸人群をなして拜すといへり則御退隱の地を
 三鉢寺といふ善峯の上にあり初には往生院と號せしが後に天子の勅願寺となつて三鉢寺
 と改らる又山のかたち三鉢に似たれば名付ともいふすなはち鎮守阿知坂明神のやしろは
 山にいたり坂の中間にあり

柴の戸に獨すむ夜の月の影とふ人もなくさす人もなし 兼 好

○こゝに善峯のふもとにまづしき世わたりの女あり夫にわかれてより二人のむすめを杖
 はしらとそだてしが姉はおさとしといふ十五歳になり妹はおさしとて十三歳になり兩人
 とも母に孝行なるむすめなりしが母三年のあひだやみぬれども薬さへもろくく飲も
 得せで月日をおくるのみ今は次第に病もかも命あやふく見ゆしゆる何とぞ薬をわた
 へたしとて醫者をやうくたのみて見せければこれは中々本ふく心もどなし人參とい
 ふものをもちひたらばもしや助かる事もあるべししかし人參の料は金子の十兩もな

ては求めがたし金子の才覺だに出來たらばしらせよとて立歸るしかるに姉のおきと思
 ふにはわが身をうりてすこし成ども金子をこしらへたしと近所の人をたのみわが身を
 うりてやうく金五兩をこしらへ其よしをいもうとにかたれば妹のいへるはわが身も
 同じく母にもらひし身なり母の病いゆる事ならば共に身をうり薬をどくのへまわらせ
 たしといもうともまた身を賣り都合十兩の金をこしらへ母のまくらもとへ持行御病氣
 本腹の事をいしやどのへ尋申せしに金子十兩なくては療治なしがたしとあるゆる二人
 とも身を賣て十兩の金子都合いたせしゆる御薬をめし上られ何とぞ御本ふく被下べ
 しといふに母は大におどろきおもさまくらをわけてたし此身はしするとも御身たち
 をうりて本ふくの望なし杖ともはしらともおもふふたりのものに生別れ朝アあんじわ
 づらひなばいよくやまひ重くなるべしとなみだを流しどいひればむすめ二人はこと
 ばをそろへわたくしら二人とも母さまよりもらひし身なれば賣てなりとも御本ふくを
 祈申なりかならず御わんじ下されまじわづか五年の事に候へばしはしのうちの
 御わかれなりと達て申ければそれはどまに心きはめし二人の孝心ことさらもはや金
 子をもうけとりしことなれば今はゆかではかなふまじこれが今生のわかれなるべきか

どなほくわかれの言葉告げる折からはやむかひのきたりてあやにしまの衣ふくを持
 きたりこれとせ替ればたちまち君傾城の出たちとなりて天人の天くだりし如く目さ
 ましくむかへの者は母御おさらばとて二人とも籠にのせ飛がごとくくるわをさして歸
 りける母はむすめのわかれのみかなしみ其のちはだんくど上はり果すでに命終に
 のぞみ近所の人をよびてわがむすめの行しかた御ぞんじならばわが死たるをつげてた
 べとこれを最期のことばにて終に空しくなりけり所の者どもあはれみてうち寄て葬
 送をいとなみさてふたりのむすめの方へ此よし告しらせば姉ふさと大にかなしみさて
 も神ならぬ身のかなしさはかゝる事どもしらすたい御本ぶくのために流れの身とはな
 りしに其かひなきをしるならばおそばに介抱申べきにとなげきかなしみいまだ七々の
 うちなればせめて御墓所へ参りて御断を申さんと親方に其わけをいひて一日いさま
 もらひ在所にいたり墓所にいたり居まする人にいふととく介抱をもなさりしをくや
 みなげける後のかたより妹のおきしこれも同じ心にていひ合さねども親方のうちをぬ
 け出てこゝに來りなくく互に不孝をかこち此上はふたたび誰ために苦界にかへるべ
 きとて二人とも黒かみを切すて母がぼだいをとふらふへしと墓の前にて髪をさきり善哉

寺へ行御住持の弟子として下されよとねがふにいまた年若き女の身ながら左様とせで
 殺心せし孝心をかんでて弟子となし給へば兩人は其まゝ御いとせを願ひ此山のおくに
 庵をむすび母のぼだいをのみとふらひしがあるとき観世音の前に通夜なしたつゝ大士に
 願ひけるは亡母妙林もしや地獄へおちらるれば候はんかと日夜あんど候へば何卒大悲の
 御ちからにて母の居られ候處をしらせ給へと二人ひとしくねがひ奉るに其夜牛みつ
 の頃と思ふに觀世音の内陣するまじき音して妙林くどよぶに兩肩大におどろき是を
 見るに牛頭馬頭の鬼ども罪人一人を引たてく來るをよくく見ればまさしくわが母
 なりてはなさけなや何ゆゑと二人あきれ居たりしが二つの鬼は妙林をさしあげ火の
 中へ投げれんとす折から一人の僧きたりて妙林を引とめ給へば鬼どもことばをさうへ
 此重罪人をなにゆゑにたすけ給ふやぼだいの心露ばかりもなくたいむすめの事をのみ
 かもひくらし後の世のことはいさゝかもなくして死たる故ぼんなふの罪ふかきものな
 るゆゑ斯くくるしみをば見せ申なりかの僧のたまはくいかに申とはり罪ふかきもの
 なれども此者のむすめ兩人母のために尼となりぼだいをとふらひ中有地獄にあるとて
 も大悲の力をもつてたすけくれよと一心不亂に觀音を願する孝心善根によつてたすけ

得する處なりと宣へば兩鬼は低頭して妙林を僧にわたしていづくへか歸りければ忽ちかの僧は觀世音とをがまれ母妙林もぼさつのがたとなり給ひ西方へ赴き給ふどもへば兩尼はゆめさめて觀世音の御前に臥るたり二人はたがひに顔を見合ゆめの有さまをかたり合にすこしも違ふ事なし有がたや是ひとへに觀世音の御めぐみにて母の地獄にちちたまふを眼前にたすけ下されしにさうなしといよく觀音の名號をとなへて夜あけて住持に其よしをかたれば二人の信心を感じ則住持兩尼をともなひ尊像を禮拜し給ふに本尊の衣の裾こげてありこは全く地獄の火焰にこげさせ給ふ處なり末世の衆生に此度の御濟度ありし證とせよとの佛意なるべし兩尼はますく念佛を修し後年めでたく往生の業懷をとげたりしとなり是全く兩尼の孝道とひとつは此尊像の靈驗によつて母子三人とも極樂往生をなさしめ給ふ處なり

〇二十一番 丹波國桑田郡菩提寺

俗に穴穂寺

本願宇治宮成は丹波の國桑田郡穴太村の大富家にて常に觀世音を信心の人なり其ころ都に名を得し佛工眼清といへる者あり是を丹波のくにへよび下し觀世音の像をつくらしむ此佛



師眼清は大悲に誓願をふかくたのみ常に法華經を讀誦し其中にも普門品をよむこと朝暮に三十三べんを念ふ事なしこの者宇治宮成にたのまれ丹波にくたり大悲の像をつくり猶や普門品數十べんをとなへつと三十三日にしてことに微妙の御尊像出來させ給ふ宮成大によるこび厚く其價をむくみ眼清もよるこびこれを受けて都にかへるときに宮成が下人眼清が夥しき金銀を持かへるを見てひそかに大江山の麓に忍び居て眼清をうち殺して金をうばひどり行方しれず宮成これぞと大に驚き早速都へ人をのばせ眼清のあんびを問ひしむるにいさか途中にてまはりなしとて我家にて細工なして居たりしが使の趣をききて大にどろき是も使どもに丹波へいたる道々もまがふ方なきとりさたなりければ宮成に面會して身の無事をかたり合ひ則持佛堂にいたり見るに此頃わが彫刻したる觀世音の御身にわたりの刃さすつさりさては此尊像の眼清が身にかはり給ふなるべしとはじめてさとり靈験の断たなるに佛果を得て宮成たゞちに發心剃髮し我家を寺となし此靈尊を安置したてまつり菩提寺と號し今の穴穂寺の本尊これなり穴穂寺といへるは則地名穴穂村にあるがゆゑにいふ處なり

○風土記に曰く當國篠村の東大江山のふもとに大なる池あり池中に大蛇すみて往來の人

をなやまず郷里に勇猛なるものありてかの大蛇にわざと吞れて腹中より劍をもつて大蛇の腹を割やぶりて大蛇を退治すその血波をそむるがゆる丹波といひ又その毒蛇の口をのがれ生を得て歸るに上り生野といふ又むかし今の丹波におはふはどなる桑の木あり其木を切たるあとを田となしたりよつて桑田郡といへり往古火の雨ふりし事あり其とき人々穴を掘り大石をやねとして是をふせり翌年にいたつて豊作にて穴に穂をかさめみちくたれば萬民よろこび穴穂といへり今に老のさかの麓に沓掛村といふ所あり往來のはどりに畑の中に其時の人穴なりとて大石をつみかさねたる穴あり中に入て見るに壘十帖の餘もある穴顯然とあり

御詠歌

かゝる世にうまれあふ身のあなうやこ
おもはてたのめ十聲一こゑ

かゝる世に生れあふ身とは釋迦如來の御說法におくれ彌勒ぼさつの出世には先達二佛の間ゆる助くる人あるまじといふ心にて又あなうやとはあなうたてやなり釋迦如來はあるときは觀世音ともなりて御身を三十三身に現じ給ふて末世の衆生の身ともなり凡夫の心を御

さつしありあなうやどふなれと二佛とも今に濟度はなし居たまふ彌陀觀音の名號を十
ころはあろか一聲なりとも唱へ申もの有ならば其者の身にそひてたすけ得する程にかな
らずあな愛やと思はずたのめとの十聲ひとこそなり

○利生おまたある中にも人ごとにしれるは龜山の城下に金屋某が下女にたつといへる女
ありつねに此觀世音を信じ龜山より穴穂まで一里餘もあるに毎月御縁日はおこたるこ
となく風雨はげしきといへどもいともふ氣色もなく參詣せりそのみにあらず心に慈悲
深して日々銅釜等のあらひながしせる物をつつとややかに清くのけおきて非人乞食には
どこし飢たるものを見ては己が食をげんじ分て與へ又は犬ねこにいたる迄もいたはり
諸事ついまやかに奉公におこたることなかりしがあるとしの秋疫病はやりかめ山の城
下家ごとに三人五人みな傷寒の如き大熱の病ひあつて死するもの多かりけりかの下女
も疫病にて大熱甚しく七日が間かつて食事もせず醫者手を盡すといへども治術なし
といふ心力もしだいにち其身も熱にかかされ前後も覺ざりし夜半のころふと主人目
覺て見るにかの下女が臥たる敷帳のうちより光明のかけやきける主人おとろさいとぞ
臥所にいたり見れば光明もさね下女はよく寐入たりたりと異香くんするのみなり主人あ

やしみ病人をおこせば目をささしめら有がたや聲も御僧の來り給ひてなんちが病醫者
のおよぶところにあらず我そのくるしみを助け得させんとて鉢の水を柳の枝にしたし
我口へそとぎいれ給ふとふもへばたちまち心身すくしくなりたりあまりの有がたさに
いかなる御人ぞとたづね申せしかば穴穂寺のはどりに住ものなりと仰られしとおもへ
ば夢さめたりとかたれば主人も目前に光明異香のふしきを見しことなればさては觀
世音の御加護なりけりとして主人も下女も諸どもに涙をながして尊み奉りなほく信
心なすに次第に熱もさめて程なく快氣なしたりけるまことに穴穂寺大悲の御利生廣
大にて水仕女さへすくひ給ふとて水仕觀音とも唱へたり

○天竺に蓮華女といふけいせいあり其あやかた佛法をしんじ釋迦如來の御弟子をまねき
法開ありけるに蓮華女をはじめあまたの遊女をよびいたし共々に法問をてうもんさせ
しむるにそれ女はことに罪ふかきものなり三千世界のうち女はと罪ふかきはなしまし
て君けいせいとなりし身は猶さらましてわがよそほひをもつて人の身を損じ親兄弟に
見はなされ家藏珍器までうりはらはせはなはだしきは國をもかたひけさすはみな女の
罪なりさるによりたどへ貌には紅粉をぬり身にうるはしき衣ふくをかざるも無常即

滅の世の習ひにていつ何とぞ其つみを滅せずして死せんもはかりがたしよつて常々佛法を尊び名號をたへずとふべしと説きかせければ遊女蓮華女にはさるべき因縁ありけん誠にあさましき我身かなと發心おこし祇園精舎にしやか如來おきく御せつばふあかどきけばかしてにいたり御弟子とならんとひそかに廓をぬけいで行道にされいなる清水ありしにふどわがすがたのうつるを見て我髪かたちもけふばかりなりわがすがたの見をさめせんと清水のもとに立より水かみにてつらくみれば我ながらも髪黒々とうつくしきすがたに見とれかくうつしく生れて諸人にこひられながらさき尾とならんもいとをしくいやくいとへ立かへりて苦界にあるならば又わが思はざる出世もあるべしとて立かへらんとせしがさるにてもあすをもまたぬ身もちて末の榮華をまつもはかなしやはり剃髮して後生をねがはん事こそ大事なりと又思ひかへして行んとすれと迷ひの雲はれねばかたはらなる石に腰うちかけさまぐと思案なせる處にかなたよりまたくわれにまされる美婦人出きたりしが蓮華女にむかひわらは供なる者用事ありてあどへかへせしがいま來らず何となく心さびしく侍ればしばらく御ものがたり申さんといふに蓮華女こたへてわらはも一人なればよき御つれこそ來らせ

給ふものかなまづしばし休み給へと同じ石にこしうらかけ何くれとものがたるに其うるはしさたとへんにもなくなすがの蓮華女もあきれて世には又かゝる女もあるものかなどわれにもあらで見ていたるににわか腹をいためたことの外に苦しむていゆゑ脊をなで胸をおさへて蓮華女かいはうなすに急にせまりつめて絶入しが其まゝ即死なしたりける蓮華女は大にほとろき猶さまぐかいほうすれともさらには生べき體にあらざればふたゝびあきれわたる折から爰かしてより鳥數十羽とびきたりかの女の死がいにもむらがり目くちのわかちなくつゝ廻る蓮華女これを追のくるといへども追々數百のからすむらがり來るのみならずおそろしげなる山犬の數十疋はせきたり手足をくひちぎり胸腹をわからなく喰ささしかば臆肺出てくさき事いふばかりなし今まで我にまさりし美婦人も命盡ぬればたちまちかくのごとく二目とも見がたきすがたとなるを見て我もやがて此通りよとこゝにまよひの雲はれて直に釋尊の御もとにいたり御弟子となるこれを蓮華比丘尼とて五百羅漢の内に入たまふとなり

是は釋迦如來靈鷲山會上より御覽じて不便の者やあれほどにおもひこみたるに今のすがたにまよひ引もどさるゝ事の残念におぼしめし三十二相と變じ給ふ觀自在はさつ

御すがたを女の身と變じたまひ蓮花女がまよひをばらさせ給ふ處なり此事をくはしく
しらんとならば九相詩繪抄といふ書にありもどめ見給ふべし

往古の大江山といひしは今のあひの坂なりといふ事又今の穴太寺の勝景等の圖は觀音
經和讃抄圖會といふ本にくはしく出たればこゝに略す此老のさかより西南へかけて小
盤山良峯あるひは花の寺などいへる名所多きところなり

大原や小しはの山もけふこそは神代のこともおもひ出らめ

小しは山野邊の小まつ秋かせはかみ代もふりてすめる月かな
大江山こゝ行するも小夜ころもいく野のつゆに猶しほるらん

〇二十二番 攝津國總持寺

人皇五十九代宇多天皇の御代なり宇多天皇と申たてまつるは近江源氏の元祖なり開基は越
前守藤原高房西國方へ御下向有に三歳にならせ給ふ若君をつれて御下りありしなり是はい
かにとなれば若君を御誕生ありし御處所はひなしく成給ひ後の御處所をひかへ給ひしに總
じて繼母といへるものは高も賤さもまゝ子を悪む事はなさけなきものにて三歳なる若君を



かきん
みき
さちと
あは
あて
のち
あき
あき
あき
あき

にくみたまふ心のうたてさや後の御臺にも男子出来させ給ひぬれば猶々兄君をにくみ給ひ
 殺もせんと工給ふ心の程を高房料聞しめしけるゆゑ御留主の間も心元なく思しめし給ひて
 西國へ御連ありしなり伏見より御船にて大阪へ御越あり夫より海路播磨がたへ御出船あり
 した獵師どもまながつはと龜の大なるを引上人を集りもてあそび居けるを高房君御覽あり
 慈悲深き殿ゆる鶴は千年龜は萬年のよはひをふるもの成に彼者どもが殺すべきと思し慣を
 つかはされ命を助け得させん是へ持きたれよとの仰にて早速御家來買とり歸り殿の御坐船
 へさし上げれば殿大に悦び給ひ我は仕合ものかな千萬年のよはひをふるべき事なるをす
 に命をとりとるべきにうれしくも助得するなり汝が壽をわが性にもあやからすべきため
 に今益をさすなりと御盃を取あげたまひ此子を息才に守りくれよ汝も海底に居て必あや
 ふき海上へ出べからずと仰ありて海中へ放やぐ給へばかの龜三たび殿の方を見返りくう
 れしげに水底に入にけり夫より西國の船路を御下りあり須磨明石の景御覽し若君もまげん
 よく遊び給ふしかるに情なきは繼母の工み若君かしづきの女に金銀をあたへ何とぞ此度御
 下りの折から船中にて人しれず失ひ申せ事仕おはせなば歸國の上きつと思賞をなさんと頼
 まれしに心くらみ浅ましや若君の舟はたに立給ふをあふなふ候とどむる振にて海中へと

うと突入しかばあれよくといふかひなく忽ち水底に沈み給ふ高房はかゝる工とは夢しら
 ず悲歎かぎりなくせめて死骸なりとも見せはし日頃念じ給ふ觀世音を祈給ふ折こそあれ
 向の方に小兒の泣きを聞へければふしぎや海上に小兒の聲あるべしやうなく行て見よと傳
 馬舟に櫓をかきよつて行見給ふに若君は浪の上に座しながら泣給ふ是はいかなる事やとあ
 はてよろこびさも遠くながれさせ給ふ御身の浪の上に座し給ふは是たゞごとにあらじと先
 々小船へのせせめらせ座し給ふ臺石と見ゆしは先に助られたる龜の脊中にのせ参らせたる
 なり若君を御わたし申上龜は其まゝ水底にしづみけり高房君は若君をいだき御悦びかぎり
 なく是龜の命をたすけたる其恩を送りしならん去ながら全く觀音の應護によつてなり御利
 生のあらたなる事を人々感せぬはなかりけり高房君は感悦のあまり御禮のため觀世音の像
 を一體つくりたてまつり度と思召とも君命のしげきに其いとまあらず歸洛のちも紫裏の
 御用多ければ心ならずも延引し剩さへ高房君御病氣さしかこり御心にも本腹こころもとな
 くや思しけん若君を御側へめされ今わがいふ事をよく聞て千手觀音を一體造立し奉るべ
 し其方の身はすでに西海のもくづと成べきを觀世音の御利生にて龜に命を助られたり依て
 尊像をわれ彫刻し奉らんと思ひしかども公用しげくしていまだ果さず汝父が願望をうけ

つぎて成就いたすべしと有けるを幼心に覺給ふことわりなるかな御成人のち山陰中納言とてときめき給ひ今吉田家の御祖なり其頃唐土より僑三位といふ人來朝す東寺の鴻鶴館にてもてなしありしが山陰中納言は唐音に通じ給ふ御方にてその僑三位にむかひ品々御はなしの折から唐土に靈木なきや兼て觀世音を作らたき望のよし御ものがたりありしに僑三位ききていかに我國の青龍山佛母院と申に海檀香の靈木ありと申何とぞその靈木を求め得させられよと御頼あり則金子百兩を御わたしありけるに僑三位は歸國して青龍山に行其旨をいひてかの木を伐とりて日本にわたさんとせしに國王これを聞てかたく制し瀨津やうらくに觸達して日本へ木をわたす事を禁せられしかば僑三位は一旦約せし上金子までうけ取ながら靈木をわたさずしては信義たすどかの木に彫付たるは此梅檀香本長さ三尺六寸廻り四尺八寸餘其かたち方なり是は日本國越前守藤原高房若男亡父宿願を繼で千手觀音の像を造る所なり渡海無難に其處に到れと書付又祈誓せるには是日本の國山陰中納言の脚に約束し佛體となすべき靈木なり佛法應護の諸天善神風神水神二十八部衆海上無難に日本の地へ着させ給へと祈念して密に海中へなげ入たりしかるに諸善神の加護ありてや靈木播磨の國明石のうらにより來りよるく此木より光明をはなちしかば浦人どもふしぎぞと

なし其木を引上見るに何やら彫射たれども一切よめざれば則ち領主山陰中納言の脚へ捧たてまつる中納言直々御らんある處僑三位の手跡にて形のごとく彫射たり聊大に歎び給ひ則天皇へ奏聞あつて佛師を吟味なし給ふに然るべき人もあらざれば和州長谷寺に參籠ありて佛工を得さしめ給へと祈願し給ふに觀世音夢中に告給ふは明朝下山の折から一人の童子に逢へしこれに命すべしとの御告なり明日をまつて御下向あるに果して十四五歳ばかりの童子に逢給ひ御覽するに餘りに身不自由に見ゆれども外にそれぞと思しめす人も見ゆざればこの童子にても有べしとよく見給ふに衣は破れ髪は赤頭にて顔から汗はよどいとむさくろしき有さまなれども汝はいかなる人ぞと問給へば左やうに問給ふ御方は都山陰中納言にてはましまさずやといふにさては御告のありしは此人にてあるべししからは佛を彫給ふ人かいかにも佛を彫むものなりしからは頼むべき事あり都へ來られよと同道にて都へのぼり中納言思ひ給ふは御告なりとはいへどもいまだ少年の身に靈木を任せてもしも小刀付をんじなば後悔ならんと少し御思案がはに見ゆければ童子からくどうちわらひ我佛を得つくるまじと思ひ給ふやさらば試みに何にても有合の木を持來べしとて風呂敷包より道具をとり出ししばらくの間に十一面觀音を彫刻しこれは小佛ゆゑものくの目には行届

まじとて見せ給ふにいかにも殊勝の尊像にて凡人の細工とも思はれず中納言殿御覽じ大に
 よろこび給ひ此上の佛はよも有まじさらば千手觀音を刻み給はれどかの鹽木を出しませ給
 へば童子答てしからは二間四面の別家を建給ひて其内に入て四方を戸さし必一人も内に入
 り給ふまじ又食は心つかひし給ふまじ鏡もち一かさねを入置給へどて則山上に新たに二
 間四面の假屋を立其内に入て四方の戸をさきり晝夜かこたらず細工の音と千手陀羅尼をど
 なふる聲のみ聞へ又たぬす異香くんじわたるに人々不審をなしわたりかくて三七日の夜中
 納言どのの枕元に聲あつていかに黃門かねて願申さるる觀世音成就せり早く拜し申べしと
 いふに卿おとろさいとさき別家にいたり見たまふに四方とも戸をひらき童子は見ぬす香氣
 くんく千手觀音船の上になくせ給ふ尊像圓滿し笑をふくませ給ふが如き尊像なり中納言
 おもはず平伏なし給ひかの童子こそ則大悲の變化し給ひて彫刻なし給ふ處ならんといよ
 く渴仰せしうかねて攝津に鹽地あるをしり給ひて即堂舎を建立して此尊像を安置し總
 持寺と號し給ふ處なり又はじめ試に彫たる尊像は則今京都吉田山新長谷寺の本尊これ
 なり

御詠歌

おしなへて高きいやしき總持寺の

ほごげのちかひたのまぬはなし

此歌のころは別に仔細なしおしなへてとは上天子より下萬民にいたるまで御佛の心に入
 だてはなれたとへば鳥るる畜るるにいたる迄おはれみまかけ給ふにまして人間に於てをや
 貧窮なるをなごり富貴なるをうやまふ心あるはみな凡夫のころなり

さやしきに情へたつるものならば殿がふせ家に月はやとらじ

此歌のころは佛の御心に高きさやしきへだてなく念佛稱名をとなへ信心の者ならば臨終の
 ときは三尊二十五尊さつ御來臨あつて御たすけ下さるるなりよつてこの總持寺の佛の御ち
 かひたのまぬはなしとなり

○山陰中納言の卿の御館は洛東今の吉田なり變化童子の二間四面の別家にたて籠りて彫
 刻ありしは今の新長谷寺なりよつてはじめ童子ころみにとて彫刻したる十一面觀世
 音を本尊とし給ふ御たけ一尺五寸なり又た中納言六十五歳にて仁和二年五月十五日薨
 じ給ふ總持寺はそのうちに後小松院直々御宸筆の縁起をたまはりてより増々諸人尊信

す靈げんも尤あらたなり中興黄藥開山隱元禪師もまた直筆にてるんぎを記し美稱したまへり靈験の事あまたありといへどもしげきにかされてこゝにりやくす

かしましく檜原からたち吹かせに露うちそゞろ小ばつせの山

さはがしく檜木はらきこくなどをふくかせに朝つゆのふきあちてそゞろばかりになるといへるなり吹かせとは則大惠のめぐみといふ衆生にめぐみのつゆをうるはし給ふなり

〇二十三番

攝津國豊島郡勝尾寺

應頂山と號す

人皇四十五代光仁帝寶龜八年の建立開山善仲善算二人の僧なりもと二子なり兄弟といひながら同年なり幼きより父母へねがひ二人とも出家となり給ふ親御はよき師をたのむべしとて天王寺の榮湛の弟子となり二人とも一をまゝて萬をせる師匠はよき弟子を取たりとて悦び給ふ事なめならずしかるに此二人ひそかなる處へより何やらん咄をなして涙をながす事しばしくなりけれども其心しるものなし是は天王寺の地ははんじやうの地ゆるるにまじはる事をいとひ浮世をきらひ永來成佛をねがふ心のふかきが故なり折や師に山谷にのが

れん事を乞といへども師かつてゆるし給はず年月を過し已に十九歳のとき二人とも師の前にいで常々我々どもが御願と申儀師の御恩を忘るゝにはあらず御傍につかへ奉るはずなれども我々にはちと望の候へば何とぞ御いとまの給りたく候とありければ師も思し給ふ處あるにや望とあらば何方へなりともまゐるべし尤兩人とも我に超たる智の見ゆるかたがたなればさゞしく恨る心なし外によき師を見てつかへ給へ二人はかしらるをさげこは勿體なき仰かな梵天帝釋の御罰をちかひて師を見かざりたるにあらす二人が願と申は浮世の名利をいとふがゆゑ如何なる山奥にも引籠柴の庵をむすび觀念の望に候と申されければ成ほど尤の事ながら夫ならばまだ早しじやくまくの扉をしめ居れば殊勝なれども年若なれば時はやしとて眼を閉されざれば兄弟はかくまひていとまを願ふといへども願かなはず互に忍んで諸國をめぐり山また山に分入て靈地をたづね給ふに攝津國豊島郡に來り給ふに山の峯に五色の雲たな引ければ此山こそは靈地なりと分のばり柴の庵をむすび二人とも是ぞ淨土の地なりとて心をしづめこもり給ふ是今の勝尾寺なり。此五色の雲光明をてらすといふ事は凡夫の目には見ぬされども此のごとく禪をひらき念佛三昧に入給ふ御方の目にはあらかに見ゆるなりすでに三尊の如來光明を放たせへども凡夫の目には見ぬとあるとせば

善仲善算此山をめぐり給ふにその奥の院の後の山般若が峯といふところに行て見給ふに不思議や女ども男ども見ゆわかず美しき十六七歳ばかりの年ごろにて髪ながくとして其處に四面の青き石上に坐禪の體なり兄弟のもの不審をなし立よりそれなるは男女の御姿ども得見わけ参らせがたき御方御坐禪のさまはいかなる御方に候ぞやと問ければわれは光仁天皇の王子にて名は開成といふものなりと仰ければ兩人は大に驚き飛しさり平身す是は八皇四十九代光仁天皇の御子桓武天皇の御兄君なりとときに王子仰けるは我今當今の子と生れたれども佛法のころろざしありて内裡を忍び出此處に來り見るに峯に五色の雲たなびきたるが故にこれ禪定の地なりとて此どころにのぼり坐禪する事既に四十日におよべり雲上の樂花も何とせん松吹かせの音夜半には澄る月を友として心をすまし居どころなり御身たちは何國の人ぞと仰るに我々は善仲善算と申て此山中に草庵をむすび居る處なり誠に雨露をふせぐ迄の庵に候へども先々庵に入らせ下さるべし今までかやうの處にて御苦勞遊ばされし御事のもつたいなやと申上れば天竺のまかた國の主海飯大王の御子悉多太子は天子の位をつがせ給ふべき御身なれども十九歳の御とき内裡をしのび出給ひだんとく山に分入あらし仙人に仕へさせ給ふ事のおもひ競ふればわれも及ばぬことながら御跡を次ぎ成佛せ



んどの御心さしなるよし仰ける兩僧は涙をながし光仁帝の御子に生まれ十善天子の御身に
 て何のくらし御事もなく綾羅錦繡にまどはれさせおらさる風にも當たてまつらぬ御方のか
 る有がたき御こころさしこそ尊けれしかるに今日まで御食事には何を召上られ候やと
 申にさればと日毎に三度づゝ鳥三羽きたりて木の實をくはへ来て朕にあたへぬ是を食し
 ぬれば空腹なることさらになかりしと仰ありさては其鳥は熊野三所権現の御つかひにて御
 供をばこびしものならんとぞんじ奉るなりまづいさゝせ給へと申上れば開成王子は二
 人の僧にいさなはれ庵にこそは入給ふ禁庭には王子ましまさぬゆゑ光仁帝大に宸襟をい
 ためさせ給へば萬民も大に驚き國々諸所へ人をばせて尋たてまつること僧の齒をひくがこ
 とく此山に御座あることしれしかば帝の覺し給ふには斯はとまで佛道に入まらるとなれ
 ばたとへ内裡へむかへたりとも志のといまらるべきにあらざとて其處に堂舎建立すべしとの
 勅により早速一宇の堂塔を御建立あり本尊は彌勒菩薩つを安置して彌勒寺と名付給ふまた
 そのうち年を應て善仲善算は開成王子にむかひ御名殘多候へとも我々兩人は成佛のときと
 來なれば御眼をたてまつるなりと申上ればわれも追付行へし必座をわけ待給へと仰け
 ればおはせ送もなく待たてまつると約なしたてまつりそれより山に登り西にむかひ合掌し

て御迎ひをまら給へば紫雲たな引きたり兩僧を引つゝみ西方へ飛去ける是現在なり即身成
 佛とは此兩僧の事なるべし其とき松の元より飛去り給ふとて其枝ごとく西へさして今
 に松の大木奥院大日如來のかたはらに西方の松とてあり當寺の名木なり其後日向の國より
 沙門興日といへる僧むさく尋きたり此所に開成王まします事を承り及候て遠き田舎
 の身に候得とも王子の御すがたを拜し奉れば眞の如來を拜し奉るにちがひなしと日向
 のくにより尋來り候なり御情に王子の御すがたを拜されよといふ王子へ其由聞しめし御
 前へ召出し給へば興日坊は有がたく御前へ参り眞實ののみだ如來をわがみ奉るなりとて
 其ありさまを御覽あるに正直坊とて見ゆにゆる興日沙彌申やう日向の國に長さ八尺の白
 檀の木を所持いたし居候得ともこれを参らす御方なく其まゝにさし置候なり御入用の事
 も候はし差上申度といふに開成王子さし給ひ此頃講堂をたてさせたまへともいまだ本尊の
 事如何と思めす折からなればこれ幸ひなり然れば我にあたへ上觀世音を彫刻し本尊となし
 奉らんと仰ありければ興日沙彌なみだを流し願ふ處の御事なりとて伴來りし妙觀とて
 佛像彫刻に妙を得し沙門とにも上京仕候得ばとも日向國へかへり早速靈木を
 持來るべしとて歸りけるが速に持來り差上ければ開成王子御悦ましくて則妙觀に

千手觀世音を彫刻せよと仰有ればかしてまり別堂をしつらひ頃は七月十八日の院天より彫刻初んとするに何國ともなく十八人の童子きたり妙觀といふに別堂に入四方をどざし外人の出入をどいめ夜半にいたれば釋名の聲かすかに聞ゆ翌月八月十八日の夜入齋の人音して御望のさどく觀世音こと彫刻なし奉りたりおがみ給へといふ王子は驚き起出給ひ御覽するにあたりにもなし不審におぼしめされ別堂へ御越ありしに異香くんとて千手の御尊像の御側に妙觀一人かしてまりて十八人の童子一人もなしいかなる事やおぼしめせ共先御本尊をおがみ給へば妙觀つゝしんで御望の御本尊彫刻つかまつり候へば妙觀も御いとまを申なりとて合掌してねむるがさどく死たりけり依て勝尾寺に葬り給ふ其石碑今に歴然たり

○今世十七日十八日を觀世音の御縁日といふ事は此勝尾寺の觀世音出來させ給ひしより初りしとなり元觀音の縁日は廿四日なるを七月十八日十八人の童子來現ありて八月十八日に出本尊出來させ給ふゆゑなり十八日觀世音に御縁ある日なれとてこれよりこのかた十七十八日とするなり

往古は彌勒寺と號せしが其後代々座主すはり給ひて六代目の座主の行俊と申は至て名僧

なり般若が峯に一疊四方の庵室をたて、引籠り心を澄し身心のちりをはらひ觀念のゆかどなし給ふ其頃は清和天皇の御代なり其寛年中に御門の御願もつての外に御なやみ給ふ典藥頭さまへ醫藥を請ふといへどもさらに驗なく諸神社へ御祈り貴僧高僧さまへ加持なし奉れども其應驗もあらでずであやふく見ゆさせ給ふ御とき彌勒寺の行俊上人は名僧なるよし諸師聞しめし是へ御加持を仰付られなば御平癒あるべしとて勅使として藤原の資道卿彌勒寺へ御下向ありけるに弟子ども勅使をむかへ奉りさて申上けるは上人へ其旨申聞せ申べし去ながら師の坊は此山奥はんにやが峯と申ところに庵をたて引籠貴賤の差別さらになくいかなる我ま無禮を申上んも計がたく其段恐れ入候なり兼て御舎下されたしと申上則資道卿を導て庵室にいたり帝御惱につき勅使として資道卿御入なるよしを申せば行俊あらかしましく觀念のさまたげなりよきに御斷りを申べしと取あはねば弟子等は勅使の御前といひいかはせんと心勞なすを資道卿はくろしからず直々に申聞すべしと行俊の座に通ひ給ひいかに上人此はと帝の御惱はなはたしくさまへく加持祈禱なすといへども曾て其しるしなくよつて貴僧を請じて加持をたのみ思しめすいとま參内あつて觀慮をやすめ奉らるべしと懇に申のべられしかば行俊は一禮して重き勅命違背仕

るにはさふらはねども我魔の世にまじはるぞいとひ切に山奥にかくれて専ら觀念の床に籠
 り候へば此儀は世間の祈禱坊主に仰下さるべしとともなげなる勅答に資道卿かされて辭退
 はさるなれども觀念はわたくし事普天の下王土に住る身の勅命はそむきがたかるべし
 そぎ参内なし給へ行候つと立て庭先に生たる三尺計の若竹の葉先に安座し王土をふめ
 ばこそ違勅なれ地をはなる事凡三尺なりといへるに資道卿あるかや行候其竹の根は王
 土にあらすや上人あゝめんどうなりと遙か空中に安座なし是にてもなほゆるまじとならば
 このまゝ天竺にいたるべしといふ資道卿も其道徳にふそれ都へ歸り右の次第一々奏聞ある
 に帝さこしめしさらば参るに及ばじ其巷に居て祈禱すべきよしひまかせよとの命なれば
 資道卿ふたゝび彌勒寺にいたるに行候いまだ空中に座したるまゝに居給ふに資道卿其は
 どりいたり空中をあふぎ左ほどに参内をいとはるゝならば其まゝにて御惱平癒を祈るべ
 しとかさねての勅命なりと謹でのべたまへば其とき空中より勅詔かしく候御抑
 帝の御惱はこれ御病氣にあらす物の氣にて候われこの空中にといまゝ御祈禱申たればも
 はや御平癒あるべし此七條の袈裟と此珠數を持かへらせ給ひ帝の御枕元にかけ置給へしか
 し夫も道すがら而倒ならんとて都のかたへなげ給へばけさ珠數は飛鳥のまゝく飛行ぬ資道

卿も弟子衆中も師の法力に驚きてしばしあきれて居たりけるしかるに内裡にては帝の御
 元の屏風にたれ掛たるとなく袈裟念珠のかゝりければ忽御心清々しく覺ゆるせ給ふに諸
 卿大に慶び奉る折から資道卿歸り給ひ行候の言葉のしだいを奏聞ありければ帝御よる
 こびなゝめならず御本腹のまじ報謝のためとて彌勒寺へ御幸ましく行候を召され貴僧
 高僧多しといへども法力ことにすぐれたりとて勝王寺と勅號を下され宸筆にて勝王寺とい
 へる額を下し置れけり其のち餘りに恐れなりとて額は寶藏にまざる勝尾寺と書かへけると
 なり

御詠歌 おもくとも罪には法の勝尾寺

ほとけをたのも身こそ安けれ

おもくともとは三毒煩惱の罪おもも身なれども彌陀觀音の法の方をたのみたてまつれば御
 たすけありてばんなうの罪の重きより觀音の御めぐみがかちまざる寺なりと大悲の徳をの
 べしなりのりとは法なりよつて頼たてまつるものは成佛うたがひなし此世にては惡事さい
 なん七難即滅七福即生とあればこれ又うたがひなししんくふこたるべからず

○勝尾寺の泣薬師と申すは靈驗あらたなる薬師如来おはしますこれは開成王子の御臨終の御とき七日が間なき給ふがゆる名付なり當寺の開山は善仲善算なり開成王子は中興の開山なり清和天皇の勅額は六代目の行俊の代に給はりしなり

○七代目に聖如上人と申せしは釋迦一代の一切經をくりかへしく讀給ふ是は成佛得脱にはどかく人にまじはらず物云すころを澄し内外清淨六根清淨天地同體と心得成佛を得る事を知りたまひ般若が峯に庵室を立て十二年が間ひき籠り物いはず行をなし給ひ弟子衆見舞に行外よりおどづれらるれば内より返答のかはりりんを囑し給ひ寺のことは一の弟子にまかせおき給ひしが八月十五日の夜しきりに庵室の戸をたたくものあり聖がりんをならし給へばいかに聖如その方も來年八月十五日の夜に往生有べし此事告しらせ申なりわれは播磨國加古郡の教心といふものなり只今極樂へ行なりといふに上人戸をひらき見給へとも人かげなく松ふく風の音のみなりさては教心といふ僧の成徳ありけると空を詠め給へば月中天にすみわたたりて西の力に音樂の音はるかに聞ゆけり扱も聖如が往生を告しらすほどの教心常々の行狀を聞せはしと本坊に歸り弟子にしかくのよしをかたり教心といへる僧を尋ね來れどのたまふに弟子等早速加古郡にいたり寺々をたづぬるに誰か其名さ

へ知ものなし猶かなたこなたと尋めぐるにいふせき靈家のうちに女の聲にてなげく聲の聞ゆしかばかの弟子僧たちよりて其子細をととふに女答へてわらはが夫なるもの死給ひたる離別の悲しみのみならず元來貧しき身の上にて葬ることさへなしがたきおれも娘もなげき候なりといふに此弟子僧不便にもひ幸ひ出家のことなれば引導をもなし俱に葬りまもらせん先亡者はいづかたに置たるといふにうらの方に大石あり其上にて臨終せりといふにいふかしく其處にいたり見るにさもきたなき十徳をきて石上に端座し西にひかひて合掌しさらに死體とは見ゆず弟子僧大に感じ俗人にては結構の往生かなと禮拜し常々いかなる功德の人にやといふにもとより一字一點もよめぬ人ながらたい念佛のみを申され商業とてもあらざればたい人に雇はれわづかの賃錢にて細きけふりをたてたるが何事をするにも念佛を申されしゆる人々を名をいはずあみだ坊くとよばれたり法名は教心と申といふに弟子僧大にかどろきければ女房娘は不審して何を驚き給ふぞ弟子僧申はわれは其教心といふ人を尋ぬる處なり其故はケ様にて我が師の往生を告給ふによりいかなる知識大徳にてつねづねいかやうなる勤をなし給ひし人を聞參れとの事にて候あら尊とや有がたやと則ち旅用意の金錢をのこらず出して葬を計るに近隣の者とも此よしを聞て追々施物をもち來り大

に結構の驛送をいとなみけりかの弟子僧は亡者の着たる十徳を乞てやがて寺に歸り師の坊へくはしく次第をかたりかの十徳をさし出せば聖如上人かの十徳をふしいたいき一字一點もしらざる禪門すら念佛にて斯のごとき往生あること有がたき次第なりわれは却て一切經を讀たるが故にやはり迷のたねとなりなんと是より教心を手本とすべしと一向專修の念佛者と成給ひけるとなり

○鉦をたゞ念佛申事は空也上人より初まりたり是は人間の五臟は四季に配せしものにて東は春なり木なり南は夏なり火なり北は冬なり水なり西は秋なり金なりかくのごとくに配せしなり又五臟とは心肝脾肺腎なり六腑とは膽胃大腸小腸膀胱三焦なり五臟の心は東火離の卦なり肝は蒼木震なり脾は黃土坤西は金にあたる肺は白金乾腎は水圭坎なりかくのごとくなれば西の金にあたる鉦をたゞ念佛を申せば同氣相もとむるは自然の同理なり念佛を申佛になるなり元佛體といふは人間にかざらず鳥るわちく類まで皆々佛體あり其かたはいかなるものぞといふにかたはも色もしれぬものなりしかれば其形ちなきものといふに神道に神祕といへるがごとく人間六腑のうち三焦といふものかたはもしれず色もしれず然れども三焦といふ名あり醫道の方にもしれぬ事

なり春毎に花咲出る木あまたなれども其物なし人間に佛體もあれども見ゆす古歌にも春毎にこのもかもの卯も木もわりす翠に染るなりけり 俊 成 齋

○二階堂の本尊あみだ如来は淨土宗の元祖法然上人の讚岐より御かへりありしとき此山にて善仲善算即身の往生し給ひまた聖如上人けつかうなる成佛をどげ給ふ御山なりとて今の二階堂のところに庵室をたて四年が間御座なされて御所持の一切藏經をどめたまひ此處に御座ありしとき歌

栗の戸にめくれかゝる霜さりをいつむらさきの雲と見なとん

是はあさな夕なのしもきりと三尋二十五ばさつ御來迎のむらさきの雲と見たやと思召たる御歌なり圓光大師この處にて説法ありしとき唐土の善導大師來現ありて御對面の御ものがたりありし御すがたをどばとにうつし置たまふ戸帳は一位様より御寄附あり御開帳をねがへばけさ衣にて御手を合せ給ふの御影像ありくと拜れたまふ上人そのうち都へ御のぼりあり其師庵のあとに二階堂づくりの堂建立にて依て開山法然上人の御遺跡といふは此二階堂なり其外智恩院小松谷等多ければ御弟子方祖師の御遺跡多ければ何れを遺跡と定申へまやと尋有しに念佛をひろむるわれなれば遺跡いづくとも

だむる所なした念佛のこゑするところいづくにてもわが遺跡なりと仰られける上人
は建曆二年正月二十五日に御臨終なりよつて今に常念佛の聲たえずこれ常念佛のは
じめなり

○廿四番 攝津國河邊郡中山寺

紫雲山と號す

中山寺は觀音靈場のはじめなり當寺の山上に人王十四代仲哀天皇の前後大仲姫を諸名
野山邊大柴谷にふくりたてまつる所の御陵あり奥院はむかし聖德太子御建立の中山觀音
堂なり太子大和國いかるがの内裏南殿に御座なされしときひとりの天人女官達をめしつれ
天くだり給ふを太子いかなる天女ぞと仰ありけるは天人こたへて今攝津の國三鈴のとき
山は觀音の淨土有縁の靈場なるといへども神國なれば佛法にこころざしある者なしわれこ
れをしるるといへども告るものなし末世の衆生濟度の觀世音の靈場なれば一度參詣するもの
あらば三惡道をまぬがれ地獄に落まじ靈山なるにをしりかな知るものあらず太子は佛法
歸依あるがゆゑかく告しらしむる處なり願くはこゝに十一面觀音を作り堂舎を建立あら
ば末世有縁の靈場となるべし我は大仲姫なりと宣ふと見て御夢覺給ふ太子は甲斐の駒にめ

され調子丸跡見一位を召連られ中山の手前に金龍寺といふ處ありこれまで御出ありて山々
を御覽あるに紫雲たな引たる山あり是を靈場なりと分發給ひて御覽するに紫三つあり三鈴
の形に表したる山なり中の峯に登り御馬を止めて詠めたまふに誠や三鈴のときし川の流れ
山の腰をめぐり大仲姫の御敷のときと爰ぞ末世有縁の靈場なり天竺にて釋迦世尊御說法あ
りし耆闍窟にたがふ事なし川の流釋尊御入滅ありし靈鷲山ともいひつべしとて太子御よろ
こびなめならず山のいたゞきに駒をといめ給ふ其とき岩に馬のあし跡四つあり此岩は
奥の院の御陵より二町計上にあり此甲斐の駒といへるは太子富士禪定を遊ばされしときも
召れたる名馬にて一日に千里をかけたなりとときに太子前生舍衛國に生たまひてありし
とき一刀三禮ありて彫刻わりし廬の十一面觀音大悲の像を本尊として伽藍建立有て堂供養
のとき太子御馬にめされ中山に入らせ給ふ其時甲斐の駒はひさを折り頭をうなだれけるに
此駒の頭に角一本有けるが此ときその角の落たり彌靈地なる事をしり給ふ畜生ながらひ
さを折のみか角の落ればとて畜こく山ともいふ峯に紫雲たな引れば紫雲山ともいふ馬
の角懸寶なる三鈴のときと三つあり中の山を中堂とし觀音堂を建給ふゆゑに中山寺と
は申なり是日本にて觀音靈場のはじめなれば往古は西國順禮第一番となしたるなり大悲

水といふ水あり田斐の駒あしをあらひ角折しといふ其川を今足洗川といふ中興二十四年となりしは花山院熊野さんげんの御夢想にて絶たる願禮を佛眼僧正の案内にてめぐり初給ひしとき那智山を一番としてめぐり給ふゆゑなり其譯は首卷にしるしたり

○中山寺は觀音靈場はじめなればとて第一番とさだめられしは長谷徳道上人焔魔大王より寶印をさづかり給ひしには一度歩みをはこび西國願禮いたすものは地獄におとすまじとの御契約の證印をめぐりそれを當寺にをさめ給ひ石のからとに入れ秘藏の寶物なり參詣いたせば左の方に岩戸の如にして奥に石のからと是なり

○多田藏人行光と申は中山觀世音をふかく信心ありしが御臺には邪見の御心にてかつて參詣し給はず行光何ぞぞ遊に事よせてすゝめて當山に參詣させんと頃は春の半中山寺の花見を催され御臺をもともなひ行給ひてまづ觀世音へ參られよとあるに據なく觀音の前にいたり給へば寶前の鐘の緒ひらくと動くを見ゆしがたちまち御臺の黒髪をくるくるとまきとひて宙にさつと引上たりかしつぎの男女驚きまづぐにどかんとすれとさらばとけず行光はかねぐ御臺の邪見を懲し給ふならんといとも淺間しく早速寺中の僧徒をまねき大慈へ御詫申上ければ凡半時はかりもありて元の如く解ければ御臺は息もたぐぐにて直さま乗

ものにて御館にかへり給へば何の障りもなし此とき初臺は前非をくひ給ひて大に觀世音を信仰なし給ふこれ全く行光の御信仰によつてなりけり

○毎年七月十日には千日參りとして通夜する人多し近郷近在より參詣おびたいし此日は三十三所の觀世音みなく當山へ集り給ふといひ傳ふむかし大勢通夜ありしにたい今長谷觀音御出なりと云清水の觀音の御入など一々誰いふとなく聲聞へけるといふに此近村に至つて邪見の者ありて左やうの事のいかで有べきと嘲りてわれもまららず家内をも參らせざりしが今年は參りてためし見んとて家内親子三人通夜なしわたるがなる程いひ傳ふがごとくに堂内にてたい今六角堂觀世音御入なり紀三井寺の觀音御入なりといふ聲と共に觀世音ありくと三人の目にをがまれて内陣に入給ふにかの者邪見の心たちまち解て今中で疑ひ申せし事のおそろしくたどへ飢死するとも今までの罪はるばしに此身を觀世音にまかせ奉らん

と親子三人とも發心して中山の門前に庵をむすび籠り極樂往生を成しめ給へと念佛のみ申せしがそれを聞て近所より食物をもちこび一食にて能て餘は斷をいふ觀音の名號おこたらす申せしがあるとき名號をとふる聲やみけるゆゑいかゞと近所のもの戸を明ければ三人とも西の方へひかひ手を台せて往生をどげたり見るものさく者殊勝にもあはれなり

とて打寄て中山へ葬りけるは浦上左近とて今に親子の石碑ありとかや
 ○中山寺に目明の如來とて小僧の尊像あり惠心僧都の御作なり由來を尋に六孫王經基公
 御嫡男多田滿仲公老年におよび給ひ攝州多田に引こもりまします大内守護天下の政務をば
 嫡子攝津守源賴光に御譲りあり數度の軍に多の人を損じたる罪の程を思召御殺心ありて
 御剃髮の御願ありしに御門これを許し給はず尤政務に於ては賴光これを取行ひぬれば心
 安しといへども今にも禁庭にそむく者あらば賴光若年の御事なれば滿仲そのとき敵をしづ
 めすんば然べからずとの勅命なるがゆゑに是非なく御とまりありて然れば我子のうち器
 量を見立出家いたさせしと四番めの美女丸と申に出家いたすべきよし仰渡されて中山寺
 の中坊に千觀法師といふを師とたのませ遣はさる其姿うつくしきこと女のごとき故美女丸
 とは申せしなり其才萬人にすぐれ發明なる事たぐひ無し是によつて滿仲公御子のつちにて
 撰出し學文ありて名僧とも成べき思し召にて美女丸に仰付られしに存の外學文とさらひ經
 文も覺たまはず出家をさらひ山にて木を切て木刀となし同宿の坊主どもを相手として明く
 れ兵術をもつばらとして遊たまひ寺中の僧どももて餘し折々は御異見もあれども中を開
 入なくたゞ兵社のみを心がけ給ひ御年十四歳と申せしとき御父滿仲公はのかに聞たまひ大



いかにせん
 目ハ
 きたれ
 のせき
 みのよ
 ひのき
 人の
 さき
 ち 山 中

にいかり給ひいそぎ美女丸を連れ来れよと御使ありければ則美女丸召に應じて父の前に出さ
 せ給へば満仲仰けるは汝出家せよと申付しに經卷は讀すあまつさへ寺中の僧を打擲し
 騒がすよし以外の外のこといも父の命令を背き師のをしへを用ひざる事不届なり今よりして
 改むべきやいかにと仰ければ美女丸の仰には父の命せひなく山へ参りたれども出家の儀は
 御許し被下べし今日に治まりし御代なりといへども命が惜さに出家と成しと世の人々にあ
 ざけられん事口をししく又清和の流父の子として天下には兄頼光あれども朝敵の者あらば天
 晴出て父兄の御馬先に立ならんで名をあらはす程の働せんことを本望成と仰ければ満仲公
 大にいからせ給ひ親師の命をそむくのみならず言葉をかへす罪其まゝ置ては政道に私
 あるに似たりと御佩を抜て切付給ふ太刀の下を早もくいり庭に飛下り高屏を苦もなく飛こ
 し何國ともなく逃さり満仲公はせすくいかり給ひ家臣に命じてさびしく探しめ給ふ
 斯て美女丸は御家臣なる兵庫助仲光が方へ行給ひ父君の太刀下をのがれたるよしを委しく
 かたりかきまひ吳よと仰けるに仲光大にふとろき父上の御いかりも甚御尤なり又出家を
 きらひ給ふも去ことに候へども此世の怨敵をふせぎ給ふは頼光公あり君には父の御ため来
 世の敵を鎮め給ふも御孝行第一なれば何卒御出家をとげ給ひ名僧知識とならせたまひ父君

の御いかりを鎮め給ふべししかし先々わが宅に安座なし給ふべしとて一子幸壽丸をよびて
 若君の御仰どなし密に容静をうかいひ居たるに満仲公には美女丸の行衛を擔きびしく御穿
 鑿あるにたれいふとなく仲光が方に忍び給ふよしを聞給ひて則仲光を召され美女丸をか
 くまひ置こと其いはれなきにあらずといへども父師の命を用ひざる者わが子とて其まゝ差
 置がたく天下の政道をあづかる身猶さら不孝の子たすけがたく美女丸が首を打べしと仰付
 られしかば仲光はかしてまりて御言葉返すは恐多く候へどもいまだ御歳も若くわたらせ
 給へば又とくく御諫め申奉らば御得心もあそばざるべししばらく某に御あづけ置れ
 たしと申上るに公大に氣色をそんじ給ひ汝わが申付を背くは不忠のいたり七生までの勘當
 たるべし去ながら幼年なれども主の子なれば我が太刀を遣すべしこれ汝が手をかりて父滿
 仲が討なりと太刀一ふりを渡し給へば仲光は御太刀を請取ながら途方にくれしはく館に
 立歸る幸壽丸は父の顔色たいならぬを見て父の前に謹で其仔細をたづぬるに仲光は御館の
 次第をかたり幾重にも御託を申上んとすれば某を勘當なりと仰らるさればとて討奉れば
 御主を殺の大罪はのがるべからず我身體はこゝに極まつたり汝いまだ若年なりといへども
 若君の御供なし密にこゝを落て都に登り御兄頼光公へ仔細言上なし御託言を願ひ申へく後

の事は某よきにはからふべし早とく御供せよと云がすに幸壽丸は猶も謙で仰畏り奉るさりながら某御供申せしものとて父には御腹めさるべし思し召と察し奉るが忍れながら満仲公猶も御憤り解すしては若君の御身もあやふく父の御忠死もいたづら事と成候はんか希くは不肖なれども御歳同じければ私を御身替となして首を討給ひ面體を血に汚し若君を討たてまつりしよしを御披露なし下されなば天下の御政道も相たら父上の御身も御安泰にて若君の御先途をも見給はん事こそ難有けれど申ければ仲光はうち合點いしくも申者かな御身替仕課なば我にまさりし君忠にて御馬先の高名より天晴後世に名をのこさん去ながら此年月我身の事はいのらずして汝の老先天晴の武士たらん事を樂しみし甲斐もなく今年わづかに十四年の春秋今日をかぎりとは思はざりしと恩愛悲歎の涙をおさゆれば幸壽丸も父の言葉の有がたく則一首を詠す

あだし野に つひに かくまき 露ぐさの 身は 幸の いのち なりけり
と我名をさへよみ入て我こそ過報の身なりけり父の御手にかゝるといひ打るゝ刀は主君の御大刀首はそのまゝ若君となるこそ有がたけれ去ながら父母に先たつ事御ゆるし下さるべし外に思ひ残すことなし早々首をうちたせはれとて首さしのぶるけなげの振舞我子ながら

も天晴の言葉に氣を取直し後にせはれば流石に恩愛のやうかたなさにこぶしもたゆめば幸壽丸おくれ給ふか父上と勵ます言葉に面目なやと終に首を打おとしようつはに入て御前にいたり諸老臣の末に低頭し君命もだしがたく美女丸君の御首を玉はつて候と申上れば満仲公うち笑み給ひそれくどのなまへば仲光は器をひらき上腕にそなゆれば満仲公と御覽じてでかしたり仲光最後は未練にはあらざりしやと尋ね給ふに仲光謙で中々もつていさぎよき御最期にて候ひしと申上御顔ばせを見奉り此御首は某に下し置れたく忍ながら御ぼだい御供養仕度と申上ければ満仲公尤のことなり罪人ながら汝は主従菩提はことろにまかせよと云すて其座をたちたせふ並居る家士は舌を巻我御子の首を見給ひても少も御顔色かはらせ給はざる誠に天下の政務をとり給ひ賞罰あきらかなる大將軍とみなく感と奉るかくて仲光は我子の火死とならざるをよるこび我家に立歸り若君の御さげんを伺へば美女丸は此事をしり給はず今朝より幸壽丸は出きたらずいかいせしと尋ねたまふに仲光は謹で幸壽丸はこれに罷あり御逢下さるべしとて彼首を出ければ若君大に驚き給ひ何事にてかくなりしぞや不便の事やと仰あれば御父君のいかりつよく君を御介抱申事御さきに逸し君の御首を打よの殿命御説御言葉をかへし奉れば御勘當との仰せ君命とは申ながら打

奉るも主君の若君何ぞ此處をふとしまらせ我切腹と定たるに悴幸壽丸御身替たらんと希ふがゆゑ則某が手にかけ主君を偽るには似たれども若君を討奉りて披露し實見に入たてまつるに悴が念願のどいさしにや御政相すみたれば御首は某申たまはりてたい今歸宅候なりと申上れば美女丸はことにおどろき何とて我にはしらせざりしぞとくも斯としるならば情なくも幸壽はうたせまじものをと伏まるびて歎給ひしが良あつて涙をばらひ給ひこれ元は我出家をさらひしより發る處にして父の仰に背しよりの事なれば皆これわが誤なり此うへは幸壽がばだいのため剃髮染衣とまをかへんと夫より比叡山横川にのぼり惠心僧都の御弟子となり名を深源坊と改め修行なし給ふに二十一歳の御とき叡岳にて第一の學者となり給ふ其後滿仲公の御館にて御佛事ありしとき惠心僧都を招請ありけるにかの深源坊を弟子の内にまじへ連て多田の館へ御出あり御法事はつて滿仲公の仰には僧都には諸所にて御説法ありと聞ぬれども我は長官の身にていまだ聴聞いたさず此席にて説法一座聞せ給ふべしと仰ければ僧都申さるには我すでに歳罷より齒も脱てことばもれ聞せ給ふに苦しみましたん幸ひ今日召連たる弟子にいまだ若僧なれども修行候者候へば是を名代として一座演らせ申すべしと則深源坊に此旨を命じ給へばかしこまりて滿仲公

御邊所其外老臣等の中を少しも憶せずうち通り高座に登り給ふ僧都も聴衆にまじりて聞あるに往生要集の末の處を讀み給ふ滿仲公其外もみな感涙をながしてありがたくおぼしめし扱々若き沙彌ながら天晴の學者といひ辯舌といひ惠心の御弟子はどありかゝる僧を子にもちたる親はさぞなうれしかるべしと仰ければ惠心承り親の身にては左こそと君も思召候哉滿仲公答ていかでか既さるべきわれも一子を出家になさせんとせしに仔細ありて失ひたり活てあらば此僧の年かつこうならん惠心深源坊を更に呼出し君が失ひ給ひし美女丸君すなはち再生してこの深源坊今山頭一の學者とよばれ給ふ御勸氣御救免あつてふたゞび父子の御對面下されたしと宣へば深源坊は父の前につしんで不孝の美女丸命を背き奉りしを仲光が忠臣にて今日まで密に生を保ちふたゞび父に逢奉る難有さよと涙をながし仰ければ公は満面に笑を含ませ給ひいかに美女丸よ我長官の身なるが故政道に私なさじと不便ながらも仲光に申付今は此世に亡ものとなしたれども心中の悲歎年月わすれがたかりしが仲光の計らひといひ師の御蔭にてかゝる學匠に登し事を嬉しけれと御目を濕し給ふ御邊所は美女丸が失給ひしを聞しめし御涙のはしあへたまふ隙なく終に御兩眼をさへ泣つふし給ひしが今美女丸と聞たまふと思はず御帳をまろび出深源坊の御手とど

り御脊中をもなで搜りうれしなきに泣給ふかくて悪心は横川に歸り給ひ深源坊は多田の館に御滞留ありしが母君に向はせ給ひわれ父の命を背が故に母にはあまりの御歎きをかけこどさら御目さへもしのさせたまふも皆これわが罪にしていつの世にかは逃れ候へまど御涙を流させ給ひながら懷より小像の如來を取いだし是は師の坊の御作にて我が守にせよとて給りしより晝夜肌身とはなす候へども今かく母君の御眼本復のためになげ申へし世の人恵心佛と尊敬する如來朝暮尊信なし給はいいかで奇瑞のなかるべしと御手にわたし給へば母君はあし頂さかゝる靈佛を身につけたてまつるも全く一子の出家による處にして未來のほどもことに頼母しとことの外に御悦あり御持佛堂に安置せしめ晝夜御信仰ありしかばふしぎや翌年八月十五日の夜にいつものごとく名號をとどなへ給ふに光明御目に入どおぼゆるせ給へば忽ち御兩眼すしくならせ給ふこれより倍々御信仰深くましくけるが薨去のち當寺に納め奉る處の尊像なりよつて後世目あきの如來と稱する處なり

御詠歌

野をもすぎ里をもすぎて中山に

まゐるころはのちの世のため

御歌のころあきらけく別に子細なしとみかく野山を遠くすぎざりてはるくど此中山にまゐるころの清き徳によつて後世極樂往生うたがひなしとの御意なり

○當山獨鈷の尾の別野院は宇多天皇の勅願所にして數多の佛舎を造立ありける其のち多田滿仲公の御祈禱所として愛染堂護摩堂御建立あり領田八十町御寄附せらる御子美女丸は當山中の坊にて修學ありしかるに壽永の亂に回録焼亡せりよつて悉く頼朝公御再興あつて源家累代の御祈禱所たり其のち天正の兵火に焼亡す秀頼公再興あらんとてかりに下院を建立あり雨露をふせぐのみといへども往古太子七生より以前に刻給ふ靈像を安置し給ふ寺なれば末世の衆生一心歸命のともがらは利益眼前にかうふり諸願満足せまといふ事なし

西國三十三所 觀音靈場記圖會五

〇二十五番 播磨國賀東郡新清水寺 御嶽山と號す

普陀洛志に播州新清水は法道仙人の開基なり是田村將軍異國征伐のとき今堂建立あり都清水寺に同じく依て新清水寺と號し本尊十一面觀世音は聖德太子草創にして人皇七十三代額河院寛治五年光善上人の再興なり播丹攝の三國の界五岳山と號す金堂は推古帝御建立講堂は聖武帝御建立藥師堂は池の二位殿御建立大塔は祇園女御阿彌陀堂は賴朝公御てんりうすなはち金輪聖王天長地久國土安全の御祈願所なり堂塔二十三所坊數總じて六十坊御米印六十石京洛の大佛妙法院御門跡の御末寺にて三十三所の二十五番靈場なり又元亨釋書には播州犬寺とも見ゆたり犬寺の古跡を此處へ移されしこと有にや田村麻呂は桓武帝のときの人なり爰に人皇三十一代皇極天皇の御代に朝敵入鹿大臣をば大織冠鎌足公誅伐ありしより諸國へ御觸ありて弓馬に達したるものは都に登て敵を亡すべしとの御事あり諸國より名ある武士ども衆る播磨國に一人當千と呼れし陪夫といふ武士都に登て御みかた申三年の戰に終に入鹿を退治ありてそれく恩賞を給はる陪夫も播磨に歸りしに三年の留主中に女房

なるもの召遣の小侍と密通せしにすでに懷妊して五ヶ月におよべりよつて留主中に二人密談し謀計をもつて陪夫を害せんとはかりしに陪夫は斯ともしらず歸國なすといへども女房の懷胎にはいまだ心つかざりしが六七日休足のうち小侍主人に申けるは御留主の内かねて御このみの御事と存じ山の奥にかけ入爰かして獸多かる處を見定め置たり都の戰に御つかれにも候はん御氣晴かたぐ御出あるまじくやといふに陪夫はこのめる道なれば大によろこびよくこそ心付たりさらば行へし者どもに用意いさせよとあるにや大勢の御供有てはさわがしくて返て得もの有べからず某のみ御供申參るべしといふにさてく留主の間になんぢ強勇のもの成しとて弓箭をもたせ主従たゞ二人神ならぬ身の悲しき上ありとは夢しらず小侍は仕すまじたりと女房にめくばせし跡に付て出たりける陪夫は常に畜たる獵犬黒龍白龍とて寵愛の二疋をつれて山にわけ入とも鹿猪などさらに見へず是はいかにといふに小侍は我見おきたるはまだ奥なりこなたに來り給へ案内せんと先にたつて十町計いたりしが更に人跡はなれたる深山ことに岩石屏風を立たるをとき處これ屈竟のどころなりと主人の持せ置たる弓矢を矢庭に満月の如く引しぱり陪夫にむかひ切て放たんとす陪夫一驚せしが汝しばらく放つことなかれ何が故にわれを射んとするや子細をかたらば義

によつて命をつかはすべしとさすが播州にて一人當千とよばれたる覺悟のほどとゆゑし
 けれ此とき小侍は矢を引しぼりながら今こそつゝます語るべし其身上洛の留主のうら奥
 方と密通せしが既に懐妊して五ヶ月なり此事顯はれては二人ともに其まゝにては置るまじ
 とつて人跡たぬたる此山中に引入御身を害せよと奥方の言付なり今は通るゝに道あるまじ
 尋常に射らるべし陪夫これをきよめてよくもつぶさに語りたりこれ皆吾運命の盡たる處なれ
 ば望のごとくわれ尋常に命をわたふべしいかに黒龍白龍これまで龍愛なし遣したれども
 今現在の女房のために命をはる處なりされども常國にて人にしらるゝ我なるに空く山中に
 害せられたりといはれんこそいとも口をしき事なりけり我死てもあるならば汝ら二正して
 いかにも人にしられぬやう死骸をかくし吳よこの事しかと頼ぞよと犬にむかひて遺言し
 らば存分に射殺せよとて岩上に座をしむれば待まうけたるかの侍は十分に引しぼり已に
 切て放たんとする處に二正の獵犬どびかゝり一正は引しぼりたる弓弦をくひ切り一正は侍
 の咽に喰付ば吐といひて倒るゝ處二正とも脇腹手足に喰付く侍の息たぬたるを見てう
 れしげに一聲さけび陪夫の前に來りて尾をふりければ陪夫は思もよらず兩犬のふるまひを
 感じすがた社畜生なれ怨を害して我が危急をたすくる事のうれしけれでかしたりいざ歸り



て女房を手討にせんとかの侍が死骸は其まゝ捨置館ちかく立歸りしが女房は謀計いで仕
 果しやと待居たる處に思ひがけずも陪夫一人歸りしかば女房は大に驚きながら立出る處を
 かの兩犬また飛かゝつて女房をも噛殺陪夫はいとくゝおどろき二疋の犬を不便がり畜生だ
 にかゝることを聞分主の恩を報ずるはまさしく犬にてはあらず我に子とても無れば今より
 二疋の犬を子と思ふべしと朝夕の食事も我と席を同じうして育しに其のちかの犬二疋ども
 死たれば大に力をあとし畜生道をまぬがれさせんがため千手觀音を作り一字を建立なしけ
 るよつてこれを世に犬寺と號すこの事元亨釋書にも見ゆたりさて犬の恩をしることもまた
 有が中にも近江の國に獵師あり或とき犬をつれ山深く分入しが日の暮ければ道の案内はし
 りながら暗夜なれば月出てこそ歸らめと木の根にこし打かけて居眠たりしがかの連たる犬
 かの獵師にむかひしきりに吠けるにかの著汝じ主を見わすれたるかときまぐなだむれど
 も猶しきりに吠てすでに飛かゝらんとするにかの獵師大にいかり憎き畜生のふるまひかな
 どと山刀を引ぬき犬の首を丁どきるに犬の首獵師の頭上に飛を見ゆしが上より鮮血のなが
 れ落ること瀧のごとしとはいかにとすかし見るに折ふし月のさしのぼるによく見れば松の
 梢より大なるうはばみの胸とおぼしき處に犬の首くひ付て既にうはばみも死たるなり我頭

をきられながらも主の命をたすけしは是形ち畜生ながら其志は人にもまされりとして則
 神にいはいこめたり犬上明神これなり此わたりを犬上郡といふとかや

○是は近き事ながら都の中京に町家の犬子を五六疋生けり餘に人だかりける故子を取ら
 れもせんかどあんじけると見ゆて横町へくはへ行しが又こゝにても子ども多くあつむ
 るゆゑ一夜あかしかねあこと爰よと隣町を日々持ちはり又元の町へつれかへりしが
 や犬は狂氣のごとくやゝもすれば人にかゝるけしきなり人見かねておや犬の居ぬ間を
 かんがへ四條川原へ持行おきしが一夜のうちに子をつれかへるこれは餘り近き處ゆゑ
 しりたり又都の西二十町計もあるところへ親犬にかくし持行おきしが又一夜の間に残
 らず子をつれかへりける事ありこれを思ひ考るにちくしやうの言とは人間にわから
 ねど人のいひきかす事は犬はよく聞しるを見ゆ其ときは親犬にかくしもち行しなれど
 もあつまり居人口ぐらにも此度は都の西迄は得たづね行まじなどいふを驚きとさか
 き夜に入たづね行事と見ゆ此事を思ひあはすれば犬寺といふも犬上明神も違ふことな
 し犬にかぎらず生あるもの人にあだなすものは是非なし生あるものを放つ事は人たるの
 道なり小虫といふども殺すことはかたくすまじき事なり

○陪夫の彫刻なし奉る千手觀音は口の院の御本尊なり怨てきの家來を犬二疋して退治せし其功德のためにつくり奉るどころの怨敵退散の觀世音なれば斯の如き御利生あらたなるべき也

御詠歌

あはれみやあまれき門の品々に

なにをか浪のこゝに清みづ

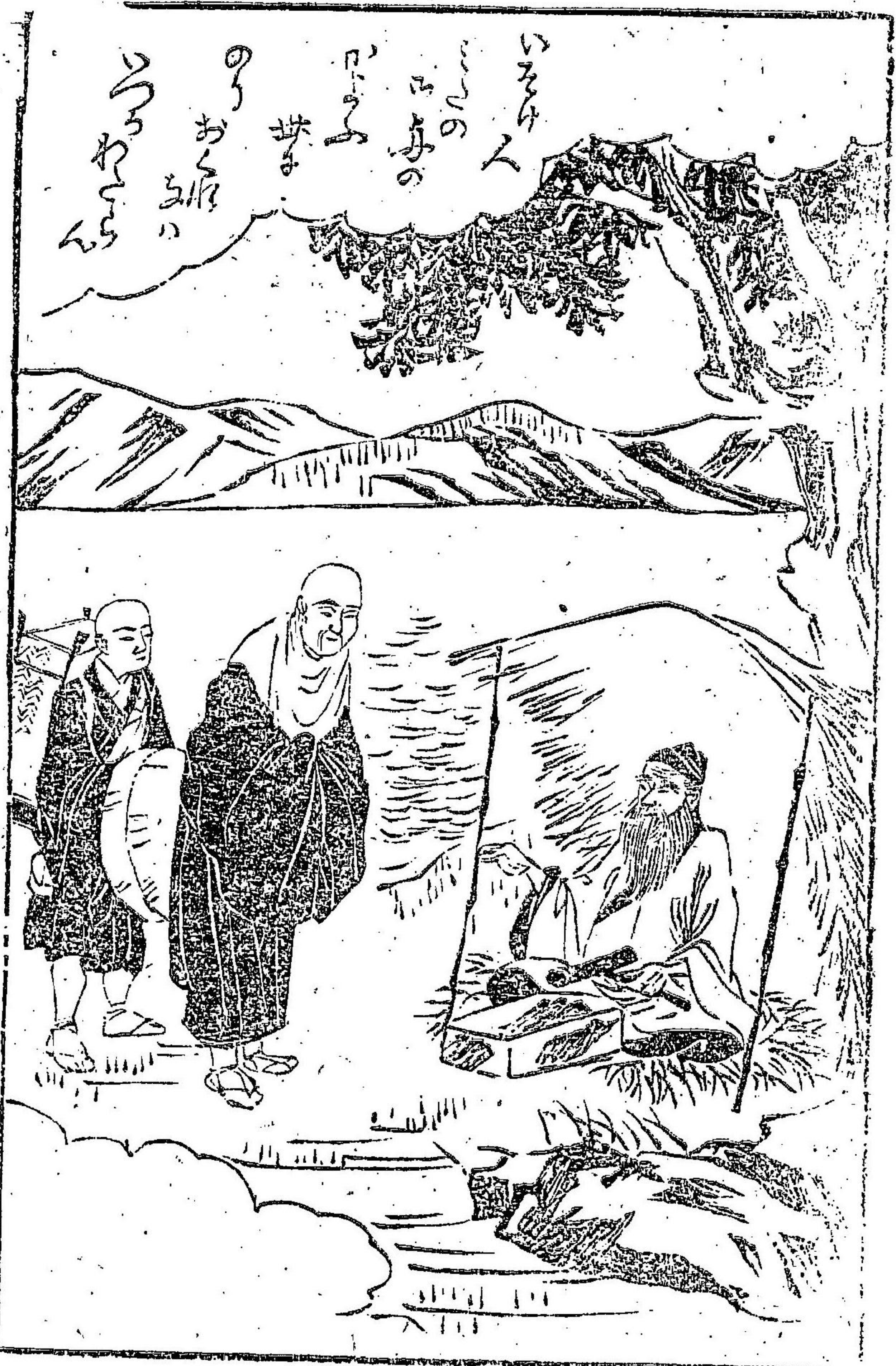
大悲の衆生をめぐみあはれみ給ふ事の普くかよふ門々にて則普門品といへるなりかく其衆生の門々にさへめぐみ給ふにかくこゝにまふで來つる人々にいかでかめぐみのなきやあるといふ心也

〇二十六番

播磨國賀西郡法華寺

一乗寺と號す

大化年中に山を開き人皇三十七代孝德天皇白雉元年に建立なり當寺を法華寺と名付たるは此山の峯八つにわかれ法華八軸のかたちなるが故に法華仙人は天より雲にのりて此山法華經八葉の蓮花の形にて成佛の靈ある山と見さいはひ岩窟あれば八つの峯の真中の岩はに籠



て飛鉢の行をなし給ふ飛鉢の行といふは釋迦の弟子の羅漢たち勤られし行にてたくは
つせんと思ふ方へなげれば鉢かのれと民家に飛行し人々施入すれば又とび歸て我前にもど
るなり是を飛鉢の行とはいふなり法道仙人もこの行ひをなし給ふ法花山に居てはちの子を
播磨一國へまはし給ふ日本にてはいまだ此行をしらず何か丸きものが飛來るとて棒竹な
んとを以てたゞき廻るほどにかの鉢は空しく法花山へかへる人々はあやしきものがかの峯
へ上りたるを正體を見といけよとて追々に跡を追て來りみれば岩窟の中に俗ども出家とも
見ゆるものゝ籠りて其前にかの鉢ありさてこそ此ものゝ所爲なり己は何者にや正體を
あらはせ此峯にすんで丸き器をどばせて國中をさはがす悪者なれくと呼ばれば中々た
くはつを入る處にてなく打殺さんもしれされば法道仙人目をひらき日本國にはいまだ佛法
ひろまらずしらするも道理なりこれは飛鉢の行とて天竺釋迦の弟子羅漢たちの勤給ふ行な
り我この峯にて觀念の行をなし千手觀世音を本尊とし飛鉢のたくはつを乞ものなり心ざし
ある人はたくはつを入申べしと有ばさては有がたき御事かなど人々はじめて歸依し奉る
それより飛鉢あればそれ御鉢のまはり給ふとて托鉢を入ける其とき天竺より持來給ふ千手
觀音はいたつて小佛の金佛なりよつて今の一丈二尺の大佛の御腹におさめ外に寶物には鉢



の子水晶の珠數となり其後人皇四十五代の御と西國より禁裏へ御年貢米をふねに藤井某といふ者はりまなだを登るところに此藤井といふものけんどん邪見の者にて舟の先に鉢の子とび來りてといま藤井大に怪しみけれ船頭の曰これはむかふの峯に法道といふ貴僧すみ給ひて飛鉢の行とてたくはつし給ふなる御心ざしあれば入たまへといふ藤井大にかつて其やうなる魔法つかひの悪ものいかでか志を入るべきやまこと托鉢をするとならば自身の間々にたちて手のうちを乞ふべきに居ながらにして鉢を飛す事あやしき魔術なりと鉢を足にかけて海中に蹴込しかば鉢は船のくるりをめぐり法花山に飛かへるゝついでふしぎやな船につみたる儀ころくと動く見ゆしが一時に儀飛上りく山の峰に飛行と木の葉のごとく船中驚き儀をおさへとむる者は人とも飛行がゆゑ是非なくわれよくといふばかりあされ果ていたりしが藤井は大に驚いかるといへども取どむる事叶はずこれ全く法力をさみし給ひしがゆゑなりと人々おそれかのくに此米とられては身上なりいかはせんとうろたゆるに船頭のいはくいづれかの山にいたり法道仙人に託言し給へといふに藤井も大に後悔し船を磯邊によせて人々藤井を案内して峯にいたり岩窟にいたり見ればかの米儀ごとく傍につみかさねたり藤井は法道仙人にむかひ手を合せ我意にまかせ鉢

を海中に蹴入たる事今は後悔仕候最此米は御年貢米に候得ば一儀にて不足仕りては申譯たちがたく何とぞ御歸しくたされよとあやまり入て詫ければしからは返しつかはすべししかし内一儀は所存あればのこして置べし藤井はよるこびしからは船頭どもとのごとく船へはこびくれよといへば法道仙人いやく人力にてはこぶに及ばずとかの鉢の子をなげ給へば舟をさして飛ぞと見ゆしが數多の儀又これにつきて飛鳥の如く舟にかへり元の如くに積上たり内一儀は中程にて落る其むちたる處いま米落村といふ斯て此船なんなく都に着し年貢上納なしけるが内一儀不足ゆゑこれはいかにと有に船中の子細つぶさに言上するにふしぎの事とて關白殿下の御耳に入御門へ奏聞あれば日本に左様の神通方便の僧あるこそ幸ひ成とて其處に一字御建立あり聖武天皇の勅願として開山は法道仙人持わたり給ふ金佛觀世音今の千手觀音の御像の御腹に納たてまつり播磨國第二十六番の法花寺とは申なり

御詠歌

春は花夏はたちばな秋はきく

いつもたえせぬ法のはな山

宇治の大納言隆國卿の宇治拾遺物がたりといふ書に志貴の里に上人あり飛鉢の行をな
 しはちの之藏に入て米藏ととも飛けりこの藏のけしら材木のちくはくさりしが其
 残りし木をわつめ佛ぼさつをこしらへ志貴の佛といひて諸人信心いたしたりと書殘し
 給へり法道仙人にもとどらざるものか其ころ延喜の帝御惱もくわたらせ給ひて諸寺
 諸山の貴僧に加持祈禱をなさしめらるれともさらしにるしなかりけるにこの僧に仰有
 ければ山にゐながら加持しはへりしに 忽御惱平癒ましくけるとなりまた聖の姉な
 りける人たづねきたりて服たいといふものを聖に奉りけるが是を常にきてすだぐ
 に破けるを堂にすて置れけりそのやぶれ切を二二寸づの諸人うけ得て守袋に入れ
 ればことごとく富貴と成けるとぞまたもろくの疫病等のがれけるといへり志貴の佛
 とあるは毘沙門天の尊像これなりよつて富貴をなさしめ給ふとあり志貴山の縁起に
 はし

〇二十七番 播磨國鋤西郡書寫山 圓教寺と號す

一條院永延二年の開基なり性空上人は六根清淨の通力を得たまふ知道兼備の名僧なり大

和の國多武の峯に増賀上人といふてこれももとら名僧にておはします多武峯は高山にて
 冬はこの外ひゆるゆる増賀上人思召には播磨の性空上人につき有なれば播磨紙子をた
 のみ紙子をきたならばあたかなるべしと思給ふて六神通力を得給ふ性空上人なればそ
 れをしり給ふとまに播磨の紙子をもとめ弟子衆にもたせ増賀上人の元へつかはし給ふ増賀
 おとろき給ひ此程紙子を調へたく思ひたれどもいまだ口外に出さずしかれども六神通を得
 たまふ性空上人なれば早もしりて持せし給ふうれしさよと押いたいきて召給ふとなり
 此事西行上人の撰集抄にものせたり此性空上人いまだ俗なりし時名は忠太小太郎とい
 ひて關院左大臣藤原時平公の御孫時朝の中納言に仕ける侍なりしが學文に秀てことさら
 手蹟をよくなすがゆる中納言の命にて若君の師範となり専ら教授なし奉るしかるに此御
 家の御先祖鎌足公住吉明神和歌三神に御祈ありて子孫はんじやう長久の御願を込給ふに住
 吉大明神の御告に子孫長久のしるしとて硯石を給はるとつてこれを和歌明神の御神體とな
 し何事によらず目出たき折からは拜し給ふしかるに中納言どの大納言に御昇進の御よろこ
 びとて御硯をかざり注連をはり神酒御膳をささげ給ひ大納言どのには参内なし給ふ御留主
 のうち忠太小太郎のみひけるは此御家に奉公なせどもいまだ和歌御神體を拜せし事なし幸

にとくと拜し奉らんといひ竊に忍び行御祝を袖にうつし慎んでいたし居たるどころへ
 ばたくと足音するにあどろき元のごとく直さんとするに氣をせきしゆるにやはたど取
 とせしが床ぶちにあたり二つにわれたり小太郎ははつと氣を取のぼし消べき心地して運命
 の盡にやわれ賤しき身ながら袖にうつせし神罰なり御家大切の御寶を損じたれば生て有べ
 き身にあらす十方にくれたる後に御とし未だ十二歳の若君小太郎かならず案ずる事なけれ
 其方が破たりといへば大ていの事にあらす我わたりといふべし必わがいふ通りにして
 置べしと御しはらしく仰ける有がたくは候得ともいかにさやうの事なるべきあまじとい
 へば勿體なしいかやうの御とがめをうけどもいかに若君に此つみをかうふらせ候べしと申
 せどもいやく只我にまかせ置べしとのみ仰けり處に大納言どの御歸りど人々たちさば
 小太郎は覺悟なして御次にひかへたる大納言どの其まゝ御祝の間へいたらせ御拜なし
 給ふに硯ふたつにわれたるを御覽じ大にどろきこはくいかにと狂氣のごとく見ゆさせ
 給ふ此とき若君父の卿の前に手をつき給ひ御留主のうちに拜し奉り手に取上し折から御
 歸館とさしこもるせき取おとしかくの心とく相成候と仰ければ大納言どの涙をばらくと
 ながし給ひ抑鎌足公より代々傳來の和歌の御神傳として拜し奉り今日までつゝがなか



りしをいかなればなんちは三神の御こゝろにかなはず御魂のかけならせ給ふ御事ぞや大納言に昇進の祝の中なれども御先祖への由わけには其方が命を助かされたしと仰ける小太郎これを聞たせりかね飛で出御魂を破たるはといはんとするを若君うちけしこりやく小太郎何をかいふ今さらわれを助けんとて其方なりといはんとする心ざしはうれしけれども命を助からんとていかにも其方なりといひ遁るべきにあらす實に損たるはわれに相違なければいかやうにも罪したまふべし大納言どのには恩愛の涙せき上給へども御太刀に手をかけ給ふとふもへばあへなく御首をうちかとし給ふ小太郎これを見るよりついで切腹なるんとするを大納言との聲をかけいかに小太郎今汝が死たりとも若かふたしび活べきにあらす左ほどに若か最期をふもはい汝今より出家なしばだいを吊ひ得させざるぞや仰ければ今更死するにも死なれざる次第にてせひなくくも其場にて髪をさり若君の御遺骸をいださる御前を御いと申厚く奉り奉り夫より諸國修行に出けるが筑前の國勢より山の峯の岩窟に入観念の住家とし十二年の間法華三昧に入り天性の名僧と成給ひ御ぼだいを吊ひける俗のときより學文達才の性空上人なり久しく岩窟に入修行堅固に身心をみがき六根清淨の身となり六神通を得給ふ智道兼備の名僧と成給ふある夜天童來り給ふて我は梵天帝釋王の御

使なり觀世音に仕んとならば播磨の國書寫山は觀音淨土の靈場なり行て修行あるべしとの御告にて夫より書寫山へ登り柴のいはりを結び法花經讀誦かこたりなくある夜天人あまくだり庵の脇より櫻木し向ひ合掌して四句の文をとなへたるを上人御覽じていかなれば其さくら木にばかり拜はなし給ふぞ天人こたへて悉も此木は觀世音の靈木なり早く此木をもつて觀世音を作り此處に安置し奉るならば末代衆生利益を得る有縁の靈場となるべし急ぎ造立あるべし上人これわが願ふところなりとて御告の靈木の櫻木をもつて御本尊を刻し奉り人々の助力をもつて庵室を一字の堂と成給ひぬ書寫寺これなりまた上人は法花三昧の讀誦なし正眞の普賢菩薩を拜せん事をねがひ給ふに御夢の告に正眞の普賢菩薩を拜せんとどもふならば江口の里に行べしとの御事なり上人は御つげに任せ江口の里遊女町に行きたまひて我は性空といふものなり普賢菩薩をかみに來りたりと家ごとく尋給ふに大なる家に傾城あまた並居しが内より男出來り里のならひなればいかにも普賢菩薩を拜ませ申べし御通り候へど座敷へ通しまづ酒肴をいだし女郎三昧線をひき小うたをうたふ上人は御心をすまし見たまふに普賢菩薩は見給はず其上何やらんかしましき歌をうたふよとらるさく思しけるがいやく此内に普賢菩薩をしくても肉眼にては拜れまじ六根清淨の眞眼

をひらきかみなば現じ給はんを觀念し目を閉居給ふを歌の唱歌も上人の御耳には實相無漏の大海五塵六欲の風を吹かせども隨圓真如の浪はたぬ日もなしわれは普賢菩薩なれど白象にのり居るばかりにては信するものなく助る縁もなしそのゆる誠のすがたをかくし假に遊女のすがたとなり萬客を枕をかはし色情より引入て衆生を助んためなまの唱歌なり上人此とき目をひらき見給へば普賢菩薩顯然として拜れ給ふぞ有がたき江口の諷にのぶる處これなり實相とは常樂のさとりを即きたる處をいふと毘婆沙論にあり無漏とは西方極樂無漏とは煩惱の迷ひ五ぢん六欲をはなれ無漏の世界六根清淨とし穢たるものあれば大海にて不淨のものを水底へ沈まして穢を請ず菩薩は不淨をばらふがゆる大海とす因縁果報の四つ有は大海に請す此四つといふは心のうちに人を殺たしと思ふ因なり殺といふは縁なり又行は報なり殺は業なり五塵とは目に見て惡を作り耳に聞て惡をつくり鼻にうまき匂をかき嗅ひ惡を起し口にてさまぐの惡をなすこれ五つの惡塵なりといふ六欲は心にて色聲香味觸法の六欲なり此五塵六欲の風は吹ねども遊女と成てする縁として助給ふ真如とあらはれて不淨なる處に有て助るなり普賢菩薩は我なりとうたふも辨も法の聲と上人の御耳に聞へけり

御詠歌

はるくこのばれば書寫の山おろし

まつひのひらきとみのり成るらん

愛に和泉式部がうたにも

くらきよりくらき道にぞ入にけりはるかにてらす山のこの月

日は入て月はまだでぬたそかれにかへけててらせ法の燈

又寛和帝書寫山へ御幸ありて上人御たいめんのとき竊に書工をめし上人の像をうつさしめ給ふに俄に山なり谷にひいき震動せり法皇おどろき給へば上人のいはく怪しみ給ふ事なかれこれ我像をうつし給ふ故なりとのたまひ又上人の御顔に小さきほくらあり書工しらすして寫し得ずかの震動に驚きて筆をふとせり其あと則はくろのごとく成けり人や感せり今に寶藏に納ありとかや又法花經勸發品に法花修行の人の前には普賢菩薩六牙の白象に乗りてあらはれ給ふとの事なり

〇二十八番

丹後國與謝郡成相寺

世野山と號す

人皇四十二代文武天皇の御代齋遠禪師は周防の國の人なり初は都の東寺に居て後故郷に歸
 り常に觀世音を念給ふ其後靈場を求め爲に諸國をめぐり丹後國にいたり與謝のうみ天橋立
 の風景世にまれなりければ有縁の靈地なりしばらく此地に止るべしと思召給ひ中村の郷世
 野山にのぼり柴の庵をむすび法華經讀誦するに隨一の山なりとて坐禪の床に入禪法を勤め
 給ふ後々は所の者ども尋みて心ざしを山にはこびけるゆゑいよ／＼里へは下り給はず常々
 觀世音を念じ名號と法華普門品を唱へおはします然に丹後國は雪多き國にてある年の冬よ
 り春にかけ晝夜どもなく大雪ふりつゝり山も里も一面の雪となり二丈餘も積りければ里だ
 に自由ならざりける里人等齋遠禪師の御事を案じけれども中々山に登る事かもひもよらず
 庵室は雪にうづもれ人りんも絶たる折から食物を送るものも無く寒に閉られ食に飢給ふとい
 へども禪法修行の御身なれば御いとひもなく普門品を讀誦なし給ひしに庵のかたはらに少
 の空地ありしに鹿一疋死て見ゆければ齋遠禪師これを御覽じさても不便や汝も雪にてゑじ
 きに饑たるならん如是畜生被菩提心と回向なし給ひ次には我身もかくのごとく飢死るに程
 あるまじしかしうぬ死して菩提の爲になるにもあらず此鹿殺たるにもあらずあはば殺生
 といふにもあらず三がう肉も命助る薬どもならば救し給ふはこゝなるべしと御心付給ふ



て我も三四日も食せざれば死を待のみなり是を食せばやと思召ども俗にても四足あるものを食する事は戒たりまして出家の身として有間じき事と御思案あり人口も恐るゝといへどもこれを食し命をいささのび諸人濟度なしなば却て鹿の菩提ともなるべしゆるさせたまへと觀世音へ御斷あつて鹿のふどもとを切て鍋に入煮とくのへて一箸食し給へばたちまち元氣増しければ此上はこのんで喰に似たれ共又々飢たるときと今一切を其まゝ鍋にのこし置給ひ法華經普門品を唱へ御佛へ御詫あり又鹿のためとあはしめし陀羅尼をよみ心を澄し居給ふところへ早春にもなり雪もすこし消ぬるを待かね里人見舞に來りいかになされて御凌ぎありしや定て飢させ給ふらんとて追々と見舞けるに常にかはらず御續經の御聲聞にける故みなく不審にもひ鹿室にいたりみるに御無事なりいかして御しのぎありしや何をか食して御命をつなぎ給ふと尋けるにされば既にうね死なんとせし頃軒にて死たる鹿を喰たりとありの儘に宣へば夫は誠しからずといふにいまだ一されを鍋に残しまさしと仰けるに鍋を見れば何もなく何やらん箱の付たる木くづある計といへばいやく鹿肉あるはづなりとて立て見給へばいへるごとく木屑なり禪師とて付持佛堂をひらき見給へば聖觀世音の腰より下二寸ばかり切たるを覺しき紙ありさては我飢死するを不便と思しめし鹿と見

せてばらつこの御身をたへ給ひしかもつたいなの御事よと察りし木屑を觀世音の疵の所であてたまへば元のごとくになれ合疵口癒させ給ふ其時里人は現在に見て齋遠禪師の聲をしり其處に一宇の堂を建立せりよつて成相寺と申則御本尊聖觀世音は禪師の念持佛なり誠にかくのまごとのふしぎあるは常々眞の心をもつて念するゆゆえにいかのまごとは現世にてもかやうなる御たすけにあづかるなりかなしきまごとの神たゞよとて其まごとい俄に手を合し神と佛とてあはてたりともかゝる奇特はあらず年老ゆる身は後世のねがひ女はさんこのうれひをまぬがるゝやう男は外に出れば七人のかたきありといへば常々信心あればあやふき折からに身がはりに御たち下さるゝ事あり現在穴生寺の觀世音を刻み奉りし眼落といふ禪師は毎日觀音經を三十八んづよみ信心いたし大江山にて盜賊にひひしとて觀音身替になせ給ふ事證據なりかればそれとも見へぬとも常々信心のまごともある家には病氣災難のうれひすくなきものなり

御詠歌

波のおもまつひのひさき成相の

ひせふきわたす天のはしたて

三淨肉の事都建仁寺の國師の書給ふ書に廣忍長老といへる貴僧おはしけるが病氣にて醫術
 藥力届かず弟子衆は師に放るれば佛法のともしび消るがごとくおもひ悲しめども詮すべき
 醫術も盡此上は醫者の云に任せ師に隠して肉を進すべしかやうのときは三淨肉とてゆるし
 あれば師どがめ給ふとも弟子の 働なりとてかしてき子どもにいひふくめ籠のさどへ魚を
 買にやり随分と人に隠しくれよと申遣しけるあゆの魚をもとめ箱に入山に歸るに汗なが
 れなまぐささを知も夫は何ぞと尋ければ子どもかしてくも長老さまの御使にてもちたる
 は法華經なりといふ子供心にもいひしものゝ長老さまの御ぞんじもなき罪を受させてはど
 心の内にて觀世音を祈るに里人いよくあざけり夫はふしぎなる生ぐさ法華經なりさや
 うの有がたき御經ならばおがみたしと引たくる是は封の有といへども聞入す子ども藏王權
 現役行者諸天善神佛法守護し給ひ長老の御難をすくひ給へど念じける彼男あけ見れば法
 華經入軸なり是を見て男大にふどろき我邪見の心より勿體なくもかゝる事を成たりゆる
 したまへともとのごとく箱へかさめ便をかへしける子ども此ことを弟子衆にかたりてひら
 き見れば本の鮎なり此事長老さとし召なるほど鮎にあらす法華經なりとて 食給ふに次第
 に御本復ありしとなり吉野の山は魚肉などををいるべき山にてはあらねども誠のこゝろなれ

ば神佛の御恵にてたちまち法華經と轉じけるなり誠はどありがたき者あらじ是子供ごころ
 に一團に念じたる功方なるべし功德の多少によるにあらすまた天竺にて大王七堂伽藍を建
 立なされ此功德何ほどの事やと問給ふに尊者の曰無功德未來は何國へ行を無間地獄とこた
 へ給ふ夫はいかにといふに今までは代々同じき王なれども我こそは伽藍建立せしといふ心
 の見へて我といふ心にては功德もなし却て地獄へ落給ふと示し給ふとなり
 麓には天の橋立切戸の文政とて日本三景の一にて風景なくめならず
 ふる雪に生の道のスるまではいまだふみ見ん天の橋立
 たどふべき方こそなけれ松がねに夕霧わたる天のはし立
 よさの浦入うみかけて見わたせば松原とはき天のはしたて
 さゆる夜の入うみかけて友千どり月にとわたる天の橋だて

〇二十九番 若狭國鴻浦松尾寺

人皇六十六代一條院また鳥羽院兩帝の御建立なり昔丹後若狭の界に鴻の浦といふ處今にあ
 り此地の鹽はみなことくくすなどりを常の業とす然るに平安帝の御宇にや其浦の漁人舟

十七艘にて夜る海上に出で漁獵す俄に大風吹きたりてかの十七艘のふねを四方八方へ吹放
 したりあるひは破損しみなく其行末をしらず其中に結城宗太夫といへる者は其浦の長に
 て常に觀世音を尊み一寸八歩の馬頭觀世音の御像を常々身を放さず念じける最心さしや
 さしく村民をあはれみ慈悲の心深かりけるゆゑに村の庄官として人皆うやまひけるとなり
 斯のまどく陰徳の人なりけるがしかるに其ときこの獵船ごとくく行術しれず漂流してある
 ひは打くだかれ海底のもくづとなりしが彼宗太夫が乗たる舟も悪風に吹ながされて
 羅刹鬼國にいたる故郷には此事を夢にもしらすして定て海底のもくづとなりしが悪魚の
 じきとなりぬべしと殘る妻子大方ならず親類あつまり涙をながし歎悲しむ事限なし日かず
 をかぞへぬれば今日は百ヶ日なりとて僧を請じて吊ける處へ宗太夫のみ一人歸りければ
 數多の浦人ともより集りよるこふ事かぎりなし我々が夫誰が子はいかになりやと宗太夫に
 取付なげさかなしむ事これ偏へに阿鼻大城の罪人どもが地蔵ばさつに逢しもかくやと思は
 れける宗太夫のいはく我も悪風に逢て船は羅刹鬼國に吹つけられすでに我も鬼女のために
 捕はるべきに極ぬるが觀世音願はれ出させ給ひ我はうつこの如くなり居し所に告てのたま
 ふやうは此處鬼國とて恐しき處なれば急せぬがれ出よと告玉ふといへとも忍出へき方とし



宗太夫の白馬
 宗太夫の白馬
 宗太夫の白馬

らす途方にくれし折から白馬たりいななきけるを見れば其馬に乗よと空中に上る聲を
 其馬に乗にはるかに雲を凌ぎ登ると思へば馬はいづちともなく我を乗て飛行こと夢とも
 うつとも覺せずして若狭の浦に落つきぬるに其馬の尾につきわれもくと助る人も多か
 りしと語ける馬は忽ち一つの浮木と變じて磯際に居ける又白馬は山の方へ入しども覺ゆと
 語るに里人ども夫は馬頭觀音なるべし登り給ふ山に行御あとなりともおがまん浦人數百
 人宗太夫を先として山にいさり見れば馬のあし跡のみ有て馬は見えず空中に馬のいななく
 聲の聞ければ尋ねもどめて見ればかの浮木なり依て其木をもつて御禮のために馬頭觀音
 の御尊像をさみ其山に安置して浦人尊敬しければ此事都に聞へ六十六代の帝一條院の勅
 命にて御堂建立あり宗太夫に給はるこれに由て今に彼宗太夫が子孫此堂の主となりて諸事
 を司といへり宗太夫の像も本堂の内に入り宗太夫は片目すがめにて有どかやよつて子孫
 のうち一人はかならずすがめのもの出来る則その者を堂司になすといへり是宗太夫が觀世
 音を念じたる徳によつて其時難風をしのぎ一里の者數多助るのみにあらず末世の衆生廣
 大の御利益かうふることになりぬ

御詠歌

そのかみは幾代へぬらんためしには

ちこそをこゝに松尾のてら

馬頭觀世音の靈驗ふしぎなる事むたれ有ども爰に略す近頃しなの國郡熊の湯とて諸人入
 湯する温泉今にあり諸病に効能ありて群來すしかるにあるとき湯元のものども夢に見ける
 は明日午とき年を三十三歳ばかりの鬚黒き男皮巻の弓もち紺色の着物をきて足毛の白き
 馬に乗り入湯にきたる者あるべしこれ觀世音はさつなりなんぢらとがみて結縁すべしと夢
 見たりと人ごとにかたるに皆人ふしぎをなし所の庄屋に告げれば庄屋もその通りの夢見た
 りとてにはかに湯元を清め掃除して注連をはり香花をそなへ村の者どもあつまり近郷二三
 里よりも聞つたへ諸人あびたいしく群集すること祭のわたりを待とと今やくと待居る
 所へ案のごとく午刻にもすゞる頃夢の告にたがふ事なき男弓やならひを持ち白き鹿毛の駒
 に乗來るを見るよりそりやこそといふほどに數多の人々立さわぎわら有がたやと伏おがむ
 に此男驚きて何事ぞと人にとへと答るものもなく有がたや助け給へと二拜九拜さまく
 なればいよくふしぎなしかたはらの僧にたづぬるにまづ三拜して合掌しながらつしん

で夢のおもむきをかたるにかの男大に驚きわれは常々殺生をこのみ山林に入て鹿猿をこ
ろす事多年なり今かん身等にふしぎの告めをききてはいよく罪の程おそろしとて
忽ち發起し出家となり都の叡山にのぼり勤學の功つもりて天晴の阿闍梨となり給ひしとな
り此仁生國は上野の國の生にて其父母馬頭觀音にまうし子せしより馬頭藏人といへるもの
よし全く觀世音の大悲にて自然發起なきしめ給ふ處といへり

第三十番

近江國淺井郡竹生島

本業寺と號す

觀音堂は人皇三十五代聖武天皇御宇天平三年の春行基菩薩の建立なりすなはち辨財天女鐵
座の靈地なり祭る神は稻倉の魂の命の御子神なり社僧は天台社領三百石湖水南北二十四里
東西は七里せまき所にて一里湖のかたち琵琶に似たりとて琵琶の湖といふ人皇七代孝靈天
皇五年近江の國地さけて水うみとなり其とき富士山はじめて見ゆるといふ竹生島は辨財天
の島なり福徳圓滿自在を司給ふ島のかたち八角にして水晶りん金剛寶の島にて地震にも
ゆらぐ事なく水増ともつかず觀世音の淨土なり昔彼小角きたつて竹を投るに與竹生する
故に竹生島と名付岩金山大神宮寺と號す聖武天皇天平三年御門の御夢に我は近江の國竹生

島辨財天なり寶殿を建たせはるべしと仰ありけると御覽じゆゆめさめて傍を御覽あるに
白蛇帝を守護し居たりけるこれによつて行基菩薩に仰て勸願として尊天の寶殿を建立お
りさらびに忍穂耳尊大己貴尊の三社を祭たまふ辨財天女行基に告て仰けるは此嶋は八角
水晶りん南方普陀洛山觀音の淨土に同じ大悲の像を安置すべしとありしにより千手觀世音
を自ら彫刻し末世の衆生有縁となさしめ給へど一刀三禮して造給ふ尊像なり現世は辨財天
女福徳自在怨敵退散七難則滅七福即生とまもり衆生に當得させんとの御願なり辨財天と申
も觀音二十八部衆のうちなり西國三十三所札所となるよつて紀州那智山へ參詣あるも同じ
御事なり

○竹生島に安置する處の辨財天の御像は仁明天皇承和元年慈覺大師御年四十一歳のとき
眼病にて久しく御惱みありしとき仙人枕元にあらはれ靈藥をあたへ玉ふて曰く是を服
すべし我は竹生島辨財天なり久しく法護神としてわが本體を残すなりとて夢覺ぬ枕元
を見るに辨財天の小像あり慈覺かんたんとて則藥を服す眼病忽に平癒せり後に此
小像を竹生島へ送り安置し奉る所なり
日本六ヶ辨財天靈所といふは

相州江の島

奥州金華山

江州竹生島

安藝嚴島

駿州富士

和州天の川

御詠歌

月ごゝもに波間にうかぶ竹生嶋

ふねにたからをつも心地して

竹生島は湖水のうちにありて岩石水晶寶珠多しと成めり六十町にして山の高きすべて十
 間ばかり何れども同やうの山にて高下なく山の木ごとく常盤木しげりける山の根は大
 なる巖石ついきめぐれり岸高くあたかも屏風をたてたるがごとく東の方神社あり下にせば
 さ入江ありこれ船の着處なり此外はみな岩石にて登る事能はず船を留るべき所もなし山上
 の木山下の石壁そのかたち繪に書たるがごとく麗しく寺も社も皆高き所にあり民家は一軒
 もなし社前より遠くのぞめば湖水渺々として人跡遠くへたゞり其風景清かにして俗塵をは
 なれ忽ち浮世の外に出たる心地し仙境に入たるやうに覺ゆて誠に世に勝たる靈地にてそ
 の有さま筆にも及がたし一説には素戔嗚尊の御子宇賀御魂命といへり世の人辨財天女と號
 す福德智慧をさづけ給ふ事世によくする處なり此社におさめある處慈惠僧正書寫し給ふ紺



紙金泥の般若經また小野篁の筆の紺紙金泥の法華經また樞殿中に三尊十三佛あり胡馬の角
空也上人所持水晶の念珠又延喜帝御寄附の露の硯 又玄象の琵琶の撥等その外靈寶あまた
あり觀音堂は最美麗なり今の堂は豐臣秀吉公の建立なり辨財天御祭六月十五日なり

○又但馬守經正この島に參詣して琵琶を彈じければ明神白狐と顯はれ出給へり其琵琶を
玄上の琵琶と名付その撥は今に残りて寶物となる

○又ひかし松室の中算といへる貴僧の方へ叡山に居たりし見いかいして來りしか仲算僧正
に仕へり其容うらはしく意はへ柔和にして慈悲深こと人に勝り常に法華經を讀誦せり諸人

愛敬す仲算僧正もいたはり給へりしかるに此兒俄に失て見えず僧も寺中の輩もどもに
驚きたづぬれども會て其行方知れずあるとき仲算の下男山に入り辨をとりはるかに山の上

大木の松の上に人聲ありかの下男ふしぎにもひ見れば失たりし見なり其身は木の枝に安
坐して法華經を讀誦して居たりければ下男は聲をかけいかにてかゝる處にはおはすぞと

問ふに見のいへるは我今は仙人となりて虚空を飛行す汝歸りて師の上人へまゝにて相見し
由を申せよといふに下男おどろきいそぎ歸りてかくと告れば仲算もとるこびてあそぎかの
處にいたり給ふに見の貌はあらざれども空中に法華讀誦の聲有僧正遠くおほく見

ざるぞとのたまへば則空中にてあるありて高懸ある師の坊に見申たくは候へども今はわ

れ仙境に入がゆゑに人界にはまじはりがたし師にまた一の願ひあり毎年三月十八日には竹
生島の神仙の會合あるが我も行候なりしかるに師の坊平日弄び給ふ處の琵琶と神仙見

たく兼て申されしなり何卒われにしばらく貸てたべかの會合に携へいたり幸に一曲をも
彈じたりといふ仲算いと易き事なりとて早速にとりよせて樹下にさしおきて歸り給ひしが

程なく三月十八日になれば仲算かの兒の事を思ひ出て何となくつかしく思し弟子僧を
つれて湖上に棹させ竹生島にまふで給ひしかば雲中に音樂の聲聞ければ今やかの兒の

琵琶を奏ぬらんと思したく空中をのみながめ居給ひしが僧正の前に物をあきたる音せしと
おもへばかの琵琶なり神仙の手にふれしゆる異香薫じわたりけり

神となる誓のうみの廣ければ深くぞたのむ沖津島にめ
と吟じ給へば御殿の内より明神微妙の御聲にて

春の日の浪間に白き朝ぼらけこぎ行船や月に乘らん
其後仲算も仙となり給ふにや那智の瀧より昇仙し給ふともまた辨州箕面の瀧より登仙し給

ふともいひ傳へたり

○近きころある出家在所のもの同行十八人をともなひ願禮いたしけるに紀州より札うちまはり竹生島へきたり参詣せんとて船一そうをかりきりてみなく打のり漕出しけるに俄になみあらく風出て少しもすゝむことあたはずよつてもどへもどれば浪しづかなりよつて又船を出さんとすれば又風あらし船頭のいへるにはあれ見給へ外の船はいづれもやすくとわたるに此船にかぎり出しがたきは此乗人のうちに明神の御心に入らざる人のあるがゆゑなりといふかの出家人々に申すは我もかくあらんとおもひつらくと同行を見るに何某こそ顔色もかはつて見わたれば御身しばらく濱に待居給へしかし札はわれらあづかりあさまめ来るべしと其人をのこし船を出すに何事なく易くと参詣しかの者の札をふさめやがて皆々下向して元の濱に着せし折からはるか空中より願禮札一まいちり落て同行の真中にかつる取上げ見ればかの預かりて納たる札なり誠に新なる御事なりといづれもふるひみのさけるとなりかの者は常々心よろしからざるがうへ道ならぬ事をなせしゆゑなりとぞ誠にわれひとおそれつゝしむべき事なり

○第三十一番 近江國蒲生郡長命寺

人皇三十四代推古天皇二十七年の御建立なり此天皇と申奉るは女帝にてまします聖徳太子の御祖母公なり時に帝以の外に御憐あらせられ典藥頭いろくと隠し奉れども少しも藥験も見給はず太子御なげさ大方ならず御心願をこめ給ひて御手づから柳の木を以て聖觀音を刻給ひけるもとより太子は救世觀音の御再誕なるが手づから刻給ふ事誠に正眞の觀世音にこそましくける一七日の御祈ありければかたじけなくも尊像より光明か いやさ御殿をてらし給ふとおもへば帝の御憐すみやかに衣履なし給ふこれ則延命の觀世音なりとてことに尊み給ひ則太子に勅して堂舎を建立なましめ給ひて御本尊とし猶延命を守らせ給へとて長命寺と名付けける又末世萬民衆生の歩みをはこびて延命長壽を得べしと心願をこめさせ給ふ處の御本尊なり其後星霜かしろつり弘法大師いまだ空海と申せしとて都東寺に居給ひし折から不同厝物にてわづらひ給ふに夢中に白髮の老翁來り懇に加持し給へば立所に平癒と見給ひ暇を乞けるとさ何國の人にてましますと問ひ給へば江州湖水の濱邊に居ものなりとて去給ひしと夢見覺けるが日を過さずして全快有しかば空海ふしさに思召湖邊との事なれば尋度思しめし近江の湖邊に行夢中の翁を見まはしく安川のわたし船二艘あり空海仰けるは修行の出家へ報酬にわたし英よと仰ければ此高水に嵐き川を賃錢な

しにわたしてよきものかといへば一人の船頭出家のことなれば我等船にてわたし進ずべし
 と大師をわたしければ大師大に上るこびこれを汝にわたすべしと矢たてにて其船にふねと
 書給ふ船頭いふかり船にふねの文字をかきて何の益にかなるや大師のたまはく狐狸のつき
 たる又は亂心難産かこり病等の者に少しづつけつりて吞せよとて行給ふ船頭も大にあざけ
 り居たるが幸ひ所に亂心のもの有しよりをしへのごとく削りてのせせ見るに忽ち正氣とな
 るさへふしぎなるにけつりし跡に文字さゆることなし此事道々聞つたへ所望の者日々多
 かりしかば自然に船頭の仕合とこそなりにつれ空海はそれより湖邊をかなたこなたを十日
 計もたづね給へど其人のしれざりければ今は最早再會の縁なきにやあらん今は歸らんと思
 し召て船をさして登り給ふに湖邊に一人の老人石を割る支翁をとき居たるを空海御覽じて
 それをときて何にするぞと問給ふに老人こたへて針となすなりといふ空海おどろき其凡人
 ならざるをさとり老人にむかひ謹でいかなる人ぞ名乗給へといふかの老人こたへて汝が
 尋ぬる翁は 則れわれなり此處に住する事已に此湖の山となり海となる事七度齡八千年にし
 て白鬚の神とは我なり此處の水底に聖徳太子自から刻る正眞の觀世音をします則長命寺
 の本尊なりしが五十年前火災によつて水底に隠させたまふしかれども人これをしらす御身

法力をもつてこれを出現なましめよ我も法力をもつてゆべしとて忽ち白鳩と化して飛去給ふ空
 海御あどをふし拜み夫より水底にむかひ丹精をこらして祈給へばふしぎや水面ふたつにわ
 かれ水中より光明をばなちて觀世音出現なし給ふを空海御衣の袖にて請参らせ里人に此
 よしをつたへふたゞび本堂を建立して長命寺の本尊となし又かばかり新たなる尊像なれば
 とて空海自から千手觀音を彫刻して腹内にかの尊像を納め給ふ處なり弘法大師は入定し給ひし
 空海和尙と申奉るなり

弘法大師弘仁元年河内國上の太子の御廟へ百日の參詣せしむ聖徳太子を直に拜み奉り
 度とて心願をこめ給ふに九十九日の夜御廟のうちにて大般若理趣分を誦する聲の聞へけれ
 ば大師ふしぎに思し召いかなる御方の御聲ぞやと宣ふに御廟の内より光明かくやくとし
 て御すがたは見ゆずして尊き御聲にて我はこれ救世觀音の垂迹なり身は安養世界にあつて
 かりに娑婆に出現せり衆生濟度のために四十六所に伽藍を建たりとて勝曼經の要文を誦
 し給へば大師ありがたく思し召感涙をながし衣の袖をぬらさせたまひてのたまひけるは目
 前にかゝる大悲の御聲を聞くことの有がたさよ其此見佛開法の力によつて第三發光地を證と
 すどのたまひしとかやまた久米寺にて八幡大ぼさつの顯はれ出たまひ助命ありけるには吾

となんぢは形どかげどの如く汝の栖ん處には吾かならずうつり行吾は毘盧遮那覺王の應迹なり機にしたがふて時をはかり或は釋迦と顯はれ又は彌陀と現す天竺にて善無畏三藏に對して密經を授しは吾なりと正しき勅命ありけると云云

御詠歌 八千こせや柳になびきいのち寺

はこぶあゆみはかざしなるらん

○又當寺の觀音の靈驗多き中に天和のころ蒲生郡瘡癩の惡症流行して小兒等死するものおびたし醫術も盡き村民この觀音にいのる輩彦根膳所水口大津の所々より長命寺へまゐりいのり奉るどもがら賊にくしのはを度がごとく夫よりして惡瘡もことごとくよき瘡となりて死するもの一人も其のちはなかりけるとなりこれ此觀音の佛力にて小兒の命たすかりて今に小兒を持てるもの歩をはこび祈ること夥し
○むかし武江に佐々羅三八といふ浪人の士あり至て強勇にして弓をよくすしかるに八歳になるむすめを持てり此むすめ瘡癩を病り甚だくるしむ父三八つねくはうそう神ある事を聞けるゆゑやがて弓箭をとつていはく瘡神よく聞けわがむすめをやういに死

さすまじきや急ぎかたちをあらはせ此矢にて打とめんなんぢかたちを見せざる事卑怯とやいはんと大音にてのしりければ病人のうしろに六十あまりの老人あらはれ今君のいかり給ふ詞の中にひきまやうと有ゆゑにすがたをあらはし申なり君のむすめはわれ誓つて死すまじといふ三八また家につたはる國光の太刀を抜てしかれば我むすめに限らず總ての人民を殺すまじや若いなどあらは只今此太刀にて汝が頭をさらんといふ瘡神おどろきて向後人を殺さじとかく約す三八かさねてしからは其證文をせよとて硯紙を出しければ瘡神紙に一つの符を書いてわたす此符のある家には吾かつていたらすと約して去りぬ其のちかの符を門戸にはれば瘡神かつていたらすと人ごとには是をあたへておさしむるに約にたがはず皆々難をまぬがれしとなり元來心剛にして常に觀音を念じ普門品をおこたらす誦しけるとなりこれ觀音の妙智力なり

第三十二番 近江國神崎郡石塲寺村觀音寺

人皇三十四代推古天皇御代御建立聖德太子は甲斐の黒駒に召れて國々津々浦々まで調子丸秦川勝跡見市位を召れ御まはり成され佛法を弘め給ひしに此神崎郡にてあし原の中より聖

は御長三尺の千手觀世音を刻給ふ人魚が爲に一字建立あり觀音寺と名付給ふ近江國に太子十二ヶ寺の建立ありし其内の一寺なり救世觀音の御化身の太子自から御刻ある正眞の大慈大悲の像これなり其功德によつて人魚は佛果を得て其のち太子の御夢に佛となり觀世音のけんぞくとなりし印とて人魚の死骸濱邊に浮しと御夢に御覺じけるゆゑ則濱へ出て御覺するに人魚の骸浪にゆられてよせ来れば則取上させ此寺に納たまふ今に第一の寶物なり

御詠歌
あなたふと道びき給へ觀音寺
遠きくによりはこふあゆみを

御歌のとはり何はどとはは國たりともあゆみをはこぶものあらばなとか罪ある身といふとも御救ひたすけ給はじといふことなし

○人魚の説若狭國風土記にあり若狭の小濱といへる所の有とくなるものあつまりて種々珍物をとくのへ料理いたさせけるに人魚を料理けるが人々そのすがたを見ず誰食するものなしとぎに七歳計なるむすめの子わきまへもなく是を食すしかるにあまたのとし月を過るといへども其すがたかはらず一家一門知音みなく死に果しかど

も此むすめばかりは生て後には餘の事なるがゆゑ尼となり八百歳と成けれども顔かたち年もよらず十六七才のすがたなり若かりしときより有し事どもよく覺へ居てふしぎなるものもて此事都へ聞へ禁庭へめされ五六百年前のこと御たづねあるに御記録にたがふ事なしかはと長壽せし故若狭國と名付給へりとなりこれは時の帝の御長壽を守らんが爲にうみより上りたりしかれども怪しき魚ゆゑかへつて下賤のむすめに食せられ八百比丘尼とぞ申ける後には神となり若狭の一宮遠敷大明神となづく

法の道入へき門もかはれども終には同じさとりなりけり
如月法師
此觀世音の靈驗あまたなるがゆゑこゝに略す

第三十三番 美濃國谷汲山華嚴寺

人皇五十代桓武天皇延暦二年の開基なり開山豐然上人 淨土宗の元祖法然上人にてはなし 此豐然上人は諸國御修行有しに此谷汲に來り旅に御つかれあり野に伏して夜をあかし給ふに夜中にあふらくさる事甚しければ夜明に見給ふに谷のながるゝ水にぎら浮き油のにはひあり是を汲て燈見給ふに正しき油のごとく是はいかなる靈地にもあらんやと先此處にしばし足

を留めんと柴の庵をひすびさん衣一體の煙に安坐し給ふ頃は桓武天皇の御代なり奥州に大
 藏信光といふものあり是は金賣吉次といふもの、先祖なり紀州熊野まで二年三年五年と意
 るとしもなく終に心願成就し三十三度満願の参詣なりとて子孫長久せしめ給ふ又末世
 の萬民に利生を蒙らせ給ふ觀世音を靈木にて一體つくりたく去ながらいかゞして靈木を求
 めんとて奥州永井の文殊へ七日の食断て籠り一心に利生有縁の尊像と成べき靈木何國に
 ざ候や致へさせ給へと願ひしに満る夜の曉に十四五歳なる美しき兒忽然と現はれ給ひ御告
 あり汝歸路永井の里の田の中の大木の榎あるべし其木をもつて十一面觀世音を刻奉れ
 れ靈木にて末世衆生を濟度ある靈尊なりとの御告なりさて有がたき御告なりとて歸る道
 すがら爰よかしこと尋るに告にたがはず大木の榎ありまはりに垣結廻し注連をはりたり農
 人に其故を尋ぬるにむかしより神木なりといひつたへ若も此木の枝にても折るものあら
 ばたよりをなす夫ゆゑ人のたちよらざるやういためなりとこたふしからは此の木を我にあ
 たへ給はれよといふに易き事なり則我等所持の地面なれば誰にはいかる事有されば進上
 いたすべし去ながらむかしより切ことはあるか枝にても折もの有は忽たよりありいかゞ仕
 給ふといふにこの木をもつて觀世音を刻べしとの告を蒙ればたより給ふ事はあるまじし



かど我に興へよとて大藏信光は此木にむかひて脚木國土悉皆成佛と申せば觀世音とならせられ衆生濟度下さるべしとてまさかりを以て丁々切初めければ共何の祟もなければさらば人々手づたひ給へ往生成佛の結縁なりとてすゝめければ村民ども打あつまり南無觀世音ばさつと唱へつゝ斧をもつて切倒し車にて信光が宅へ引たりけりしかれどもこれを彫刻すべき佛師あらねば先都にのぼりて彼方爰方となつぬれども更に其人を得ずしかるに信光が旅宿へ十四五歳の童子尋ねきたり御身觀世音を彫刻なさんと欲し給ふやわれ佛師にはあらねども故あつて御身が望の尊像をささみ得ますべし嵯峨野邊に假舎を立ちらるべしといふに信光も神童なる事を察しをしへの如く假舎をすつらふに彼童子靈木をもつて假舎に入り三七日が間必尋ね来るべからずと内より戸をかたく締たり信光は旅宿にあり指を折て日を待所に三七日めの夜信光がまくらもどにて今こそ汝が願の事とて觀世音成就し給へり明なば來りて拜せよといふ聲に驚き明るをもちかね嵯峨野へいたり見るに御長七尺五寸の觀世音たせたまへり異香くんじて誠や極樂淨土へいたりたる心地してかの童子を尋ねめられ共誓て行方しれたまはずこれもまつたく永井の文珠ばさつの御化身なりといよく尋み則結縁のためさが野にひいて三七日が間諸人に拜ませ元より富家の身なれば貧者に金錢

を施行し生國奥州へ觀世音を護持して下りけるに美濃國谷汲の邊に下りしに觀世音の尊像大盤石のごとくに重くして上る事あたはず人々いかに驚けば信光はこは故こもあるらめ今夜は此處に野宿なして佛智をもうかいはんと通夜名號をととなへたるに曉がた少し睡眠のそり尊像のたまふやう奥州は東の果なれば願くは此處に居て東西の衆生を濟度なさんとす此山中には一人の出家あればそれに託すべしと告たまふ信光ははく尊び恐れ則あたりを尋ぬるに草の庵をしめたる僧ありさては此僧ならめと信光始終をかたればかの僧も昨夜觀世音御告あり其尊像は十二面觀音なるべしと尋るに信光さては疑ひもなく貴僧の御事なりとて尊像をわたり則庵のうしろに一字の堂舎を建立しこれに安置し奉る處なりよつて西國順禮めぐり納三十三番の靈場とはなりたりける日本に三文珠と申奉るは大和安陪文珠、丹後切渡文珠、奥州永井文珠を申奉るかゝる靈佛の御告の靈木といひことさら文珠化身の御作佛なれば誠に靈尊なる事を仰ぐべし寺號谷汲山といへるは燈明の油を湧出する故に名付たる處なり

御詠歌

けさまでには親きたのみしをひづるを

ぬぎてをさむるみのたにぐみ

萬代のちかひをこゝにたのみおく

水はこけよりいづる谷ぐみ

世をてらすほとけのちかひ有ければ

またこもし火はきえぬなりけり

肩にかけし三幅のきぬは慈悲の三體として中は彌陀如來兩わきは觀音勢至としたるなり始
終せなかに負奉り廻る事なりさすれば十ヶの功德あるべき事なり順禮の同行五人なれば
六人と一人づゝ増して書ことは負摺を親ども觀音ども先達どもしてまはる故なり
西國順禮したる人々は十ヶの徳あり又詠歌をきくとまはその十分一の利益を蒙るとなれば
常々しんぐゝありて詠歌をとなふべきなり

一には 火難、水難、横死の難、盜賊の難をのがる

二には 惡畜どく虫すべて戦ものにあひ死する事なし

三には 毒藥無實のなんをまぬがる

四には 雷電落馬の死をせず

五には 厄難ねつ病すべて流行病をうけず

六には 海川船に乗て風波の難をまぬがる

七には 壽命長久子孫はんじやうを守り給ふ

八には 諸神諸佛應護し給ふ

九には 諸願成就せすといふことなし

十には 諸の罪障めつして極樂淨土へむかふべしとの御誓なり

右十ヶの徳御當二世の御助けある事うたがひ給ふべからず

普門品によする古歌

行く水のふかき流れにしづみても淺瀬ありとぞ猶頼むべし

かり立てたのみとなれば飛鳥川ふちもせになる物と社まけ

さまざまにたなごころなる誓ひをば南無のことはふねたるかな
 ねにそふる罪を聞しも君がためはなるとするもうれしかりけり
 常にあもふ心のまゝに上しやなとかさねしつまはかもひかへしつ
 ら上衣うちらにも夢をささるかな重ねしつまをかもひかへして
 うそのかみふるのくさくら春ごどにしるもしらぬも尋ねてごどふ
 三十のまらみつのちかひの嬉しきはさまざまになるすがたなりけり
 何國にはやどりにもれん水にはれ木の間に見るも空の月かげ
 さまざまのころろつくしに行舟や歸るすがたにあふのまつはら
 恐れなき道にみちびくひじりにはわがなにめでし人にしらるな
 めはれとやごどもに光をてらしけんふたつにわけし玉のかざりを
 つかへこし其ゆるにこそ今もかく信の道にさはらざりけれ
 名を聞も見ると御法の燈をくらき關路のしるべにやせん
 われどしる心のなくば人の身に愁なげさもあらじとぞおもふ
 障なき心に應ず誓ひにや浪に入てもおぼれざるらん

わたつ海のみかき誓ひのあまねを頼をかくる法のふねかな
 おしなへて空しきとらと思ひしに藤咲ぬればむらさきの雲
 たのみてもなはたのむかな思ふことむなくすぎぬ人のちかひは
 まよふべき後をおもへば此法を心にすつるとまの問もなし
 なき人の別を駕の音にたつる思ひよいけの水とたになれ
 さだまれるすがたの物になきゆるに安や火をも水となすらん
 白浪もよせける方にかへるなり人をなにはのあしどもふな
 罪もなき人をうけへはわすれぐさおのがうへにぞおもひふなり
 あしかれど人をばいはじなにはがた我身のどがのかへる白なみ
 おろかなるあまのさかてもやがて身にかへす恨みを思ひしらなん
 我をなごさのみは人の忘る身にもかふてふびくひしらすや
 よくおもへ科なき我はなけれども恨は人の身にやかへらん
 めふ事をいつくにぞてかちざるへき淨身の行ん方もしらすば
 つひにまたいかなる道に迷ふともちざりしまゝのしるべ忘るな

中天に行とも見ゆすしかすかにあふげば高き日の光かな
 分わふるあしの障も今はなく沖津ふねをも風にかかせて
 しぐれつる雲をば風の吹すて、長閑に月のかげをさやけき
 其さほもあらじと思ふ大悲者の人をはとくむふかき心は
 身をすて、人を救は、世に主も佛の道にかはりやはせん
 色々の千くさの花にしたがひて結びかへぬる野邊の夕露
 にとるべき流れも更になかりけり心の水のすみもまさらば
 月も日も出入かひはあるものを心の通ふ道ぞまはなき
 ちかひをば千ひろの海にたどふなり露もたのまばかすに入なん
 誓ひける心のどかのうみなれば人をわたすにわづらひもなし
 見るめなき涙の底にしづむ身を法のうみにも浮べてしかな
 わたすべしちかひのふかき冬のうみは氷も霜もむすばざりけり
 おしてゐるや深き誓ひを大綱にひかれん事のたのもしきかな
 歴劫の弘誓のうみに舟わたせ生死のうみは冬あらくとも

世にすくふうちには誰かいらさらん善き門は入しきねば

さよ次かさぬる中のちぎりにもくちぬはふかきちかひをさきく
 西國と名付たるは鎌倉の時代よりいひはじめたりといへり吾朝のともがら是は勝たる善事
 なることをしりて法皇の御跡をしたひ諸人みなことごとく順禮する事になはべる關東に
 ては老若にかゝはらずすでに順禮したる者を上座につらねいまだ順禮せざるものは下座に
 居るといへり故に都鄙遠近みな順禮せり札を納る事は後人の信心を起さんか爲にや順禮し
 て其靈験を蒙りし事とも少なからず過し延寶年中の事にや美濃大垣のともがら一年老若男
 女あびたいしく順禮を思ひたちけるに一人の童女あり其姉の順禮するをうらやみ思ひて父
 母に告て兄弟とも順禮せんぞねがふしかれども父母これをゆるさず姉は年もたけたり汝は
 わづか十五歳の身にして長途のたび心もどなしとて達て留ける處に参る事かなはず妹なげ
 さかなしみ朝暮の食だにも替てせず姉は同行も揃ひしとて出立ぬいとくうらやましく次
 第につかれて終に姉のたらし二日めといへるに死たりける父母は大に歎きかれが願ひしと
 どく順禮をゆるしつかはしなばかゝる歎きはあるまじものをと後悔すれども甲斐もなく涙
 どともに野邊にうづみぬ姉は二日路も出けるにふしぎや妹一人あどより追付きたりて親た

ちのゆるしなけれども餘りに参りたく忍びてうちを援來たりたりかさねて叱り給はいよく
 よく斷を頼よしをいひてさめぐと泣ければ姉もあはれにかもひよくこそ來れり觀音さま
 の御利生にて左のみしかりもなし給ふまじとこよりともなひ願禮をぞなしたりける父母
 は七日くのとふらひをなし日かすの重なるにつけてはいよくなげきまをしけるがさり
 ながら子どもをくろにかくまで願禮したしどももひ死に果たる事なれば觀世音もさこそ不
 便の著とあはしめしあしき道へは導給ふまじ佛果を得ん事うたがひなしとかくにぼだい
 を吊ふより外なしとて念頃に追善供養なしけるが月日もいつかたちて七十五日といふ日に
 かの願禮同行みなくかへりける其中に妹はあねとつれたちて心よげに歸りければ父母
 は夢うつこのさかひなくたいたつかしさにとり付てなげくより外の事ぞなし姉はあまりの
 事に不審なし何ゆゑ妹ばかりをかかはなし給ふぞわれに二日かくれてうちをぬけ出たりと
 て追付來りしよりともなひて願禮せしよしをかたるに父母は心づき妹は死して葬りし事と
 もをかたり互に不思議はれやらすいそぎ葬りし處にいたりて見るに棺のうちに形はなく只
 願禮ふだど笈するばかりぞ有ける妹にぞへばたい一箇に願禮なしたるに前後もしらす姉の
 おどをしたひ行しと答ふ父母感涙をながし止ざりける聞ものかどろきいよく信を渡し願

禮するもの多かりける必らずあやしくおもふ事なかれむかし聖徳太子の片岡の飢人の死た
 る地をひらき見給へば全身なくて紫の衣のみ残り有しとなり此事は聖徳太子傳にくはしく
 侍る尤同日の論なるべし末世といへども一心の通じなばかゝるふしきはあるべき事なり
 又願禮するに心得べきは堂社寺院に落書する事を禁すべし道中にて喧嘩口論つゝしむべし
 その身費しき憎ならばたはつ修行はすべし俗體の男女道々民家にてものぞをひ請け乞
 食のふるまひ必ずべからず從來見聞するにもし道中にて上からの業をなせし人は貴賤にか
 ぎらず歸國のち惡病をわづらひあるひは火難盜なんなどにあひひとりとして安穩なるも
 のなしと人々かたり合へり元來神佛は非禮をうけ給はずかりにも貪慾の心を遠ざけ五戒を
 守り多少によらず人にめぐみ施す心を専らとして願禮なし給はざるにいはる十ヶの功德
 顯然として現當二世安樂あに疑ひあらんや

辻本基定謹誌

觀音靈場記圖會 大尾

十句觀音經
 觀世音南無佛與佛有因與佛
 有緣佛法僧緣常樂我淨朝念
 觀世音暮念觀世音念々從心
 起念々不離心

圖會撰次 辻本源基定

秩父觀音靈場記



秩父第一番聖觀音
四萬部寺

大たなへ
廿二丁三十間

幻通比丘

ありがたやひとまさならぬのりの花

かずはしまぶのてらのいにしへ

四萬部寺は寛弘四年三月十三日書寫山にて性空上人弟子幻通に云ていはく武藏國秩父に行
 基の開基せし觀音あれども東夷の應機發せずと靈鳥われにつぐ我教にちかければ四萬部の
 妙典を汝にさづくれれば彼の地に行て庶人を化度せよとの
 とはなしける



秩父第二番聖觀音
大柵山眞福寺

いはもさへ
廿四丁廿四間
大柵禪師

めぐりきてたのみをかけし大たなの
ちかひもふかきたにがはのおこ

大初山眞福寺は昔し大初禪師鬼丸といふ岩窟にこもりて善門品を誦しける所へ鬼女來りて
あれは此里の某が妻なりしが嫉妬げんどんの惡念より夜行鬼となりたりしが師の譴責をき
いて佛果を得たり其布施に此杖を納むといひて失せけるゆゑ師此地へ堂をたて尙其もとを
とひらけける



秩父第三番正觀音
岩本山常泉寺

あらしへ
十三丁
子持石不睡石長命水

ふだらくやいはもごでらごむむべし
みねのまつむせひくたきつせ

岩本山常泉寺の本尊并に十王の像は行基の作にて靈驗あらたなりまた境内の不睡石長命水

子持石の奇特は殊にふしぎなれば此大士の妙智力を深く信じて參詣の者今も多しあるなり



秩父第四番十一面觀音
荒木十一面堂

十二丁十六間
荒木丹下

あらたかにまぬりておむむくわんぞおん
二世あんならくとたれもいのらん

荒木十一面堂○此所に住荒木丹下といふげんとん者娘の願禮手の内を乞けるを神國の米を
佛に供するいはれなしと打たしきければ娘答て人は神の末なり妻も其人なるをふみたし
は神をふむに同じ佛は自他平等と説れたりとやさしく説示せしかば終に佛法の信者となり
しは此佛の利益なり



秩父第五番準胝觀音
小川山語歌堂

おぎのたうへ
十九丁
本間孫八

ちよはのめぐみもふかきこいのだう

だいじだいひのちかひたのもし

小川山語歌堂の大旦那本間孫八はその家富貴なれどもへんびに住て和歌の道を知らざるをうれひ此観音に通夜して祈りければ其夜ふしぎに旅僧来りこれも通夜しながら和歌の道を懇にぞしへくれしゆゑこれ全く此佛の應化とさとり夫より此堂を語歌堂とよび信じける。



秩父第六番聖観音

向陽山ト雲寺

五丁餘

禪客

はつめぎに風ふきむすぶおぎのだう

やどかりのよにゆめぞさめける

ト雲寺秋の堂は昔し此所は山高く登りて幽閑の地なれば世を捨たる禪僧来り草庵をむすび行基の作の翻音大士を朝暮信じければ或夜傍らにて「初秋に風吹むすぶ秋の堂宿かりの世

の夢ぞさめける」といふ歌を吟ずる聲を聞て忽ち無常をさとり夫より秋の堂とよびける



秩父第七番十一面観音

青苔山法長寺

十一丁餘

花園左衛門將監臣某

六だうをかねてめぐりておもむべし

またのちのよなきへもうしぶし

牛伏青苔山法長寺は昔し花園左衛門の長臣某は將門に與せしゆる官軍に攻られて此山に隠れるる内死けるを或僧かばねを埋めけるに世の中静穩になりて其妻子こへたづね來りしゆゑ彼僧しかぐと語りければ妻子はかなしみながら其墓へ詣でける夜の夢に某現れて我惡念の報ひにより此村の某方の牛の子と生れしゆゑ我得脱を頼むと夢見ければ妻子とも出家して此佛を信じ後世を吊ひける



秩父第八番十一面観音

青苔山西善寺

あけちてらへ
十三丁餘

眞念佛

たゞたのめまことのこまはるいぞんじ

きたりむかへんみだのさんぞん

青苔山西善寺の本尊は恵心僧都の作にて靈驗ありたり此順禮歌をうたふ時は嫁姑の中隠しさまも忽ち心和らる陸じくなるにより日待ち月待には寄集りて此歌をうたひふひとりなどするときはかならずその傍らへ旅僧の姿あらはるゆゑこれを大士の應化とてうやまひける

秩父第九番如意輪觀音

だいじでらへ

十九丁條

明星山明智寺

横瀬の兵衛



めぐりきてそのなをきけばあけち寺

こゝろの月はくもらざるらん

明星山明智寺は天正の頃横瀬の里の兵衛といふ幼少の盲目の母に孝心よく此觀音の手を引つれて度々參詣しければある出家來りて無垢清淨光惠に被諮詢と教へられしゆゑ其如

く唱へて信心しければ母の眼開さける此專領主へ聞かければ兵衛へ田島をめぐせられ寺の名を明星山とつけられける



秩父第十番聖觀音

さつじにりへ

せび

萬松山大慈寺

ひたすらにたのみをかけよ大慈寺

むつのちまたのくにかはるべし

大慈寺の靈驗記の中に攝津の國より儒者來りて弘法を誹り信者の應機を妨ぐるがゆゑ此大士凡僧に現れて儒者の家へ至りければ普門品に羅刹鬼國の文あるが其在所はいつこなりや此返答せずば活しては歸さぬと刀をみつとり立あがるを物ともせずせしら笑ひをするより満面朱になつてサア羅刹鬼國はと切かゝるを如意にて受とめれば汝が憤怒をいふなりと答へければ此一言に伏して無二の信者となりける



秩父第十一番十一面観音
南石山常樂寺

のさびてらへ
十丁餘

住持門海

つみごももきえよといのるさかこほり

あさひはさつてゆふひかどやく

坂本南石山常樂寺の住持門海多年勸化をつんで稍仁王門建立なれば重き病にかゝりこれにては本願達しがたしと本尊の寶前へのべければ其夜枕元へ金剛神あらはれて費僧數くことなかれ今怨敵の邪鬼をはらふと夢みて其翌日全快しつひに本願をとげられける



秩父第十二番聖観音
佛道山野坂寺

はたのしたへ
九丁餘

甲斐の商人

おひのみにくるしきものはのさびてら

いまおもひしれのちのよのみち

佛道山野坂寺は昔し甲斐の國の商人此所を通けるに山賊五六人出て衣類を剽ぎとり猶殺さるんとすれば一心に觀音の御名を念せしかば守袋より光りを放つに盗人目をいられて皆逃去しが頭のみ目がつぶれて動がれぬ佛圖に怖れ衣類を返し今より出家すると詫ける商人も佛力を感じ國元へ歸りしが其後又通行せしに彼賊出家してありければひささうの像を興へて一字を建立せり



秩父第十三番聖観音
旗下山慈眼寺

いまみやへ
四丁餘

火災の利益

みてにもつはちすのはさきのこりなく

うきまのちりをはげのしたてら

旗下山慈眼寺は殊に神られたる寺に於ては花ふり音樂のしらべを聞くことあり此大宮町の高野氏の姫江戸中村の間に嫁入りしけるが明暦丁酉年正月十八日の大火に萬死をまぬがれたる當寺の利益は其頃版行になりしうつばさるといふ草紙にいでたり



秩父第十四番正観音

長岳山今宮坊

五丁 餘
武田信玄の家臣
石原宮内

むかしよりたつこもしらぬいまみやへ

まぬるこゝろはじやうどなるらん

長岳山今宮坊は武田信玄の老臣山縣三郎兵衛の組下に石原宮内といふものあり時田合戦の勝負の事につま信玄より切腹申付られし日はすでに十七日のことなれば常に信する此大士を念じて普門品を夜もすがら誦誦し今や切腹といふ處へ山縣より死罪を止めて近習に出へまひね信玄公の命なりとの使を受たり



秩父第十五番十一面観

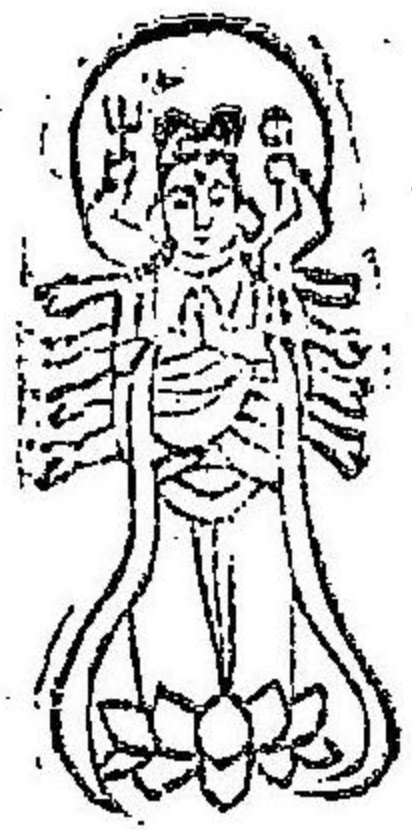
音母樂山藏福寺

六丁
湯の尾峠の奇談

みどりこのはゝそのもりのぞうぶくじ

ちゝもろこもにちかひもらすな

母巢山藏福寺はむかし近江の堅田村の商人湯尾峠をこゆるとき虚空にあやしきもの現れて折角近江の人だねをつくさんとせしに定朝めが観音の像をつくりたるに依て事ならねば是より東國へ行て事を成さんとさくやく聲をさく扱は疫神ならんと急ぎ戻りて定朝に告れば坂本にある大士の像をわたされけるゆゑこゝへ持來りければ領主にて本堂を建立ありて大士の尊像を安置しける



秩父第十六番千手観音

無量山西光寺

七丁 餘
圓比丘

さいかうじちかひをひこにたづねれば

ついのすみかばにしこゝそきけ

無量山西光寺○當地に行ひます圃比丘月の光りに感じてゐれば忽然と老婆のかけ現はれて妻は食欲の報ひによりて生かはり死かはり苦を受ることを我子孫某へ傳へ後世をどひらはせくれ玉へ又近々に觀音の像此地に來るゆる我は其大士の助けによりて得脱するなりといひしがはたして其如し今の本尊は則ち是なり



秩父第十七番十一面觀

音定林寺丹生氏持

王生真門の位
林太郎定元

あらましをおもひさだめしはやし寺

かねきとあへずゆめぞさだめる

定林寺丹生氏持は王生の家臣林太郎定元主の無道を諫めて家財を没收され當地に知音あれば尋ね來りしに其人はあらず妻は道のつかれに死しつゝいて定元も没し三歳の男子一人のこりしと空照といふ沙門育てけるに良門當所へ狩に來り其子の來歴を聞きあたら忠士を失ひしとくやみ此子をもらひ林源太良元と名のらせて舊領を興へ定元の爲めに當山を建立す



秩父第十八番正觀音

神門山長生院

十七丁 餘
巫女の神託

たゞたのめろくそくごもにだいひをば

かうごにたちてたすげたまへる

神門山長生院はもと神社なりしが社たいてんして再建のとき巫女を娶しければ以來神社をあらためて梵刹にせよとの神託にまかせ觀音の靈場になしければ案の如く日々繁榮せむの利益も又いちじるしとちとふるんつう傳にあり



秩父第十九番千手觀音

飛洲山龍石寺

八丁
飛行の尊像

あめつちをうごかすほどのりうせきじ

まぬる人にはりしやうあるべし

飛淵山龍石寺の境内は一枚の磐石にて歩行するに塵土をふまぬ靈場なり昔し天下大旱魃のとき弘法大師に勅あつて雨を祈らせられしに神泉苑より小龍天上し此磐石二つに破裂して大龍雲を起したちまら雨ふりて人畜草木までよみがへりて豊年と成たる靈場なり



秩父第二十番聖観音

岩の上別堂内田定金

寺尾村の孝子

いげむしろしきてもこまれいはのうへ

たまのうてなもくちはつるみを

岩の上別堂は白河院の御建立にして希代の風景なり昔し此寺尾村の孝子母を荒川の向ふ宮路といふ處におきけるに急病の知らせあるによつて急ぎ行んとせしに大雨に水濁せし川を越すこと叶はず川端にたすみおける處へ見なれぬ見舟に棹さして來りこれに乗れよといふより飛び乗りて彼の地へゆきん身はいづこの人をと問へば岩の上へ指さして失けるは是れ則ち大士の慈心なり



秩父第廿一番正観音

要光山観音寺

入幡宮の神鏡

あづさゆみいるやのだうにまふてきて

ねがひしのりにあたるうれしさ

矢の堂要光山観音寺は昔し當所の八幡宮へ行基菩薩詣せしに御神行基に勅して神木にて観音の像を作らしむるに依て此ほどの悪魔ども住所を失なふをいさとはりて虚空をわれわたり火をふらし石を飛すによりて御神武甲山のあらゆる神々に促して邪神を追はしめられてつひに観音の靈場とはなしたまひける



秩父第廿二番正観音

西陽山榮福寺

讚州の人化犬

こくらくをこめてみつけてわらうたり
のちのよまでもたのもしきかな

童堂西陽山樂福寺は昔し讃州に有福にて饑饉なる農家へ行脚の僧來りて食を乞へとも與へざれば價を出して米をもとめ門前の犬の器に入て犬を呼びければ此家の伴犬のごとくになつて其米を喰へば其親おとろまかなしみて僧をうやまふがゆる因果の道理を説き聞せければ父母その犬を引て西國東國の靈場をめぐりて當山に來りて祈念しければもとの人に復りけるとなり



秩父第廿三番正觀音
松風山音樂寺

しら山へ
廿八丁餘
島山基國の家來
内山源藏

おんがくのみこゑなりけるおむさかの
しらべにかよふみねのまつかぜ

小鹿坂松風山音樂寺は昔し島山基國大内介義弘の討手を命せられければ家臣内山源藏へ出陣を申し付しに源藏は七十に近き母にわかるゝことをかなしみければ其母此音樂寺の御影をあたへて母を思ふときは此大士の御名を唱ふれば利益あるとわかれしに母のことばのごとく戰場にてふしぎの靈驗ありしゆる凱陣の上母子とも大信者とはなりけり



秩父第廿四番正觀音
光智山法泉寺

くなへ
廿三丁餘
戀が窪の遊女

あまてらすかみのはゝそのいるかへて
なはもふりぬるゆきのしらやま

白山法泉寺は昔し武州戀が窪の遊女に慈悲深きものありて此觀音を信じ修行人へ毎朝念らす手の内を施せしに其頤口中の病に臥しけるに修行人一本の楊枝を出しこれにて口中をそゝがば病いゆると教の如くせしにとみにいひける今も當山より夢想の楊枝とて出るなり



秩父第廿五番正観音

岩谷山昌久寺

奥野鬼女

下りげもりへ
廿九丁餘

みなかみはいづくなるらんいはやだう

あさひもなくなくゆふひかぢやく

久那岩谷山昌久寺は昔し奥野といふ處に住む某の女房せいらい邪智慳貪なれば一族に見れ
なされてみもちのまゝにておひ出され久那の岩洞に住てさきくぐの悪業をすれば荒川にう
ちこまれしが命つよして女の子をうみ鬼のこころにも子を愛すうち死しけり此むすめ孝心
深く佛神を信じ里人の助けによりつひに母の菩提の爲此本章を感得して靈地とはなしけり



秩父第廿六番正観音

萬松山圓融寺

秩父の次郎重忠

上のげもりへ
十二丁餘

たづねいりむすぶしみずのいはぬだう

こころのあかをすゝがぬはなし

下影森萬松山圓融寺は空を凌ぐ高山にてしんくたる岩の上にはさまぐの神佛を安置して
景色もまたたぐのなき靈場なり當國の住人秩父別當武基の玄孫太郎重弘この尊像を信じて
大旦那となるがゆゑ其子重能其子重忠も深く信じて利益をかうむりたること傳記にあり

秩父第廿七番聖観音

龍河山大淵寺

行脚僧寶明

はしだてへ
十三丁餘



なつ山やしげきむもこのつゆまでも

こころへだてぬ月のかげもり

上影森龍河山大淵寺は昔し行脚の僧寶明といふもの諸國を巡りて當地へ來り寒となりけれ
ばたい西方を念じけるに七年目に至りて弘法大師當地へ來りて寶明があしなへを見ふかく

密みて大士の像をききみこれを信心せよとあたへ玉へば寶明くわんぎめやくして爰に安置しければ寶明を以て當山の第一祖とすおしなへになりしは大士の利益なり



秩父第廿八番馬頭觀音

十八丁餘

石龍山橋立寺

那司報龍身

きりのうみたちかさなるはくものなみ

たぐぬあらじこわたるはしだて

橋立寺は昔し當國の領主郡司といへる者殺生と地蔵の像を破却したる罪により死して無間地獄へ墮べき處一度此橋立寺の燈明を矢の根を以て搦立てたるにより龍と生れかはり人馬を取喰ふゆる村人此大士を祈りければ白馬出て龍を吞石に化したりといふ石今にあり



秩父第廿九番正觀音

一里三十五丁

見目山長泉寺

龍女

わけのほりむすぶさゝのこおしひらさ

ほこけをおびむ身こそたのもし

笹の戸見目山長泉寺のはじめは元正天皇の御宇麓の淵より毎夜龍燈かゞびるを諸人見てもやしみ且つたつとみけるうち權化の僧十餘人來りて小笹の茂りし岩屋の内より此本尊を認得してこゝに安置せしむ末世の住持靜山和尚の命助りしことは圓通傳記に出たり

秩父第三十番如意輪觀

あしのいはやへ

三三三三丁

音瑞龍山寶雲寺

唐鏡



いつしんになむくわんおんことなふれば
じひふかたにのちかひたのもし

深谷瑞龍山寶雲寺の本尊は元應元年建長寺の道隱禪師の持ち來りし唐の玄宗皇帝が楊貴妃の冥福のために不空三藏に開眼させたる如意輪の靈佛なり當寺には唐鏡龍骨昔しの武家の

順禮札其外其物あまたあり



秩父第三十一番正観音

鷲窟山観音院

はんにやであらへ
二里廿丁
秩父重忠臣
本多次郎親常

みやまぢなをかきわけたづねゆきみれば

わしのいはやにひどくたぎつせ

鷲窟山観音院の本尊は靈験殊にあちたなりしが將門の兵亂に神社佛閣破壊されて本尊の在所を失ひしが後年秩父の重忠當所に狩し家臣本多の次郎に集にこもる鷲を射させんとしてはからす巢の中より感得しければ重忠御堂を建立して信仰せられけるゆゑに此奥の院には重忠の馬つなぎ近常の矢のあとなどといふ古跡あり

秩父第三十二番聖観音

石船山法性寺

二里廿丁
豊島權守



ねがはくははんにやのふねにのりをあて

いかなるつみもぶかぶこそぎへ

般若石船山法性寺の本尊は武州豊島郡の住人豊島權の守の娘近村へ嫁入してある日實家へ來るにさいがふちにて悪魚に見えまれ水そこへしづみしを此本尊女に化して助けたまふ此尊體は天冠の上に笠をかぶりたまふ珍らしき御姿なり

秩父第三十三番聖観音

延命山菊水寺

みづくわりへ
二
楠正成



はるなつやふゆもさかりのきくすぬじ

あきをなのめにおくるごし月

小坂下延命山菊水寺○楠正成は常に佛道を信じける中にも家の紋に縁あるにや此菊水寺の観音の守りをふどころに持たたまふ然るに赤坂のいくさ利めらす長崎四郎左衛門の馬屋の

前まへを落おちたまふとき追手おいつての矢先やまきにあたりたまへども身に疵きずもつかざるをわやしみ肌はだの守まもりを見みたまへば一心いっしん稱名しょうなの四字しじに矢やの根當ねあたりてありしといふ



秩父第三十四番千手觀

うちおさめ

音日澤山水潛寺

私立峠

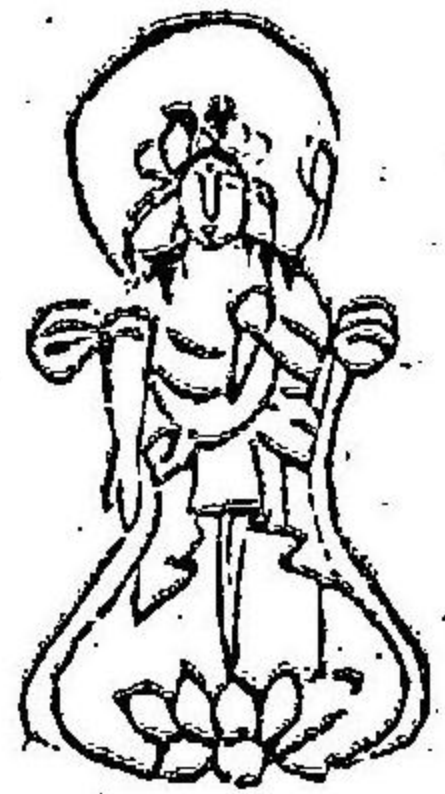
ふらつこのねがひをこにおさめおく

こけのしたよりいづるみづかな

日澤山水潛寺にさわさんすいせんじ○天長元てんぢやうげん年東國大旱とうこくたいかんせうに人畜草木其色を失うしなひけるに當地へ願禮來りて雨あめを祈いのらば觀音くわんおんを信しんせよ我われこへ西國さいこくをかたどりて阿彌陀あみだをかき坂東ばんとうをかたどりて藥師やくしをおお合あせて百番ひゃくばんの靈場れいぢやうとし我われ後ご摺すりこへに納なまむ其利益そのりやくを見みせんと木札きふだに渴甘露じやくかんろ法雨ほうぐと書かて建たければ忽たちまち雨あめふりて豊年ほうねんとぞなりける

秩父觀音靈場記圖繪終

東坂觀音靈場記



坂東第一番十一面觀音

いはこへ

大藏山杉本寺

江崎某

たのみあるしるべなりけりすぎもこの

ちかひはすゑのよにもかはらじ

相摸鎌倉杉本寺さうもくかまくらすぎほんじは元もとにかい堂觀音院だうくわんおんいんといふ本尊ほんぞんは行基ぎやうき慈覺じかく惠心ゑしんの作つくる三軀さんくにて何れも靈驗れいげんあらたなれば頼朝よりとも公田州こうでんしゅうを給たませられて御信仰ごしんかうあり行基ぎやうきの像門前ざうもんぜんを馬上ばじやうにて通行つうかうするものかならずらく馬うまをさせること上じやうふんにたつし北條ほつじやう時頼ときより大覺たいかく禪師ぜんじにこれを告つぐ師し袈裟けさにて御ご首くびをまどひければ夫それより落馬らくばする者ものなくふくめんの觀音くわんおんと敬うやまつひける



坂東第二番十一面觀音

たつるへ

海前山岩殿寺

半里

源頼朝公

くらくをこくに三浦のいわどのや

なほゆくすゑのたのもしきかな

相摸三浦岩殿寺の開基は道徳上人なり又行基も力らと添へたり頼朝公経が小島にて文覺上人の勧めに任かせ此木尊を祈りたまへば軍中にて度々危難を免れたまふ石橋山の敗軍には此佛船長となりて相州へ落したまふがゆゑ御治世の上は何事にも當山を祈りたまへける



坂東第三番千手観音

相摸田代堂

願行上人

かれきにも花さくちかひたしろ寺

よかのぶつなのあごぞひさしき

鎌倉田代堂は天元年中横川系しん院の源信僧都愛甲郡津久井の辻堂にて龍王の靈夢に任せよく朝川の淵へ行て見れば數正の龜せんだん木に取り付き居ればこれこそ靈木なれとそれ

を以て四尺四寸の千手の像を刻み辻堂に置しが後年田代冠者信綱殊に信じて當地へ堂舎を建立して安置せしかば田代堂といふなり



坂東第四番十一面観音

海光山長谷寺

海光の尊靈

ひとたびは誰もあゆみをかせ寺の

ちかひにふけるゆぬがばま風

相摸鎗倉長谷寺は聖武帝の御願にてとくだう上人の草創なり本尊は由井濱より出現せし二丈六尺の佛たいて験験ことにあらたなれば天子將軍も御歸依あり朝比奈義秀は殊に信じてささぐべのれいげんを蒙りたること傳記に見たり



坂東第五番十一面観音

仁泉山勝福寺

飯泉長者

せめてはさるゝぐるあこの馬船に

かつのたからをわかすいひずみ

相摸飯山勝福寺は天長七年千代村より此地に轉じける時諸人金銀を抛て奉加せしに
ある一人の貧夫壹錢の貯へもなければ瘦馬を三貫文に賣て奉加せしに翌朝馬船の中にその錢
あるゆゑ驚て奉加所へ行て見れば錢は納りてあればさてはどかんにて馬を賣戻し夫より
富貴になりしかば人々三貫長者とよぶ



坂東第六番十一面觀音

飯上山長谷寺

飯山權大夫

いざまへらたちそめしよりつきせぬは

いりあひひくまつかぜのおこ

相摸飯上山長谷寺の本尊は行基菩薩大和の長谷寺の佛材を以て作りしを領主飯山權大夫深

く信じて伽藍を建立しける又當山にはくれ鐘といふふしぎのかねありこれを坂東の三鐘と
するの二つは筑波と千葉にあり



坂東第七番聖觀音

金目山光明寺

小磯の賤女

なにこもいまはかなひのくわんぜおん

二世あんらくきたれかいのらん

相摸金目山光明寺の本尊は大寶二年小磯の濱にて汐汲女の桶に入て上りし佛なれば此女
信者となりてふしぎの靈驗をさぶかり大往生をどげしゆゑ後に行基五尺餘の立像を作り其
中へ納むその女を潮司大權現と祭るといふ



坂東第八番正觀音

妙法山星谷寺

十八里

るはりなきまよひのくもをふきはらひ
月もろともにおびむほしのや

相模妙法山星谷寺は天平年中行基此山にこもりて讀經しけるにふしぎや同音に法華經をよ
む聲するがゆる荆棘をかきわけてたづね見れば此尊像あり深くうやまひて當所へ佛閣を造
りて安置す經を讀たまふ佛體なればとて妙法山と名付たるなり



坂東第九番千手觀音
都幾山慈光寺

いはどの、
四里

たのもしやしのおの山にのぼりきて

そのあかつきのえにしむすべ

武蔵都幾山慈光寺の靈驗を頼朝公かく尊びたまへば治承三年足立盛長をもつて鐘を御奉
納あり又奥州の泰衡御征伐の軍中にて奇特あるによつて御供米地千二百町其外佛閣を御建

立ありしと東鑑に見ゆたり



坂東第十番千手觀音
岩殿山正法寺

よしみへ
三里

まふてくる浮世の人をもらさじと

ちかひのあみをひきのいはこの

武蔵岩殿山正法寺千手觀音の靈驗あまたある中に巨摩郡中山天満宮の神事に毎年角力あり
けるに中山の者毎年負るのみなれば中山の者ども此觀音へ多年の耻を雪がしたまへと祈り
ければ仁王門の仁王中山の者に化身して勝をとりたる靈驗は天正十九年二月のことなり



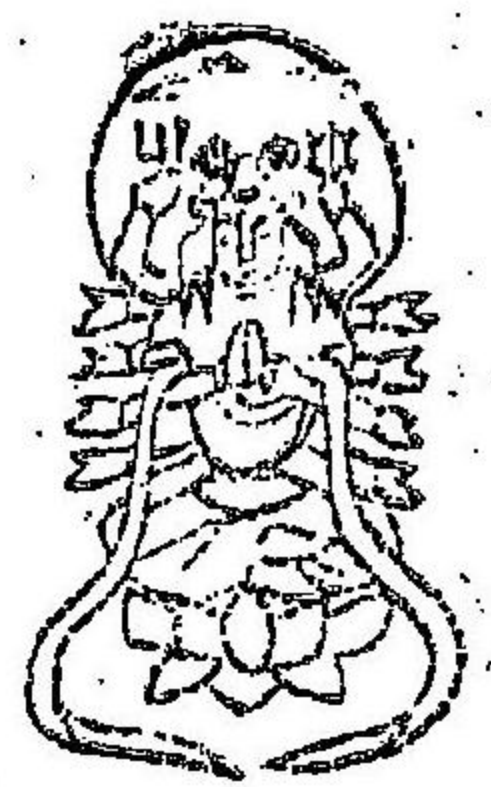
坂東第十一番正觀音
岩殿山安樂寺

トおんトへ
三里
坂上田村麿

よしみよこのりの岩戸をおしひらき

てらすめぐみのかぎりなきかな

武藏岩殿山安樂寺正觀音の尊像はもと宿所の領主吉見兵庫介の守護佛なりしをゆゑわつて岩嶋に納めしに延暦年中田村入北國の逆徒退治のときふしぎに感得して宣命を以て千歳の靈場とけなしけるなり



坂東第十二番千手觀音

花林山慈恩寺

慈覺大師

のりの花にほふばやしのりの寺のりのいけ

しづめるみさへうかむな島

武藏花林山慈恩寺は慈覺大師の開基にして龍女得脱して七島を大師のために浮めたる靈地なり永正年中松山の寺島六といふもの此本島の利益によつて大注進をどげしこと坂東靈

搦記に出たり



坂東第十三番聖觀音

金龍山淺草寺

淺草の二の家

ふらぶらぶらまよりのちははるもあらじ

つみめさくさへまぬるみなれば

武藏東京金龍山淺草寺は人王三十四代推古帝の御時漁夫の網にかゝりて上りたまふ靈像にて閉山は勝海上人なり昔し此地に一ツ家の姥ありて一人の娘をもち旅人を宿らせて石の枕をわたへ釣天井をおとして人を殺し衣服路銀をうばひしが此大士美少年と化して泊りたるところをさとして我娘を殺せしかば俄に蛇身となりてたゞりなせば是を辨天に祭れり



坂東第十四番十一面觀

音瑞應山弘名寺

疫病流行

ありがたやちかひの海をかたむけて

そぐめぐみにさめるほのやみ

武藏瑞應山弘名寺は弘法大師の開基にて本尊は行基大士一刃三禮の荒木作りなり當地に靈験いちじるしき七ツの石あり此御疫癘流行するときは捨に化してそのさへくの池のやみをさやしたまふと云なり



坂東第十五番十一面觀

音白石山長谷寺

みつせは

三

里

獨士高崎氏

みな人のいのるころあはしらいはの
くちのちかひのたのもしきかな

武藏白石山長谷寺の本尊は役の優婆塞からす川の天狗に誘引れて始て山上に登り呪文を唱へしかば十一面の大士現はれしと御結にてはらひたきへは大士は柳の枝に止りふたしび不

勅明王の現れたる姿を刻みて懸石の上に安置せり其後當地の高崎氏が四十二の厄難除に行基大士件の柳を以て此本尊を刻み興へ大難を免しめしなり



坂東第十六番千手觀音

五德山水澤寺

いづるは

廿二

里

伊香保姫

たのみくるころもきよきみづさばの

ふがきれがひをうるぞうれしき

上野赤城五德山水澤寺は高麗國のるくわん僧正の開基にて本尊は國司たかのへ左大將の姫伊香保姫の守り佛なり伊香保姫繼母の妬みによつてあづま川へしづめられんとするとき赤城山の峯より俄に雷電ひらめけは姫のふどころより光りを放つに繼母は目くるめくひまに其場を逃げのびてつひに中將高光に嫁せられけるとなり



坂東第十七番千手觀音

出流山満願寺

ちうせんトハ

八

里

勝道上人の岩屋

ふるまをばるぐこれへたちいづる

わかゆくすゑはいづくなるらん

下野出流山満願寺岩洞の靈像は背じきの自然石なり弘法大師これをはいて斯のときさいはやへ參詣は諸人のなんぎなれば外に御姿をもとめんと祈念せしかばこつせんと大木の杉の上に千手の御姿を現はしたまへば夫を一夜のうちに彫玉ふ是願禮堂の本尊なり



坂東第十八番千手觀音

日光山中禪寺

橋架長兵衛

十一里半

ふだらくやのぼりておがむみづうみの

岸に立木のちかひとさしき

下野日光山中禪寺札所の本尊は開基勝道上人立木千手の像を八尺に刻みてひとへに奇特を現し玉へと念願しければつひに丈夫に成長し玉ひける此所は女人禁制なれば慈覺大師二



坂東第十九番千手觀音

天開山大谷寺

一子源三郎

十九里半

なをさへもふびきめぐみにおほや寺

いのるまことのしるしなるかな

下野天開山大谷寺の本尊は廣大なる岩なれば罪惡おもきものは御姿を拜むことかなはず昔し三州吉田の農人家貧しくして妻を三歳の男源三郎を産して鎌倉へ穢に出しが下野宇都宮の女に馴染みて終に女のおとへ行けるが國の妻は死して源三郎十二歳になり父にあはんと乞食をして普國へ來り此くわんおんの利益によりて父子對面したる靈驗あるなり



坂東第二十番十一面觀

音獨股山西明寺

西明寺時頼

四里半

たづねくる人にめぐみのましこ山

ついのすみかへみちびきのてら

下野獨股山西明寺の本尊は聖武帝國母の御願によつて行基大士作り玉ふ靈像なり御詠歌は北條時頼なりといふ此公政道のため諸國を巡回して當地に來り本尊の由來等を聞て御藍を造營ありしかば益子寺と西明寺とをあらためられしなり



坂東第廿一番十一面觀

さたけへ

音八溝山日輪寺

十八里

殺生石

ふみまよふやみぞのみねの雲晴て

月のひかりをみるぞうれしき

常陸八溝山日輪寺の開山弘法大師此大士の加護によつて鬼賊大猛丸を退治しまた玄翁和尚この本尊の化身より降魔の念珠をさうかり那須野が原の殺生石を打ち碎きし靈驗は天下あ

やねくしるどころなり



坂東第廿一番十一面觀

まじろへ

十三里

音妙福山佐竹寺

駿州の矢作又右衛門

いつまでもすゝなるみよのさただけでら

のりのさかえもかきりなきかな

常陸妙福山佐竹寺は花山法皇の御願元密上人の草創にして本尊は聖徳太子の御作なり慶長八年の夏駿河國ふしまがり村の矢作又右衛門といふ者此邊にて重き病にかゝり十死一生の苦みに當山を信じければ大士層に化して坊につれ來り病なんをたすけたまひ其他いちじるしき靈驗あまたあり



坂東第廿三番千手觀音

さいぬらトノ

六里

佐白山正福寺

ゆめのよのねむりもさむるさしる山

たへなるのりやひくまつかせ

常陸笠間佐白山正福寺の本尊は毘沙明天王の靈刻にて元久二年三月宇都宮掃部介時朝佐白の伽藍を破却して軍營とするを僧徒寺防がんとして刃に死すもの祟りをなす其後時朝笠間長門守となり此城内にこの堂塔を建立してより亡魂のたゞりはやみけるとなり



坂東第廿四番十一面觀

音雨引山樂法寺

つとばへ 四里半

へだてなきちかひをたれもあふぐべし

ほとけの道にあまひきのてら

常陸雨引山樂法寺の本尊は惠心僧都五尺二寸の木像を作りて梁の樂法が持渡りし銅佛を胎内へ納むこの堂内にある杉戸に多門天と芋の莖をつけたる牛をさがしは昔し檀家

より常山のふしん金を盗まれたため芋がらに包みて牛に付たるを見つけて盗まんとする者ありしを多門天取ひしごとありしゆゑなり

坂東第廿五番千手觀音

筑波知足院

三 里 徳一上人



わしの山とひきてこゝにつくばねの

かみやほとけのみくにこそぞなる

常陸筑波知足院は天地開闢の古しへより天神地祇の靈地にして開基は徳一上人大悲の像は弘法大師の作なり往昔常山の龍神六觀音を降り付たる鐘を持來りて六所明神へ獻じ是をくどきは麓まで海水逆のぼりくれば人々水死を恐るゝゆゑ常山の神このかねを封じまた龍神を辨天にまつりてより天下平穩とはなりける

坂東第廿六番正觀音

南明山清瀧寺

なめつはへ 九 里 大悲 水



わがころる今よりのちはにころしな

きよたきてらへまねるみなれば

常陸南明山清瀧寺は行基大士當山の南面にみなざる瀧壺にのぞみて水想觀をなしたまへば
忽然大悲の御姿あらはれ水中に沐浴衆生内外清淨の文淨み 現しかば其御姿をうつし刻
み瀧口に安置せらる其後荻山法皇の御願禮の時けんその山は結縁あまねからずとてよもと
へ御堂をうつさせ玉ひける



坂東第廿七番十一面觀
音飯沼山圓福寺

漁夫長藤清六

たぐぬなきめぐみを何といひぬまの

ふかきちかひはくむ人ぞしる

下總銚子浦飯沼山圓福寺の本尊は神龜五年の春飯沼の清六と潮來の長藏との二人銚子浦鼓
が淵の沖にて網の中に感得せし靈像なり此二人の漁夫つみに御供僧となりて清六は觀音父

長藏は音長と名をあらためける



坂東第廿八番十一面觀
音湯河山龍正院

小田將治

わきいづるくすりの水をなめかわの

ふちにちかひのふねぞうかへる

下總湯河山龍正院は承和五年の夏季候嚴寒の如く人馬死傷夥しければ領主小田將治三寶
に祈願せしに朝日の前といふ美女來りて此小田川の淵よりわき出る甘露を呑ましめれば利
益ありとををしへの如く其甘露を汲しに其中より一寸二分のだとん佛を得てさかつと救ひこ
の佛の基にせらる



坂東第廿九番十一面觀
音海上山千葉寺

のりのたれしめじむはらに花をきて

あまねきかどににほふちばてら

下總海上山千葉寺は其昔し生身の觀世音みづから説法したまふを行基大士聽聞して其眞容を丈六刻みて安置しければ聖武帝のいかんのあまより三界六道青蓮千葉寺といふ御宸筆の額を賜ふ源の頼朝公此の尊の冥助にて東國の武士味方となりし報恩に伽藍を再興せらる



坂東第三十番聖觀音

平野山高倉寺

徳義道人

雲はれてあきばをてらすつきかげの

ひかりをこゝにあふぐたかくら

上總平野山高倉寺は昔し當地に徳義山人といふものあり日夜法華經をよみけるにふる夜乾圖波三のらはれて百濟國より聖徳太子へ送りし觀音の尊像失たりしが今このあまの相に

現れて汝に授くるるとき其あまの相を拜すれば尊像光明をばなつて禮拜の手にとらぬれふこれを行基腹ともりとして大像を作れり今の本尊はすなはちこれなり



坂東第卅一番十一面觀

音大慈山笠森寺

きよみづ

五里半

少女もり女

ひばくるゝあめはふるのゝみちすがら

かゝるたびじをたのむかさもり

東上總大慈山笠森寺の本尊は楠自然の古木にて開基は傳教大師なり當國ながら郡しゝがせなる製作の娘お茂利は此觀音を信じ又尾野上村の觀音にわが田植笠を着せまらせし功徳により朱雀帝の后妃にそなはりひのゝへ堂及び當山の造營を中興せしは世に稀なる靈驗なり



坂東第卅二番千手観音
音羽山清水寺

なごてらへ
廿里中
傳教大師

にいころよにたへなるのりの音羽山

きくくるひこのころきよ水

上總音羽山清水寺は傳教大師諸國を遊歴して此地へ開夜に來りしを當所に鎮座せしむす熊野權乳樵夫に化して社内へ詠ひ夜もすがら佛法を聞て失せたまふ大師夜あけて熊野の社なるを知り歡喜のあまり爰に小庵を結ばれしが後又慈覺大師爰に住て救世の像を作り山城の清水堂舎のことも建立せられける



坂東第卅三番千手観音
補陀洛山那吳寺

うちせきめ

ふだらくはよそにはあらじなごのてら

きしうつなみをみるにつけても

安房補陀洛山那吳寺の本尊は行基大士此海中より感得して元正天皇の御惱を祈りたまふ靈像なり昔し武州多摩郡の木鉢作り某五七人と坂東順禮を約せしが病ひ故に約にはづれしを苦にして死にけり其四十九日に親族打ち寄る中へ某展りけるゆゑみなくふとろきければわれちよの僧と順禮して那吳にて村の順禮に出合ければ門をぞつれ立て展りしといへば其臺を堀かへして見るに竹の杖一本ありしとはふしぎの靈驗なるかな

佛書目錄

- 釋尊御一代記圖會 山田意叟齋著 活版全一冊
- 日蓮大士眞實傳 小川泰金編輯 活版全一冊
- 一休諸國物語圖會拾遺 附 活版全一冊
- 親鸞聖人御一代記圖會 眞宗御開山 活版全一冊
- 弘法大師行狀記圖會 東寺沙門一音編輯 活版全一冊
- 西國秩 父阪東觀音靈場記圖會 原 譽德和上著述 活版全一冊
辻本基定圖會撰述
- 親鸞聖人御一代記繪抄 秋田向榮編輯 銅版全一冊
- 蓮如上人御一代記繪抄 秋田向榮編輯 銅版全一冊
- 西國 三十三所觀音靈場記圖會 秋田向榮編輯 銅版全一冊
- 西國 三十三所觀音利生記圖會 銅版全一冊
- 三國七高僧圖會 內相庵一禪居士編輯 活版全一冊
- 天神記圖會 北野阿僧蓮了著 活版全一冊

明治三十四年十月五日印刷
 同 年十月十日發行
 同 三十五年十一月一日再版發行

京都市上京區富小路三條北入福永町廿八番戶

發行者 中村淺吉

同 市鞍馬町通庚川下ル布袋屋町五番戶

印刷者 細井熊七

同 市同町

印刷所 成廣舍

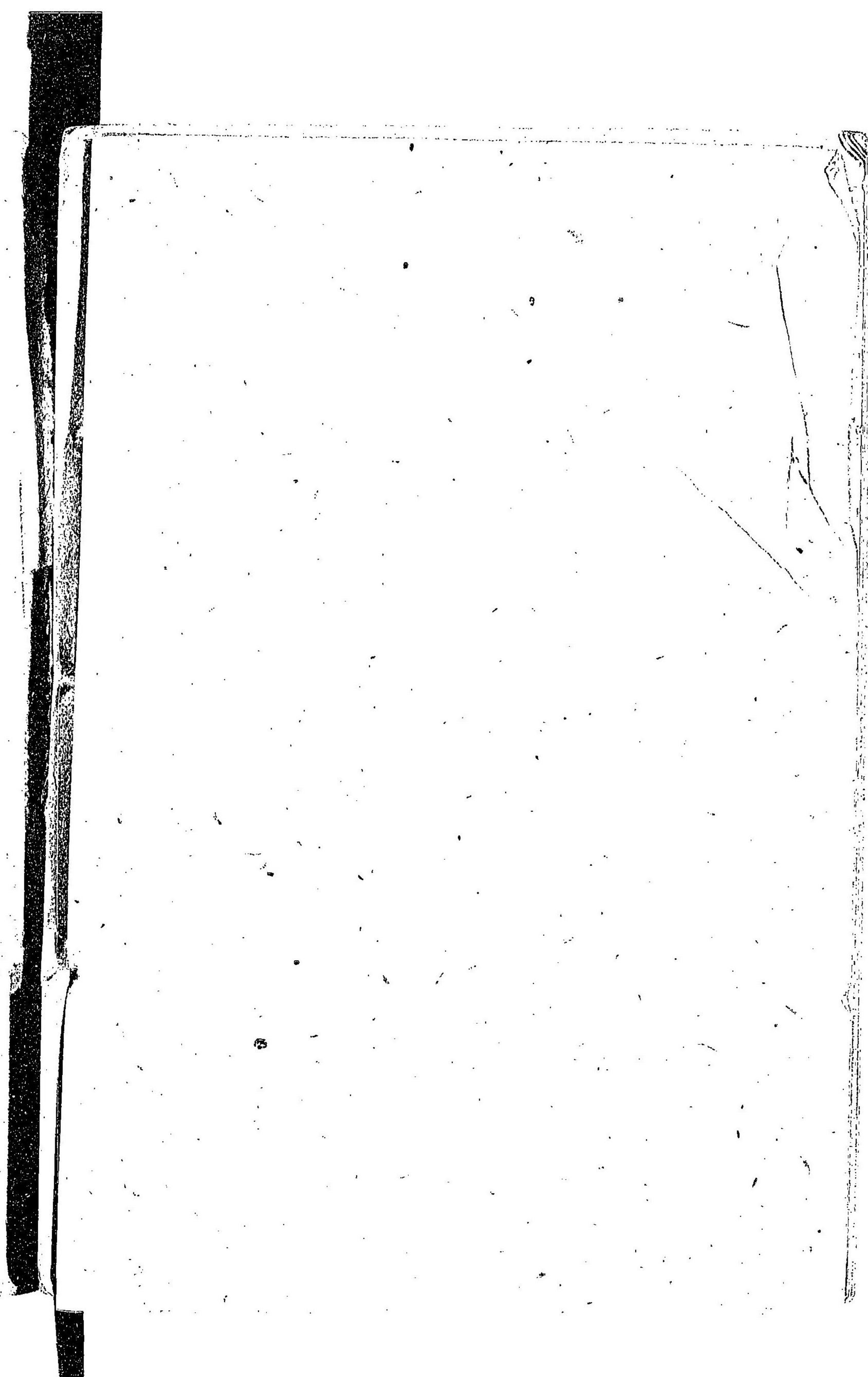
同 市上京區二條通衣棚角

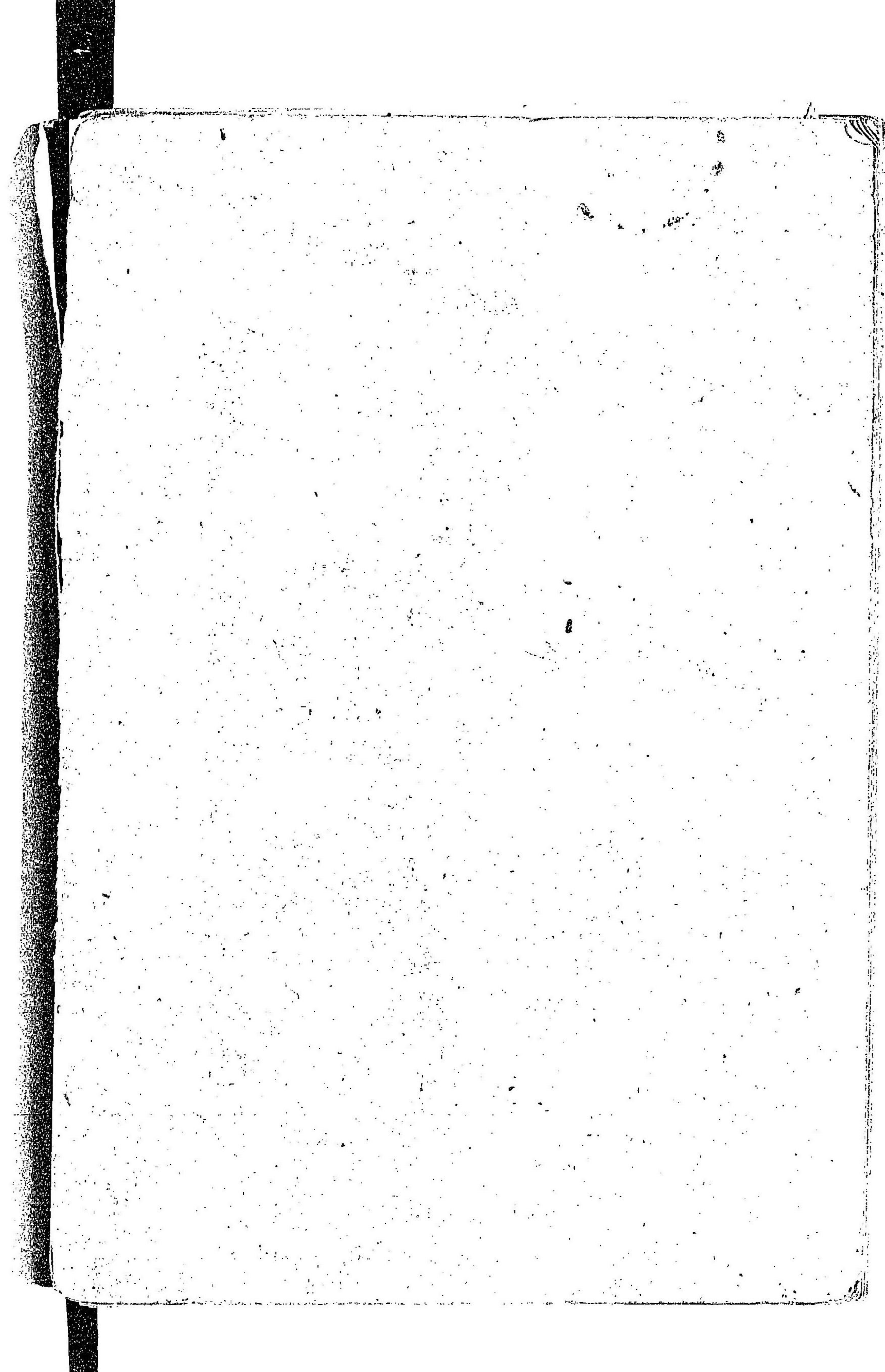
賣捌所 風月庄左衛門

京都市上京區富小路三條北入福永町廿八番戶

大賣捌 風祥堂







輟因茲不堪默止繙看之書雖不多竊考崇舊記探此拾彼
 闕其疑而探正斥其似而撥實間加以口說管見解以和訓
 名曰西國靈場記若脫落宏才手曲賜添削是余所庶幾也
 採於毫洛下九品蘭若窻下

厚譽春鶯欽識

源基定圖會撰次



第一番

開基裸形上人

本尊

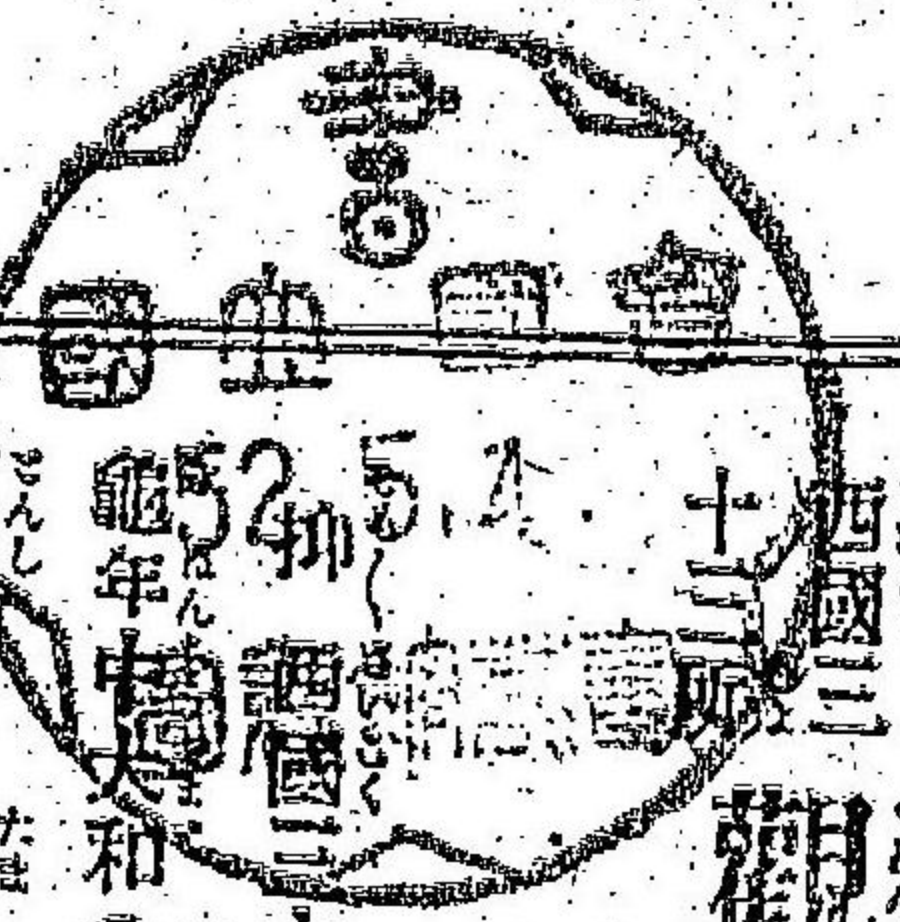
如意輪觀世音

二臂之座像

紀州牟婁郡

那智山

特71
645



西國三所 觀音靈場記圖會一

西國三所順禮の由來

西國三所といふ事はいつの頃より初りて功德何ほどの事ぞ尋ぬるに昔聖武帝神
 龜年轉和の國初瀬寺の開山徳道上人と申は智道兼備の尊き石僧にておはせしがあるとき
 願死なし給ふに怪げなる官人二人上人の御前にきたり我々は煩魔王よりの使なり上人を伴
 ひ申べしとの仰により参りたりと有ければ上人ありがたや煩魔王より御めしとあれば辭退
 申べきいはれなし早々参るべし案内したまへとのたまへば然はとて兩人の官人さきにた
 案内ある渺々たる野山をすぎ行たまふに遙かむかみに鐵城あり釋なく其所にいたり見れば
 大門大殿あり其結構なる事金銀珠玉をちりばめて光りかやく有さま言葉にも述がたく則
 上人を大殿へ請じ煩王出させ給ひて笑みをふくませ給ふ顔はせ美玉のごとく上人はうや
 くしく何なる御事にて召れつるぞやと尋ね給ふに煩王のたまはくさればとよ今日の奉の
 地におめて救世觀音の淨土といふ靈地三十三所あり一度此靈地をめぐるものは地獄に落る
 事なしこれ觀世音は御身を三十三身に分ち縁にしたがひ末世の衆生を濟度なし給ふい



番二世

近江國神崎郡 觀音寺
 本尊 千手觀世音
 御長 三尺
 聖德太子御作並建立



番三世

美濃國谷汲山 華嚴寺
 本尊 十一面觀世音
 開山 豊然上人



此尊像ハ丹波一
 三十三所の其一
 寺なり正觀
 世尊ハ
 て其靈
 去ハの
 結縁の
 結縁の
 結縁の

丹波上林 中照山 日圓寺
 尊 木 聖觀世音
 御長 一丈八歩
 古佛 九千歳之作佛